



異世界に樂園があるという。

エーレと呼ばれるその国には、何百年という寿命を持つデル・グレネ貴神族が棲んでいるそうだ。鮮やかに咲き誇る花々が大地を埋め、鳥たちの美しい鳴声が至上の音楽を奏でる。豊かな実りが舌を楽しませ、人々は飢えることを知らない。老いも病も苦しみもなく、宴のような幸福を約束された霊境——それが樂園エーレ。

本当にそんな場所があるのなら、わたしも行ってみたい——十六歳の娘メイヴェは切実に考えた。

もしエーレに行けたら、まず初めにいちばんきれいな花を髪に飾ろう。黄色や白のほうが見えろと思う——赤毛だから。それから花畑の上を歩いて、丘の頂に上り、お昼寝をする。起きてから貴神族に会いに行こう。わたしはエリルアド小王の娘だから、きっと歓迎されるはずだ。

そこまで空想をめぐらせて、メイヴェは頭を振った——空想するにはもってこいの静かな夕暮れとはいえ、おとぎばなしの国に思いを馳せている場合じゃない。わたしは白昼夢を見るために九月の残照を浴びているわけではないのだから。

メイヴェは町の入り口と広場を結ぶシラカバ並木の真ん中に座り直し、ベラント人の旅人がやってくるようにと改めて祈った。今日は曇り空の多いエリルアド国にしては珍しくからりと晴れた旅びよりの好天だったし、九月中旬といえば、まだ暖かく日も長い季節なので、ベラント人の一人くらい通りかかるだろうと期待して館を出たが、今のところ成果は出ていなかった。

晩鐘を聞いてから座り始め、メイヴェの目の前を過ぎて行ったのは今のところ十人——商品を背負いとぼとぼと歩く中年の商人夫婦、杖をついた巡礼者が一人、働き口を求めている様子の子供が七人——それだけだった。彼らはすべてエリルアド人で、目当てであるベラント人ではなかった。東部や南部と異なり、西部にベラント人はほとんど住んでいないのだから、無理もない。

それでもメイヴェが待っている旅人は憎きベラント人だけだった。彼らが通りかかったら、金を盗る、馬車を盗る、身ぐるみはがす。そしてこの町を出て行くのだ。田舎者とはいえ高貴な小王の姫とは思えない過激な思考をめぐらせながら、メイヴェは拳を握りしめた。

——七九九年、エリルアド国の東にあるベラント国によって、エリルアド国は侵略された。このときより、千年以上前から約八十の小王の群雄割拠によって治められてきたエリルアドの地は、ベラント人の支配下に入る。

当時のベラント人は建築と軍事技術において圧倒的な強さを見せ、各国に進軍していた。まず他を寄せつけない軍事力で国を攻め落とし、次に侵略地の労働力と資源を使ってただちに築城してしまうのが彼らのやり方である。堅牢な城さえ完成してしまえば、侵略された国民が反撃するのは不可能となり、植民地化は成功する。

それから百年後である現在、エリルアドの生活は一変していた。

東部と南部を中心に、ベラント人諸侯がエリルアド小王を倒し、そこにベラント流の領地が再構築されていた。八十あったエリルアド小王の領地は、約半分にまで減少している。

新しいベラント領主は伐採した森の木々や採掘した鉱物資源を、次々とベラント国へ売り渡

した。仕事が増え、一見国が活性化しているように見えたが、気がつくと取り返しがつかないほど国土は荒れ、各地で飢饉が頻発した。

ここエニスレーンはエリルアド西部のコリグ川西岸の上流に拓けた小国である。牧草のすき間に灰色の岩がのぞき、穀物の栽培には向かない不毛の地だった。これといった特産物もなく、領民は至る所に広がる牧草を食む羊や牛を頼りに生計を立てている。つまりこの地方にありがちなぱっとしない小国の一つだった。

西部の一小王であるメイヴェの一族アニェック家は代々エニスレーンを治めてきた。そしてエリルアド人としての誇りを守るため、ベラント人と手を結ぶことを拒み、ベラント人の隆盛後たちまち没落した。領地だけはどうか持ちこたえたが、メイヴェの父アインガスは家を維持していくために家宝である金細工のブローチや黄金の杯などを次々と売り飛ばし、あげく病にかかって逝ってしまった。

父が死んだ日、メイヴェは城を追われた。追い出したのはコリグ川東岸の上流地域を治める小王トゥルベク家である。

アインガスは生前、トゥルベク家の当主ドムナルは信用できないともらしていた。彼は目的のためなら手段を選ばない野心家で、ベラント人と友好関係を結び、領土を繁栄させた。そして東岸下流の小国ブロウがコリグ川氾濫で混乱しているときを見はからって攻め込み、コリグ川東岸全域を手中に収めた。領土の拡大は小王である以上望んで当然だが、災害にあっている土地に攻め入り、領民を苦しませるのは賢政ではない、今まで同盟を結んできた我が国も狙われているのかもしれない――というのが、アインガスの不安だった。

アインガスが息を引き取るとすぐに、その不安は現実のものとなる。ドムナルは直後にエニスレーンにのり込み、曾祖父の代に縁続きであったことを主張した。父を失ったばかりのメイヴェはトゥルベク家嫡男のダーモット――両国の同盟の証として結ばれた政略結婚とはいえ、彼はメイヴェの婚約者だった――に迫られ、無血開城するしかなかった。

ドムナルは侵略すると同時に、エニスレーンを他のトゥルベク領同様発展させると宣言し、抵抗者たちを黙らせた。財力にものを言わせて、ただちに橋や道路、船着場などの整備を始め、町のあちこちに倉庫などを建てている。仕事が増えたことで町は活性化し、近隣の町からも労働者が流れこみ、店や酒場も以前より賑わっているというのが現状だ。

一方のメイヴェは町のはずれの小さな館を与えられ、護衛や侍女と称した見張りをつけられ、監獄のような暮らしを送っていた。

ところが今朝唐突に、神の救いの手が差しのべられたのである。朝起きると見張り役の二人が姿を消していた。近頃二人で何かこそこそ相談していると思っていたが、どうやら金細工の髪飾りを盗んで、駆け落ちしたらしい。

わずかに残っていた財産を失い、絶望していたメイヴェだったが、昼過ぎには開き直った。ここまで人生八方ふさがりという事態を迎えたからには、起死回生を図るしかない。そこでベラント人への復讐を兼ねた盗賊の真似事を思いつき、道で座り込んでいたわけだった。

日が傾き始めた。メイヴェのじりじりした思いを慰めるかのように、今日の日没は格別に美しかった。ここはゆるやかな丘の上なので、町を添うように流れるコリグ川や生い茂ったブナの

森が夕日に照らされるのを存分に眺めることができた。陽は深緋色を濃くし、たなびく雲を翳りのある茜色に映し出している。斜陽はメイヴェのもとにも降りて、道の両脇に並ぶ優美なシラカバを赤く染め上げていた。

メイヴェはゆっくりと立ち上がり、うしろを振り返った。視界に広がるのはエニスレーンの町だ。森の間に点在するかわいらしい民家の屋根、市も上がり人影が少なくなった小さな広場。そして南方の山頂には、かつてメイヴェが住んでいた城の円塔の先端が望めた。ここからでは森に遮られてよく見えないが、四つの円塔の下には居館に礼拝堂、厩、使用人の小屋がある。ささやかながらメイヴェを守ってくれていた城だった。

メイヴェはベラント人を待っていることを忘れて、刻一刻と変わりゆくエニスレーンの夕暮れに見惚れた――美しい町だと思った。

ぱっとしない町なんかじゃない――ここは我がアニェック家が代々育ててきた自慢の町だ。本当は出て行きたくない――わたしはエニスレーンを愛している。でも、侵略者ドムナルの治めるエニスレーンで、味方になってくれる家臣一人いない粗末な館に軟禁されながら暮らすことは、これ以上耐えられそうにない。亡き父アインガス小王の娘であるという誇りを守るためには、町を出る以外に方法がない。

メイヴェは涙でかすむ目をしばたたかせながら、懸命に眼下の町並みを見つめた。目に焼きつけておこうと思った――ここを出ても、いつだってエニスレーンを思い出せるように。

そのとき背後で車輪の回る音が聞こえた。

メイヴェはぱっと振り返った。耳をすませながら、地平線に目を凝らす。なだらかな起伏を描く道の上に、こちらに向かってくる幌馬車がのっていた。灰色の岩に車輪がぶつかるたび幌を大きく傾かせ、倒れそうになりながらも、次第にこちらへ近づいてくる。メイヴェは身震いをしてから、その場に腰を下ろした。

来た――やっと旅人が来た――きっとこれが最後のチャンスになる――きっとベラント人に違いないわ！

メイヴェは期待と不安を抱えて右腕を天に向かって上げ、大きく振った。

御者台に乗った人影の輪郭が鮮明になってくる。逆光で顔はよく見えないが、広い肩幅から男だということだけはわかった。幌馬車はどんどん近づいて来る。大声で言った。

「止まってください！ 助けてほしいのです！」

馬をいさめる声と同時に手綱が引かれ、一頭立ての粗末な幌馬車は、木立二本分向こうに止まった。ベラント人らしい短めの栗色の髪 of 男が御者台から首を伸ばし、穏やかな声をかけてきた。

「どうかしたのですか」

きちんとした教育を受けた者の言葉遣いだった。メイヴェは馬車や身なりとの差に違和感を覚えながら続けた。

「ころんで足を挫いてしまったのです。身動きがとれず、どなたか親切な方に助けていただこうと……」

長衣の裾をちらりと上げて、ぶどう酒で赤く染めた足首を見せた。男は見事に狼狽して、御者

台から飛び下りて駆け寄り、優雅な弧を描いて手を差しのべた。

「ずいぶんはれているようですね」

「ええ、痛むんですの、とっても。それであの、あなたはベラント国からいらした方？」

「そうです。わたしはベラント国生まれのベラント人で、ルーフィス・リードと申します。幼いときに家族と共に移民としてこの地へ参りました」

メイヴェの頭の中では喜びの鐘が打ち鳴らされていた。ベラント国からの移民ならまさに仇敵、カモにするには願ってもない相手だ。

ルーフィスが訊ねた。

「失礼ですが、あなた様はしかるべき高貴な方とお見受けしましたが……」

「わたくしはメイヴェ・アニェックと申します。由緒正しいエリルアド小国エニスレーン小国王アインガスの娘ですわ」

「ああ、やはり立派な血筋の方でしたか」

ルーフィスは感心したように頷いた。

「さあ、手を貸しましょう。まもなく日が落ちてしまいますから、急いだほうがいいですね。お立ちください——立てますか」

「大丈夫です。ありがとうございます。助かりますわ」

メイヴェは油断を誘うために微笑み、ルーフィスの手をつかんで立ち上がると、横目で値踏み始めた。

年齢は十八、九といったところだろうか、ひょろりと背が高い青年である。ベラント人らしい灰色の瞳は控えめな光を湛え、すっきりと通った細めの鼻梁は清冽な印象を与えた。つまりカモにふさわしい人のよさそうな顔立ちだということだ。

しかし、ここまではいいとして、服装と態度が引がかかった。粗布の丈の短い上着にズボン、革靴という身分の低い者の服を身につけているのに、言葉遣いが妙にていねいで、物腰に気品が感じられるのはどうしたわけだろう。

もとは貴族だったのが落ちぶれて、自由人になったのかもしれない。野心を胸に抱いてこの地に渡ってきたが、夢破れて食うや食わずの生活を送る移民も多いと聞く。それでもベラント人ならいくらかの路銀は持っているだろうと期待しつつ、自分はこうはなりたくないものだと斜めに視線を送った。革の鞆に収められた腰の短剣に目を移し、この場で強盗することを諦めて言った。

「わたくしの館に送っていただけるかしら」

「もちろんです。喜んでお送りしましょう」

ルーフィスにはっこりと微笑んで、ますます人のよさそうな顔をした。メイヴェはダンスの申しこみを受けるかのようにルーフィスに手を預け、痛みをこらえているといったふうにいちおう顔をしかめて見せてから、御者台に乗った。ルーフィスはメイヴェを乗せ終わるといったん馬車を下り、馬の背を軽く叩いてから、隣に回ってきた。

メイヴェはそのあいだに急いでうしろを振り向き、垂れ下がる幕のすき間から、薄暗い幌の中を覗き込んだ。

二つの箱が並んで置かれている。そのうちの一つは農作物を収める箱と大差ない、うす汚れた木箱だった。あの中にはおそらく身の回りの品が入っているのだろう。

しかしもう一つは奇妙だった――荷台の半分を占める大きな長持が、どっしりと置かれていたのである。

背後からルーフィスが訊ねてきた。

「幌の中が気になりますか」

慌ててメイヴェェが振り向くと、ルーフィスはメイヴェェのとなりに腰を下ろそうとしているところだった。言葉こそしていねいだったが、わずかに眉根が寄せられた顔には、警戒の色が浮かんでいる。メイヴェェは前を向いて座り直し、長衣のしわを整えながら言った。

「あら、いいえ。何を運んでいるのかしらと思っただけですわ。ずいぶん立派な長持なのね。中には何が入ってますの？」

「女性の喜ぶような物ではありませんよ。さあ、参りましょう」

長持に女性の喜ぶ物が入っていないわけがない。この男はわたしをだまそうとしているのだ、とメイヴェェは内心憤慨したが、表には出さなかった。ルーフィスも何事もなかったかのようにしなやかに手綱を振るい、馬を歩かせ始めた。

巣に帰る鳥が暗い茜色に変わった空を横切っていった。陰が濃くなり始めた夕暮れの中、一台の幌馬車が進み、両脇に茂るシラカバの木々がゆっくりとうしろに流れ出す。ルーフィスは無言で手綱を握っており、聞こえるのは馬の蹄と車輪が地面を駆ける音と、二つの箱が荷台にぶつかる音だけだった。

あの長持の中にはいったい何が入っているのかしら、とメイヴェェは考えた。彫刻などの細工は施されていないが、カシ材の一枚板の蓋はテーブルのような重厚感があり、留具は頑丈な錠前だった。

だけど――とメイヴェェは首を右にひねった。かなりの重さがある長持なんて荷運びには不向きだ。ルーフィスはこう見えて織物関係の商人なのかもしれない。こんなに立派な長持なのだから、高級品専門、顧客はベラント人貴族だけ、中に入っているのは手に吸いつくような絹織物か仕立てのよい流行の服ということもありうる。

でも――とメイヴェェは首を左にひねった。高級な織物を扱っている商人なら、護衛を一人も連れていないのはおかしい。高価な品を扱う商人は、馬に乗った護衛兵をぞろぞろ連れて旅することもある。道中盗賊に襲われるようなことがあれば、商品はもちろん命まで失うことになるからだ。しかしルーフィスは腕に覚えがあるようには見えず、商品どころか自分の身さえ守れないように思われた。

護衛兵がたくさんいてはかえって目立つからだろうかと考え、メイヴェェがもう一度首を右にひねろうとしたとき、ルーフィスが口を開いた。

「どうしました？ 肩でもこっているのですか」

「あら、いいえ」

メイヴェェがあわてて微笑むと、ルーフィスはあきれたような声で言った。

「姫君が供も連れずに道に出るなんて、無茶をなさいますね。どうしてあんなところにいらした

のですか」

「そんなことあなたに言う必要はないでしょう」

都合の悪い質問に答えるわけにはいかず、メイヴェは姫君らしくつんと鼻を上げ、高慢に払いのけた。ルーフィスは素直に質問を控え、再び沈黙する。メイヴェは質問されるよりも質問したくてたまらなかったが、下手につついて警戒されることは避けたかったので、口を閉じておいた。はずまない会話は終わり、二人の間を流れる音は、再び馬の蹄の音と車輪の音、そして幌内の長持の揺れる音だけになった。

シラカバの木立が途切れると、視界が開け、水音と共に二本の橋が見えてきた。上流で二手に分かれたコリグ川の支流が、ここで橋に挟まれた中州をつくっている。橋板から水面は大人の身長ほどで、水深は腰まであり、上流から勢いよく流れてきた清水はここでひと休みするかのよう、速度を落とす。

一つ目の橋を渡ると、そこは処刑場だった。川に囲まれた広場はかつてヤナギの木が細かい枝を張りめぐらせていたが、今は抜かれて跡形もなく、青々とした草だけが地面をおおい、人工的な印象を与えている。周囲からぽっかりと浮き上がったこの広場は見晴らしがよく、右手中央には絞首台が見えた。L字を逆さにして地面に突き立てた角材に縄は吊るされておらず、風が吹いても揺れるものはなかった。

ルーフィスは夕闇に黒く浮かび上がる絞首台にちらりと目をやったが、すぐに目を背けた。馬は鞭を当てられ速度を上げ、二つ目の橋を渡り、幌馬車は処刑場と何の関わりももたず通り過ぎた。

橋を渡るとすぐ、道の両側は覆いかぶさるようなブナの森に入り、一瞬にして夜になったかのように暗くなった。右手の三本の枝道をやり過ごし、メイヴェは次に現れた左の小道を指示した。この先に住むメイヴェしか使わない寂しい私道で、ブナの厚い葉が空を覆い、ツタがわずかなすき間をふさぎ、昼でも鬱蒼とした気味の悪い森をつくっている。両脇から突き出される枝に邪魔され、岩を取り除いていない悪路に揺らされながら、馬車は狭い道をどうにか進んでいった。

悪路の果てに森が終わり、目の前がひらけた。

「あれですわ、あれがわたくしの館ですの」

そう言ってルーフィスの顔を見ると、館を見て一瞬安堵の表情に変わったが、近づくとつれ、顔をこわばらせた。

逢魔が時の空の下、二つの対照的な建物が暗い影となり、周囲をカラスが飛び回っていた。左手前にある漆喰の小屋は微風を受けただけでがたがたと震え、戸がばたばたと開閉している。一方、正面奥にある石造りの居館は、まるで別の世界に存在しているかのように、超然とそびえている。

この館はかつてアニェック家の財産だったのだが、今はトゥルベク家の所有となってしまったものだ。以前貸与していた平戦士が出て行ってからは主もなく、ほったらかしにされ、メイヴェがここへ来たときは館というより廃墟と呼ぶほうがふさわしいほど荒れていた。現在はトゥルベク家から派遣された職人によって、破れかけたドアが張り替えられ、屋根の雨もりを直され、壁のすき間に詰め物をされて、何とか住まいとしての体裁を整えてある。

ルーフィスの喉がごくりと鳴り、そのあとかすれた声が聞こえた。

「こ……こちらがお住まいですか」

「ええ。それが何か？」

「いえ……」

「そう、そのまま真っすぐ、小屋と畑の間を通過して、居館の前につけてくださいな。ありがとう、本当に助かりましたわ。もちろん館の中まで連れて行ってくださるわね？」

メイヴェェが威厳をこめて命じると、ルーフィスは素直に居館の前に馬車を止めた。そのあとすぐに御者台から下りて回り、メイヴェェに手を差し出す。この男は根っからの騎士道精神の持ち主なのか、どんな状況でも礼節や義務を忘れないようだ。

メイヴェェは馬車を降りるとき、幌の中にさりげなく視線を走らせた。とたんにルーフィスの様子が変わり、鋭い声で言った。

「積荷が気になりますか」

「積荷？ いいえ」

「わたしはあなたの気高いお心におすがりしたい。積荷には指一本ふれないと約束してください。お願いできますか」

「あら、もちろんですわ。約束など必要ありませんことよ。わたくし、決してさわりませんわ。積荷なんて興味もないのですもの」

「信頼してもいいのですね」

「大丈夫ですわ」

ルーフィスが強い口調で念を押し、メイヴェェは微笑みながら請合った。これはお宝が入っているから盗ってくれと言っているようなものだろう。

メイヴェェはルーフィスの腕に支えられながら、障害物のない平地をつまづくように歩いた。ルーフィスは「大丈夫ですか。痛みますか。もう少しですよ」としきりに励ました。

厚いドアを開けると、かびの臭いが鼻をついた。小さな館には取次ぎの間もなく、すぐに居室となっている。家具は食卓兼調理用のテーブルが一台と椅子が二脚だけの簡素な部屋だった。

メイヴェェはテーブルにつかまって、なんとか椅子に腰かけてみせ、これでようやく安心したというように顔を上げた。

「ありがとう、助かりましたわ。あなたも旅でお疲れでしょう。我が家でひと息入れてはいかがかしら」

「いえ、わたしは……先を急ぎますので」

「そんなことおっしゃらないで。ただいま侍女を使いに行っておりまして、大したおもてなしはできませんけれど、わたくしに客人を追い返すという恥をかかせるおつもりはないでしょう。そんなことをしたらエリルアド小王アニェック家の名折れですわ」

「いえ、本当に……」

「どうか休んでいってくださいませ。よろしいわね」

「では……少しだけ……」

メイヴェェがびしりと言うと、人のよさそうなカモはあっさりと押しきられた。

「そろそろ灯りが必要ですね。ろうそくをともしていただけるかしら」

メイヴェが頼むと、ルーフィスはテーブルの向こう、鍋のかかっている暖炉から火をとって、テーブルの上の鉄製の燭台に灯りをともした。

この程度の館では取り次ぎの間がないどころか城のように広間と台所の区別をする余裕すらなく、すべて一部屋ですませる。汚れていることよりも、この狭さがいつもメイヴェを憂鬱にしたが、ろうそくの柔らかな炎がふくらみ、室内を暖かく見せると、いくらか気持ちも明るくなった。

「少し休んだら楽になりましたわ。ルーフィス様も椅子におかけになってくださいな。わたくしは奥の部屋で足に湿布を当ててまいります。それからお食事をお持ちしましょう」

いちおう足を引きずるようにして、左手の寝室に入り、扉を閉めた。とたんに早足で奥に進み、ベッドの脇に置いてある瓶の水に亜麻の端布を浸す。足首に貼りつける。細長い布を巻く。完了。寝室を飛び出した。カモには逃げられていなかった。

湿布を貼ったのだからもう治ったのだと言わんばかりにメイヴェは堂々と歩いた。ルーフィスは言われたとおり椅子に座ったまま、目を丸くしてメイヴェを見た。

「ず……ずいぶん早かったですね」

「そうかしら。さあ、お食事にしましょう」

「そのことなんですが、わたしは遠慮したいと思っていますのです」

「なんですって？」

「その……もう陽も落ちましたし、先を急いでおりますので、お暇したいと存じます」

ルーフィスはそわそわとして、腰を浮かせた。メイヴェは片手を上げて押しとどめ、再びルーフィスを座らせた。

「先って宿のことかしら。よろしければ小屋がありますので、使っていただいてもかまいませんことよ」

「小屋……というと先ほどの……いえ、そんなご好意に甘えるわけには……」

「わたくしがかまわないと言ってるの。それで何が不満なの？」

「でも……」

メイヴェは苛立ってテーブルを叩いた。「あなたってひどい方ね！ エリルアド人の招待を断るなんて、侮辱ですわよ！」

本音を言えば、侮辱などという問題ではない。何としても眠り草入りの食事をとってもらわなければ、なんのために道端の座りこみを続けていたかわからなくなるからだ。

ルーフィスは弱りきった様子で、テーブルの上に肘をつき、掌をこすり合わせた。

「……じつは連れがいるのです」

「連れ？ お連れ様がいらっしゃるの？」

「ええ。その、先ほどは一緒におりませんでした。わたしのあとを追ってまもなくここに来てしまうと思うのです。それで、二人もご厄介になるわけにはいかないと……」

いくら辞退のための嘘をつくにしたって、もう少しましなことを考えられないものだろうか。あとをついて来た者などいなかったし、その連れがこの館を知るはずがない。メイヴェは困惑をとおり越して腹を立て、声を尖らせた。

「ご心配には及びませんわ。その方も同席していただいてけっこうよ」

「いえ、本当に……」

「これ以上の話し合いは必要ないわ。黙って食べなさい」

「いえ、本当にその、だめなのです……彼は食事をとらないだろうと思いますので……ひどく少食なので……」

そのときだった。ノックもなくドアが叩きつけられ、一人の少年が血相を変えて転がりこんできた。

「ルーフィス！」

メイヴェの脳裏は驚きで一瞬真っ白になったが、すぐに理解に達した。これが連れということだろう。

十歳くらいの痩せた少年は戸口で立ち止まり、ルーフィスの姿を見つけると、目に見えて安堵した。それから奇妙に光る薄紫色の瞳でメイヴェをじろじろと眺め、顎をしゃくった。

「ルーフィス、この人誰？」

「失礼な口のきき方はよせ。この方はエリルアド小王の姫君メイヴェ様だ。足を怪我して、道で往生していたところを助けて差し上げたんだ」

ルーフィスは少年をたしなめてから立ち上がり、少し大きめの灰色の上着とズボンを身につけている少年の脇に行き、華奢な肩に手を置いた。

「メイヴェ様、この者がわたしの連れのディアンと申します」

ディアンと紹介された少年はエリルアド人にもベラント人にも見えず、妖精と呼ぶのがもっともふさわしいような美しさだった。肌はきめ細かく透き通るように青白く、まっすぐに流れ落ちる黒髪は城仕えの小姓のように肩の上で切り揃えられ、こちらも簡素な旅装に不釣り合いである。

この子はおそらく移民だろうと、メイヴェは見当をつけた。ベラント国王がエリルアド宗主になってからというもの、この島には大陸で食えなくなった者や野心を胸に抱いた者が大勢移住してきている。ちょっと大きな町に行けばここがもとはエリルアド人の土地だったとはわからないほど、様々な国の言葉がとびかっているご時世だ。この子の両親は夢破れた移民で、やむを得ず息子をベラント人への奉公に出したといったところだろう。

従者のくせに身分をわきまえない少年の態度にメイヴェは腹を立て、ふんと鼻を鳴らした。

「たしかに従者を同席させることはできませんわね。この者には納屋で食事をさせましょう」

ルーフィスはメイヴェに向き直ると、きっぱりと否定した。

「いえ、彼は従者ではないのです。対等なわたしの連れです」

「対等な連れですって？」

メイヴェはわざとほっほっほと笑い声を立てた。

「おかしいことをおっしゃるのね。子供、しかも食いはぐれた移民でしょう？ ベラント国の方は変わったご趣味をお持ちですわねえ」

「あんたこそ何気どってんの？　こんなぼろ家に住んでいるお姫さまと、落ちぶれた貴族のルーフィスがいていねいな言葉づかいで話しているのを聞いてると、胸くそ悪くて吐きそうになるよ」

急所を一突きされた。メイヴェは言葉を失い、青ざめる。言い終えたとたんディアンはルーフィスの横からさっと逃げ、テーブルの向こうに回った。ルーフィスはすでにディアンが消えたあとの空をつかみ、テーブル越しに声を張り上げた。

「身分の高い女性に失礼なことを言うなといつも言っているだろう！　君はいつまでたっても作法を覚えられないんだな！　メイヴェ様にお詫びしろ！」

「いやだね！　だいたいこんな下品な目つきの女が姫君なもんか！」

「目つき？　目つきがどうしたと言うんだ？　いいかげんに……」

「この女、何かたくらんでるよ。そうだろう、姫さま？」

メイヴェは言い返すことができなかった。そんなメイヴェを見てディアンが満足そうに微笑むと、冷えた夜気がすべりこんだようにメイヴェの背筋を冷やした。

少年は一見少女のような甘い顔立ちだったが、それは人を拒絶する美しさなのだと気づいた。この子には大人を魅了する無垢な子供の愛らしさに欠けている。病もちと疑われるほど青白い肌に灰色の服がとけて見えても乳の温もりはなく、冷たく感じられるばかりだった。それに漆黒の髪と、奇妙にきらめく薄紫色の瞳、鮮血のような唇が彩りを添えていけば、いくら美しくても頭をなでてやりたいとは思わない。

ディアンは整った大きな瞳をくるりと動かし、微笑みながらメイヴェを見上げた。

「あんた、どうしてルーフィスを連れこんだの？　どういう魂胆なの？　もうばれたんだから、白状しちやいなよ」

メイヴェは思わず声をふるわせる。

「ぶ、無礼な……っ」

「よさないか、ディアン！」

ルーフィスが腕を思いきり伸ばして、テーブル越しにディアンの胸ぐらをとらえた。

「何するんだよ！」

「君みたいな恥知らずがこの家に入る資格はない！」

ルーフィスは手を離さずテーブルを回り、うしろ襟をつかみ直した。ディアンは細い四肢を振るって抵抗したが、ルーフィスはディアンの首に腕を回し、そのままドアに引っ張っていく。

「はなせよ！」

「少し頭を冷やしたまえ！」

ルーフィスはディアンを怒鳴りつけて外に放り出し、急いでドアを閉めた。ドアに体を押しつけて開かないようにすると、外から少年の悪態が聞こえてくる。

「ばかルーフィス！　騙されたって助けてやらないからな、くそつたれ！」

メイヴェは突然の出来事にあっけにとられ、閉じられたドアを呆然と見つめていた。まもなくディアンの走り去る足音が聞こえ、遠くなって消えた。

ルーフィスは深くため息をつき、体の力を抜いた。ドアから離れると、メイヴェにひざまずい

て頭を垂れる。

「連れが大変失礼なことを申しました。どうかお許してください」

丁重な謝罪を受けて、メイヴェはすぐ平静をとり戻した。エリルアド人はとどめを刺されても立ち直りが早いのである。

「生まれの卑しい者に礼儀作法を教えるのは難しいもの。今後はあなたもものの道理を理解して、従者として厳しく躡ることですわ」

ルーフィスは肩を落として俯いた。メイヴェは邪魔がいなくなってほっとし、再び計画を実行に移すことにした。

「もうよいのです。立ち上がって椅子にかけなさい。パンとよく煮こんだ熱いスープを差し上げましょう」

「慈悲深いお言葉に感謝します」

ルーフィスは小さな声で言って、ゆっくりと立ち上がった。すっかり減入った様子でテーブルに手をつき、椅子に座る。

メイヴェはルーフィスが腰を落ち着けたのを見届けると、暖炉の前に行って、吊り鍋の中を覗きこんだ。エンドウ豆と塩漬け肉のスープは煮詰まってすっかり水分が減り、鍋底は少々焦げついている。侍女がしていたことを思い出しながら、昼間鍋に水と肉と豆を入れて火にかけ、放置しておいたものだ。

メイヴェは肩越しに背後をうかがい、ルーフィスが頭を垂れテーブルに視線を落としているのを確認した。さりげなく暖炉の上の棚に手を伸ばし、眠り草の粉末の入った小さな壺を下ろし、胸の前に隠す。

この眠り草は城にいたとき、大陸で修行をしたというさすらいの薬師から買いつけた、死なない程度に眠らせるという逸品である。濃緑色の粉末を吊り鍋の中に振り入れて大きじでかき混ぜると、焦げて褐色だったスープがさらに黒くなり、湯気とともにくせのある悪臭を発し始めた。

ルーフィスは顔を上げ、怪訝そうに訊いた。

「……この香りはいったいなんなのですか」

「あら、ご存知ありませんの。香草ですわ、西部の料理にはつき物の」

「いや、まったく……知りませんでした」

「それじゃこの機会に召し上がってみるといいわ。ちょっと苦いかもしれませんが、滋養にもよいと言われてますの。旅の疲れもきっととれますわ」

メイヴェが落ち着きはらって答えると、ルーフィスは促されたように頷いた。

そこまできて、メイヴェははたと気がついた。あの小生意気な少年にもスープを飲ませなくてはならない。大切な計画の前には、ああいううるさい子供こそ寝かせてしまうに限る。メイヴェは精いっぱい優しく言った。

「わたくしには慈悲の心があります。少年を呼んで来なさい。一緒に食事をさせましょう」

「その必要はありません」

「わたくしは許したと申し上げたのです。子供はお腹が空くと癪癪を起こすもの。罰を与えるほどのことではありませんわ」

「いいえ、そうではないのです」

ルーフィスは言葉をとぎらせてから、覚悟を決めたようにはっきりと言った。

「彼は少食で、ほとんど食べないのです。ですから夕食をお断りしてもメイヴェエ様の恥にはなりません」

「でも……」

「彼はいただきますません。わたしが同席しますので、どうかご容赦を」

ルーフィスは立派な騎士のように威厳ある態度で断った。ここまできっちりと辞退されては誘いようがないし、これ以上強く勧めたら不審に思われるかもしれない。メイヴェエは無理にスープを飲ませるより、勘の鋭い少年が戻ってくる前にルーフィスを片づけることに決めた。

深皿にスープを盛ると、臭気を含んだ湯気が立つ。豆と肉は焦げて黒ずんでいるが、食べても死ぬことはないだろう。そして濃緑色をした眠り草の粉末が頼もしく踊る。

「さあ、召し上がれ」

厚く切ったパンと笑顔を添えて、テーブルの上に深皿を置いた。ルーフィスはしばらく難しい顔で深皿の中身を見つめていたが、やがて意を決したように乾いてかたくなったパンを割り、深皿に浸して口に運んだ。わずかに顔をしかめながらも、礼儀正しくすぐに押し隠す。焦げのせいか眠り草のせいか知らないが、きっとまずいのだろう——というより、おいしいわけがない。

「……たしかに滋養がありそうな味ですね」

ルーフィスは精いっぱい賛辞を述べて、脂汗をにじませながら食事を続けた。メイヴェエは目の前のベラント人が少しだけ衰れに思われた。かさかさのパンを水分なしで食べるのは難儀だが、あんなスープを口にするくらいなら、パンを喉につまらせたほうがましかもしれない。

深皿の中が半分ほどになった頃、ルーフィスは手にしていたパンを突然テーブルに落とした。自分に何が起きたのかわからないといったように口元を押さえ、しきりに頭を振る。瞼の落ちかかった灰色の目をメイヴェエに向けた。

「急に眠気が……申し訳な……」

木製の深皿が音を立てて床の上に転がり、濁った液体がしみのように広がる。ルーフィスは詫びの言葉を最後まで言い終えないうちに、テーブルに突っ伏して眠り始めた。

メイヴェエはテーブル越しに手を伸ばし、やわらかい栗色の髪を撫でてやりながら囁いた。

「いいのよ。ゆっくりお休み」

メイヴェはドアに駆け寄って細く開け、頭だけを出して外の様子を窺った。

あたりはすっかり暗くなっていたが、あと三晩で満月という明るい月明かりのおかげで、周囲の様子は難なく知れる。いつのまにか風はやみ、ドアの前に止めてある馬車と右手奥の小屋はひっそりと静まり返っていた。少年がまだ戻っていないことを確かめて、メイヴェはドアを閉めた。

暖かくなってきた室内で、ルーフィスはテーブルを枕にしたまま、気持ちよさそうに寝息を立てている。メイヴェはそっと近づいて、ベルトごと革袋と短剣を取り上げた。

テーブルの上で革袋を逆さに振ると、一枚の銀貨と七枚の銅貨がわびしげな音を立てて転がった。これでは馬一頭買えやしない――メイヴェはがっかりした。しかしはした金でも貴重な軍資金だと思い直して、袋に金を戻す。他に何かないかと、ルーフィスの袖や胸の上を軽く叩いて探してみたが、何も見つからなかった。

メイヴェは盗ったベルトを自分の腰に巻き、左に短剣、右に革袋を下げた。苦労したわりに大した戦利品でなかったと思うと、少々落胆した。

しかしメイヴェは落ちこみ続けられない性格である。長持には何か入っているだろうし、最悪でも幌馬車ごと盗んで逃げればよいと考えて、用意しておいた麻の食料袋を左手に、テーブルの上の燭台を右手に持ち、外へ出た。

雲一つない夜空を仰ぐと、無数の星が銀河をつくり、わずかに欠けた月から月光が降りそそいでいる。

ろうそくの炎が消えないように掌で風よけをつくりながら、はやる気持ちを抑え、幌馬車に向かって歩いた。メイヴェが幌馬車の脇を通り過ぎると、繋がれたままの馬が驚いて首を振り、たてがみを揺らす。

まずはあの長持だ――馬車のうしろに着くと、麻袋を足元に放り出し、厚い亜麻布の幌をめくって燭台をかかげ、中を覗きこむ。

長持一つに木箱一つ。先ほどと同じく荷台にあるのだが、何かが引っかかった――長持の蓋がずれている。

メイヴェはあわてて荷台に乗って、天井の低い幌の中を這い、長持の重い蓋を持ち上げた。留め金ははずれており、簡単に開けられる。

手を突っこんでみると、ごわごわしたものが手に触れた。広げると毛のやせた黒い上着だった――袖も丈も短いので、少年のものだろうとわかる。上着の他には何もなく、使いこんでやわらかくなった布が底に敷かれているだけだった。

しかしこの大きな長持が空だったとは思えない――メイヴェは訝った。ルーフィスのあの警戒ぶりは尋常ではなかったからだ。

布の表面をなでてみると、何か重いものが載せてあったかのように押しつぶされている。やはり何か品物が置かれていたのだ。今はないとすると盗まれたのだろうか。町はずれのこの館に来る者はいないはずだから、領民のしわざとは考えられない。とすると、あの少年が品物を持って

逃げたのかもしれない。

メイヴェは焦ってもう一つの木箱を開けたが、案の定身の回りの品が入っているだけだった。端がすり切れている亜麻布三枚、使いこんだ火口に火打石、火打金一組、麻紐一巻き、縁に沿って輪状の染みのついた木製の椀とスプーン一組、いびつな鉄鍋。そして着古した衣類――革の帽子、厚手の上着、ズボン。見立てはあっという間にすんだ。

金はどこにあるのだ。立派な長持を抱えて、わずかな路銀しか持たず、二人で旅をしているというのか――もう一度中をかき回してみたが、ないものは出てこなかった。

「何してるの？」

唐突に背後から声をかけられ、メイヴェはびっくりして振り返った。

いつのまにか荷台の外にディアンが立っていた。右手で幕を持ち上げ、メイヴェを見上げている。黒髪が闇にとけ、青白い肌は月明かりを吸い込んだように輝いていた。

メイヴェと視線が合うと、ディアンはゆっくりとまばたきをした。再び薄紫色の双眸が開かれると、それはいたずら好きな子供の目に変わっていた。面白いいたずらを思いつき、わくわくしているという顔だ。

「ねえ、何してるの？」

ディアンは小首を傾げて、同じ問いをくり返した。メイヴェのうなじはちりちりと騒ぎ出し、本能的な勘が危険を告げた――この子は何か妙だ。

「……ルーフィスに頼まれたの。寒くなってきたから、上着を取ってきてほしいって」

「へえ、そうなの」

ディアンはそう言うと、持ち上げていた幕をばさりと下ろした。幕はそれきり揺れもせず、外の様子を窺うことはできなくなる。少年があっさり引き下がったので、メイヴェはかえって拍子抜けしてしまった。

気味の悪い子だ、とメイヴェは改めて思った。ディアンが立ち去ったとしても、ここは直感に従って逃げたほうがいい。ひとまず幌馬車を盗んで逃げてしまうことに決めた。馬車がなければ追って来ようにも脚がなくなる。メイヴェは荷台と御者台のあいだに下がっている幕に向かって這い出した。

前方の幕に手をかけようとしたとき、背後の幕が再びばさりと音を立てた。メイヴェがはっとしてうしろを振り向く前に、麻袋が左脇にぬっと突き出される。

「忘れ物だよ。外に落ちてた」

メイヴェが顔を向けると、いつのまにかディアンが同じ体勢でとなりに屈んでいた。メイヴェは恐れていることを悟られないように、できるだけ気丈な声で言った。

「袋はそこに置いて控えなさい、無礼者」

「確かメイヴェ様って言ったっけ……忘れ物を届けるためだけに荷台に乗ったんじゃないんだよ、俺は」

ディアンは穏やかに言うと、にっこりと微笑んだ。

「メイヴェ様の腰のベルトを受け取りに来たんだ。その前にどうしてあんたがルーフィスのベルトをつけているのか、ちゃんと答えてよね。ここは二人きりだから、じっくり話を聞いてあげら

れるよ」

「控えなさいって言うてるでしょ！ 下賤の分際で気安く話しかけないでよ！」

メイヴェェが声を荒げると、ディアンはいきなりメイヴェェの前襟をつかみ、ぐいと下に引いた。メイヴェェは悲鳴を上げながらうつ伏せに倒され、首を荷台に押しつけられる。うなじを押さえるディアンの手は、血が通っているとは思えないほど冷えきっており、背筋まで寒くなった。喉が圧迫され、息ができない。やっとのことで首を横に曲げ、声を上げた。

「は……はなしなさい！」

「ねえ、メイヴェェは偶然って信じる？」

ディアンはメイヴェェの命令を無視してなれなれしく声をかけ、うなじを押さえる手の力を強めた。骨が折れるのではないかと思うほど痛みが走り、メイヴェェは喘ぐ――子供がこんな力を出せるものなのか――ろうそくの炎がゆらめく幌の中、ディアンの陽気な声が頭上から降ってきた。

「俺は思うんだよ。生きてるとこれは偶然だって思えることによく出くわすだろう？ ルーフィスはすぐ神の思し召しだの運命だのって言うけど、そんなのはうまくベラント人に生まれついた奴の言うことさ。あいにく俺の育ちは悪くてね、神なんていないと思うことのほうが多かった。だって本当にいて何でもできるなら、どうしてこの世に魔物がいるのさ、そうだろ？ だから俺の考えはこうだ。本当は神様なんていない。神の教えは偉い人たちが俺たちを従順にさせるための方便。悪いことをすると神様の罰が下りますよって言われたら、いい子になるしかないからね」

「そんな考え方はまちがいよ。魔物につけられるわ」

メイヴェェが叱るように言うと、ディアンはくすくすと笑った。気味が悪いなんてものじゃない、とメイヴェェは思った。十歳くらいの子供がこんなことを考えるだろうか。それにこの子は「この世に神はいないのに魔物はいる」と断言した――まるで魔物に会ったことがあるかのように。

「この世で起きることはすべて偶然。神なんていないんだから、審判が下って罰を受けるなんてありえない。だから俺はせいぜい偶然を楽しむつもりなんだ。たとえば道で誰かがけがをした偶然とか、夜誰かが俺たちの箱を開けてる偶然とかさ」

メイヴェェはなんとかディアンの手の下から逃げようと頭を左右に振ったが、ディアンはそれを許さなかった。メイヴェェの背中を冷たい汗が流れていく。

この子は人間じゃないとメイヴェェは確信した。エリルアドに魔物の伝説は多いが、実際に遭ったという者は少ない。この世にいる魔物とはおそらく――この子自身のことだ。

「人が死ぬのも偶然だよ。病にかかったり、井戸に落ちたり、まあ原因なんて何でもいいんだけど、突然ころりと死んじゃうの。ほんと、あっけないもんさ。神の教えに従って徳を積んだって、死ぬときはみんな同じだよ。だって流行り病のときに死ぬ人が悪人ばかりとは限らないじゃない？」

ディアンは言葉を切ると、また喉の奥からくすくすと笑い声を立てた。メイヴェェは泣き出しそうになるのを懸命にこらえてもがいた。

すると突然ディアンの笑い声がやんだ。

「ただし誰かに殺されたときは別だ。悪いことをした奴は罪人だから殺されるんだ。死ぬのは自分のせいなんだよ」

ディアンはいきなりメイヴェの長い髪をつかんで引き上げると、長持に向けて突きとばした。メイヴェは縁に背中を打ちつけ、悲鳴を上げる。打った背中が熱を帯びて痛み始めたが、しりもちをついたまま必死にあとずさった。

顔を上げると、ディアンは膝立ちになり、目を細めてメイヴェを見下ろしていた。微笑みながら、膝をずらして近づいてくる。

メイヴェの心臓が躍り上がった。体の震えが止まらない。ディアンの体はメイヴェよりずっと小さいのに、大きな影になって覆いかぶさってくるように感じられた。

「罪人かどうか教えてあげようか」

ディアンは顔を近づけささやき、メイヴェは恐怖で目を見開く。怯えている自分が悔しかった――わたしはエリルアド小王の娘なのよ。移民だか魔物だかわからないようなチビに殺されたら恥よ。

メイヴェは歯を食いしばり、ふるえる手で左腰の短剣を抜いた。

「ち、近づかないで！」

メイヴェは短剣の切っ先をディアンに向けた。

「近づいたら殺すわよ！ け、剣術は得意なんだから！」

メイヴェが勢いよく短剣を振り回すと、ディアンは目を丸くして、わずかだがうしろに下がった。メイヴェは勢いづいて、大声を上げる。

「そうよ、もっと下がりなさい！ わたしは本気なんだから！ 子供でも容赦しないわよ！」

ディアンは膝立ちのまま退いて、ゆっくりと腰を落とした。短剣を指さし、落ち着きはらって言った。

「その短剣をよく見なよ。刃先がこぼれてるだろ――だから何も斬れないよ。ルーフィスは確かに腰に差しているけど、実際は使っていないんだ。もともと暴力が嫌いだから、剣を持っていることを相手にわかってもらえれば、それでいいんだってさ。いくら剣術が得意でもその短剣で身を守るのは無理だね」

ディアンは吹き出した。

「殺すだなんて穏やかじゃないなあ。さっきのは冗談だよ、ちょっと脅しただけ。だってあんた泥棒しようとしてたんだろ？ だからほんの少し懲らしめてやろうと思っただけなんだ。馬車を盗まれたら、俺たちだって困るからね」

ディアンは自分の話が笑いを煽ったかのようにけらけらと笑い続けたが、メイヴェは顔をしかめたままだった。うなじに当てられた冷たい手には殺意すら感じられたのだから、あれが冗談だったはずがない。

笑い顔のディアンがずっと手を伸ばしてきた。メイヴェは身を硬くする。ディアンはメイヴェの反応を楽しむように目を細めてから、ふれずに手を引っこめた。

「そんなに怖がらなくてもいいよ、嘘つきなお姫さま。気どった口調より、こっちのほうが似合ってるね」

ディアンはそう言うのと腰を上げ、身を屈めて歩き、荷台から飛び下りて外へ出て行ってしまった。メイヴェェが呆然として見送っていると、振り向いて幕を持ち上げ、また微笑んだ。

「一人で荷台に乗れるなんて、挫いた足はもう治ったんだね。おめでとう」

幕が下ろされ、ディアンの姿は消えた。

メイヴェェは震える両手で斬れない短剣の柄を握りしめていた。また戻ってくるかもしれないという不安が拭いきれない。やがて館のドアの音が聞こえると、大きく息を吐いた。体中の力が抜けてしまい、短剣を荷台にすべり落とす。

光る薄紫色の瞳の残像が目の前をちらついた。酒を飲んで暴力をふるう男の目を見たことがあるが、それとはまったく別物だ。あれは憂さ晴らしをするありふれた狂気ではなく、暴力を冷静に楽しんでいる者の目である。

メイヴェェは尻餅をついたまま身震いをし、落とした短剣を拾って腰の鞆に戻した。いくら刃がこぼれていたとしても、この短剣で反撃したから、助かったのだ。あのままじっとしていたら、殺されていたかもしれない――改めてぞっとした。今は無事でも、用心するに越したことはない。

メイヴェェは鞆に触れながら、ふと考えた――そう言えばディアンは今何をしているのだろうか？ 幸いドアは閉ざされたままだし、館は静まり返っているけれど――静まり返っている？ あそこには眠らされたルーフィスがいるのに？

メイヴェェは腰を上げた。足がふらついていたが、腰を抜かしている場合ではない――一刻も早く逃げなくては。

長持につかまりながら、御者台側の幕に向かって四つん這いでそろそろと動いた。わずかに荷台が揺れ、メイヴェェは体を強張らせる――ディアンに気づかれないようそっと出て行かなくちゃ。ルーフィスに薬を盛ったことがばれないうちに――。

御者台への幕を上げると、ディアンがこちらを見ていた。

メイヴェェは悲鳴を上げた。

しかしディアンはまったく表情を変えず、口元を引き締め、メイヴェェを見据えていた。いたずらっぽい目や笑いは消え、全身から怒りを発している。

「ルーフィスに何をしたんだ？」

「な……何もしてないわ」

メイヴェェはふるえる声で答え、荷台側から外に逃げようと、そのまま後方に下がる。ディアンは幕を上げ、獲物を狙っている獣のように、身じろぎせずメイヴェェを見つめていた。先ほどメイヴェェをからかった余裕は微塵も残っていない。荷台の縁までくると、メイヴェェは飛び下りるため、思いきって背中を向けた。

ディアンが御者台から跳びかかってきた。メイヴェェは背後から髪をつかまれ、今度は仰向けに倒される。荷台に頭を打ち、目の前が暗くなった。何とか外に出られないかと、荷台の外にはみ出していた足先でもがいたが、ディアンに両肩をつかまれ、大きな怪物の口の中に飲みこまれるように、荷台の奥に引きずり戻された。

メイヴェェは腰を探り、ふるえる手で短剣を引き抜いた。しかしディアンの右手が一振りすると

、短剣はなぎ払われ、荷台の上をすべって外に落ちた。

霞む視界の中で、ディアンの怒りに歪んだ顔が迫ってくる。赤い唇の隙間から、骨のように白い牙が覗いていた。

「今度は冗談にして見逃す気はないよ。ルーフィスに何をした？ 言えよ！」

「たいしたことじゃないわ……ちょっと……だけよ、眠らせてだけ……」

ディアンの鋭い牙が剥き出され、メイヴェの首筋に鋭い痛みが走った。メイヴェは悲鳴も上げられず、手足をばたばたと動かしたが、悪あがきにすらならない。荷台が激しく揺れ、めまいがいつそう強まる。

同時に金気臭い匂いが鼻をついた。自分の血の匂いだと気づいたときには遅く、メイヴェは深い闇の中に落ちていった。

メイヴェはぼそぼそという話し声に意識を取り戻した。薄くまぶたを開けると、こちらをうかがう顔が霞んで見える。心配そうな若い男――誰だろう。

「大丈夫ですか」という声のはっきりと耳に届くと、カモのベラント人を思い出した。続いて、不気味に光る薄紫色の双眸が脳裏に閃き、一気に夢から現実への境界を越える。

寝室内は薄暗かったが、ろうそくの光にぼんやりと照らされたルーフィスが見えた。メイヴェが横になっているベッドの脇の椅子から、身をのり出している――いや、怖い。

メイヴェははね起きて、ベッドから逃げ出そうとした。しかし体がだるく、思うように動けない。ルーフィスがメイヴェの肩を優しく押さえると、メイヴェの体がふるえた。

「さわらないで！」

「まだ動いたらだめですよ。落ち着いてください。わたしは何もしません」

メイヴェはルーフィスを押し戻そうとしたが、力が入らなかった。ルーフィスはメイヴェから手をはなすと、一人で何度も頷き、胸の前で手を組み、神に感謝を捧げた。

「目が覚めてよかった……本当に心配しましたよ。でももう大丈夫ですね」

「あの子はどこなの？」

メイヴェは金切り声を上げた。

ルーフィスは眉根を寄せる。

「え？」

「わたし襲われたの！ 血を吸われたのよ！」

「血を――なんですって？」

「とぼけないで、ディアンのことよ！ あれは吸血魔よ、魔物だわ！ 目が獣みたいに光って、牙を剥き出しにして、首筋に噛みついてきたんだから！ 本当よ、本当に襲ってきたのよ！ あの子は人間じゃないわ！ 逃げないと殺されちゃう！」

「落ち着いてください、メイヴェ様。彼は吸血魔ではありませんよ、わたしの友人なのでですから」

ルーフィスは椅子にゆったりと腰かけて、メイヴェの話などまったく聞いていなかったかのよう微笑んだ。

「まずはご婦人の寝室に入りましたことをお詫びします。昨夜あなたの侍女は戻らず、看病する者がいなかったためです。それと」

ルーフィスは言葉を切り、深く息を吸ってから続ける。

「すべて誤解なんですよ。ディアンはあなたが馬車のところにいるのを見て、ちょっとからかってやろうと噛みつくふりをしたのだそうです。そうしたらあなたは驚いて気絶してしまったというわけでして……大変申し訳ないことをしました。ディアンには必ず詫びさせますので」

「そうじゃないわ、ふりなんかじゃないのよ！ ディアンは本当に血を吸ったの！ 首筋を見てよ、痕が残っているはずだわ！ ねえお願い、信じてちょうだい！」

「でも彼は人間なんですよ、まちがいなくね。だいいちわたしはディアンと一緒に旅をしている

んです。もしあなたの言うような吸血魔だったら、わたしはとうに殺されていますよ。そうではありませんか」

「でもわたしは襲われたの！ あの長持は吸血魔の寝床なんでしょう？ やっと納得がいったわよ！ どうしてあんたは魔物を連れて旅してるの？ ひょっとしてあんたも吸血魔なの？」

ルーフィスは深く嘆息した。

「わたしが吸血魔に見えますか。それともわたしが魔物に魂を売ったように見えますか」

メイヴェエは小さく答えた。「……いいえ」

「そうでしょう、わたしは人間です。そして信仰篤い人間は魔物と一緒に暮らせません。ですからわたし同様に、ディアンも人間なのです。わたしと一緒に旅をしていることが、彼が人間だという何よりの証拠ではありませんか」

メイヴェエは押し黙ったが、釈然としなかった。ルーフィスの言い分は一見筋道が通っているようだったが、どこかおかしい。メイヴェエは唇を噛んで考えた末、口を開いた。

「……ディアンはどこにいるの？」

「となりの部屋ですよ」

「どうしてとなりにいるの？」

「あなたを驚かせたくなかったから、控えさせたんですよ。メイヴェエ様の気分がよくなったら、連れてきて詫言させるとつもりです」

「では連れてきなさい。わたしはもう大丈夫だから」

「本当に？」

「ええ。もう取り乱したりしないわ」

ルーフィスは心配そうな目を向けたが、一つ頷くと、立ち上がって寝室を出て行った。

ルーフィスが人間であるのはまちがいないが、嘘をついているのも確かだとメイヴェエは直感した。彼の話はあらかじめ用意しておいた作り話だろう。

ドアの向こうからぼそぼそという話し声を聞こえてきたが、内容は聞きとれない。メイヴェエはゆっくりとベッドに体を起こし、目をこすり、深呼吸をした。それから枕元に置かれていた水を飲み、そのとなりに置いてある象牙の聖セレスティス像を手にとって、掛布団の下に忍ばせる。

ノックの音と同時に「連れて参りました」という声がして、ルーフィス、続いてディアンが入ってくる。

ディアンはドアから二、三步入ると立ち止まってしまった。納得のいかないことで叱られたとばかりにむくれている。こうしているときれいなだけのただの子供で、いるだけで身震いさせられた昨夜の様子とは一変していた。

ルーフィスが手を上げた。「ほら、早くしろ」

「悪かった」

ディアンは短く言って、そっぽを向いた。反省していないのは明らかである。

「もっと誠意をこめて謝りたまえ」

ルーフィスは怒った声でたしなめてから、メイヴェエに頭を下げた。

「とにかく彼のいたずらだったわけです。ここはわたしに免じて、寛大なお心をお見せいただけませんか」

メイヴェェがディアンに視線を向けると、ディアンはにらみ返してきた。薄紫色の瞳にちらりと炎が灯る――やはりこの子は吸血魔だ。今は言い逃れのために人間のふりをしているだけなのだ。だまされてなるものか、とメイヴェェは怒りに燃えた。

「もっとこちらに来なさい」

ディアンは躊躇したが、ルーフィスに促され、しぶしぶ近寄ってきた。枕元まで来たところで、メイヴェェは掛布団の中から聖セレスティス像をさっと取り出し、ディアンの目の前に突きつける。

「うわっ！」

残念ながら当たりはしなかったが、ディアンは悲鳴を上げ、うしろにとび退った。

「やっぱりセレスティス様が怖いよね！　これが吸血魔の証拠だわ！」

ルーフィスは目をむいた。ディアンは応戦するように腰を落とし、胸の前で手を軽く広げ、じりじりとメイヴェェにつめ寄っていく。メイヴェェはセレスティス像を振り回して対抗し、同時に舌戦が始まった。

「謝るのはそっちだろう！　他人の持ち物を漁っていたのは誰だよ、この泥棒女！」

「吸血魔の持ち物を盗ったって、罪にはならないわよ！」

「ルーフィスを眠らせて盗もうとしたくせに、いい態度じゃないか！」

「勝手に眠ったんじゃないの？　わたしは知らないわ！」

「勝手に？　勝手にだって？　よく言ったな！　殺してやってもいいんだぞ！」

ディアンがメイヴェェに襲いかかろうと足を踏み出したとたん、二人の間にルーフィスが割りこんだ。メイヴェェをかばうように両手を広げ、ディアンの前に立ちふさがる。

「やめろ、ディアン！」

その言葉を聞いて、メイヴェェは勝ち誇ったように笑った――やはり自分の読みは正しかった。ディアンはルーフィスに逆らえず、ルーフィスはこちらの味方になる。ということは、ルーフィスがいる限り襲われる心配はないのだから、せいぜい護衛させておけばいいのだ。

ディアンは悔しそうにきいきいと喚いた。

「ルーフィスにもつきあいきれないね！　薬を盛られたのに看病しようなんて、人がいいにもほどがある！」

「人殺しはだめだと言っただろう！」

「殺したって死ぬか、こんな女！　根性悪の罪人より、俺のほうがよっぽど無害だよ！　吸い尽くしちゃえばよかった！」

メイヴェェは大切なことに思い当たり、あわてて訊ねた。

「ちょっと！　死んでないということは、わたし吸血魔になっちゃったの？　血を吸われたら吸血魔になるって言うわよね？　あれは本当なの？」

「あんたなんか仲間にするのはお断りだね！　俺が血をやらなきゃ、どうしようもない人間のままさ！」

「どうしようもない？ 魔物風情がよく言うわ！ わたしは高貴なエリルアド小王の娘なのよ！」

「喧嘩はやめてくれ、二人とも！」

ルーフィスが大声を張り上げ、たしなめるように二人に目を遣った。メイヴェは息切れがし、ディアンはルーフィスが腰かけていた椅子を乱暴に引っ張り、メイヴェから離れた位置で席を占める。ルーフィスは二人の間に立ったまま、額に手を当て深々と嘆息した。

メイヴェはベッドの上で上体を起こしたまま呼吸を整え、ルーフィスを見た。

「とにかくこの子が吸血魔であることはまちがいないわけね、ルーフィス？」

ルーフィスは腰を落として片膝をつき、メイヴェを見上げた。

「.....そういうことです」

「あなたはわたしをだまそうとしたのね？」

「そう.....そうです。申し訳ありません」

「どうしてだまそうとしたの？」

「.....町の人に知られて、追われたら厄介だと思ったからです」

ルーフィスは頭を下げて、「申し訳ありません」と再び詫びた。メイヴェはすでに上品な話し方を放棄していたので、いっそう尊大な態度に出た。

「そう、厄介ということだったのね。捕まったらルーフィスは吊るし首、ディアンは太陽の下にさらされることになるものねえ。それはたしかに恐ろしいわ」

ディアンは視線を下に落とす。

「わたし、言いふらすわよ。吸血魔とその仲間の人間がいるから魔物狩りをしなさいって、兵に命じてやるわ」

ディアンとルーフィスは同時に顔を上げた。

「あんた、死にたいのか！」

「メイヴェ様、それはあんまりでは.....」

「そんなに驚くほどのことじゃないでしょ。わたしは死ぬほど怖い思いをしたんですからね。あんたたちなんて罰を受けて当然だわ」

ルーフィスは勢いよく頭を下げた。

「本当に申し訳ありません！ わたしたちはすぐに町を出ますので、どうか見逃してください！」

「謝る必要なんかないだろ、ルーフィス！ これがこの女の本性だよ！」

「大声出さないでよ、二人とも。体に障るじゃないの」

メイヴェはこめかみを押さえ、顔をしかめて続けた。

「生きて町を出たいのなら、ここに有り金全部置いていくことね」

沈黙が訪れた。誰一人身動きせず、ろうそくの燃える音がやけに大きく響く。しばらくするとルーフィスが顔を上げ、おそるおそるその沈黙を破った。

「ひよっとすると、初めからそれが目的だったんですか.....？」

「そうよ」

「で、でも……足首が腫れていたのは……」

「あれはぶどう酒を塗っただけよ」

メイヴェはあっさりと答え、ルーフィスは傷ついた様子で俯いてしまった。ディアンはルーフィスを一瞥してから脚を組み、あとを引き取った。

「金なんかないよ」

「あるだけでいいって言ってるのよ。早く出しなさい。お金がなければ売れそうな品物でもいいわ」

「俺たちが金を持っていそうに見える？」

ディアンは肩をすくめた。

「財布にあった路銀はもう盗っただろ。他はがらくた。金なんて本当にないだよ。何しろルーフィスはお人よしなんで、市場で買い物をするときも値切ったりしないからね。今は儉約のために森の中でウサギを狩ったり、水だけでしのいだりしていたところさ。信じられないなら探してみればいいよ。金なんかどこにもない」

メイヴェはうろたえた。

「本当にないの？」

ディアンは余裕たっぷりに微笑んだ。

「ない」

わざとらしい極上の微笑が癪にさわり、メイヴェは枕元の水杯をつかむと、ディアンに向けて投げつけた。ディアンは椅子からすばやく立ち上がってかわし、水杯は椅子にぶつかって割れる。

ディアンが勝ち誇ったように笑った。

「金っていうのはあるところから盗るもんだよ！ ルーフィスを襲ったって無駄だってことくらいわからなかったの？ あんたって頭悪いんだなあ」

「文無しのかせにいはらないでほしいわ！ あんたこそバカよ！ うんとお金のある奴は守りが堅いのよ！ あんたたちみたいならバカならちよろいものだけどね！」

「うすらバカ？ 他人をバカ扱いするなら、立派に金を盗ってからにしろよな！」

「あんた自分の立場をわかってるの？ わたしは吸血魔狩りをするって言ってるのよ！ その心臓に杭を打ちこまれたくなかったら、泥棒でもなんでもしてお金をつくるのね！」

無言で身を屈めていたルーフィスがたまりかねたようにすくと立ち上がり、拳をふるわせた。

「君たちはなんて罪深い話をしているんだ！ 盗みは悪徳なんだよ！ 聖本には『盗むなかれ』とはっきり書いてある。それから……」

ディアンはさらに怒りを募らせ、ルーフィスを遮った。

「ルーフィスもいかげんにそのお貴族様根性と神への愛を捨ててくれよな！ 俺がいるから教会の施しは受けないと決めたんだろ！ 大いにけっこう！ それなら、自力で食料を確保しなくちゃならないんだよ！ 俺は血さえあれば生きていけるけど、食べ物がないと死ぬのはルーフィスなんだ！ きれいごとで腹がいっぱいになると思うんなら、試してみるんだな！」

「罪が何よ！ 神様？ ああ、なんでもできるくせに、何もしてくれない方のことよね！ わたしは洗礼だって受けたし、朝夕のお祈りだって欠かさなかったわよ！ その結果がこの暮らしなのよ！」

二人に神をバカにされ、ルーフィスも憤った。

「吸血魔のディアンはともかく、セレス教徒のメイヴェ様までそんなことを言うとは、信じられませんね！ いいですか、朝夕祈ってれば……」

「わたしの祈りは神へは届かないの！ だって神の望まれることとわたしの願っていることってあまりに違いすぎるんだもの！」

「神の御心にかなわないときこそ、自分を改める機会なんですよ！ あなたは心を入れ替えてから祈るべきです！」

「なによ、偉そうに！ じゃあ訊くわよ、そんなに善良なお方が吸血魔の仲間っていうのはどういうこと？ 魔物と一緒に旅をすることは、教えに反していると言わないわけ？」

ルーフィスは口元に蓋をされたかのように、突然黙ってしまった。しかもディアンがルーフィスに含みのある視線を送り、二人の間に不穏な空気が流れている。どうもまずいことを言ってしまったらしいが、言ってしまったものは仕方がない。メイヴェが傍観を決めこむと、ディアンが明るい声を上げた。

「ルーフィスは見張りなんだよ。俺が人を殺さないように番をしているんだ。いい子にしてたら、かわりにルーフィスが血をくれるっていう約束をしたから」

ルーフィスは困惑したようにディアンを見た。

「……見張りじゃなくて、友だちだからだよ。ディアンは大切な友人なんだ」

ディアンはルーフィスから顔を背け、床に視線を落とした。メイヴェはあきれて、頭を軽く振った。

「あんたたちってくだらないことをしているのね。吸血魔だってべつにいいじゃない。人を襲う能力を利用すれば、なんだってできるんだし」

二人はそろってメイヴェに釘づけになった。ルーフィスはぱくぱくと口を動かす。

「……神よ……罪深いこの娘を守りたまえ……」

「な、俺の言ったとおりだろう？ 俺よりこの女のほうが絶対に害があるってば」

メイヴェはこの言葉を聞いて、二人の呑みこみの悪さにますますあきれた。

「あんたたちはいまだに状況がわかっていないのね。わたしたちはお金がなくて、お金がほしい。吸血魔狩りをやめてあげるから、かわりに協力しないかって言ってるのよ」

「協力ってなんだよ？」

「お城に泥棒に行きましょ」

ルーフィスはかっとなって大声を上げた。

「あなたは完全に墮落している！」

「あんたの大切なご友人が言ったんじゃないの、金のあるところに盗りに行けて。この町でいちばんの金持ちは、今城に住んでいるトゥルベク親子よ。大丈夫、盗んだって罪にはならないわ。彼らほど神から遠い人間もいないから」

ディアンは興味があるといった様子で訊ねた。

「そこ、本当に金があるの？」

「あるわよ。アニェック家の家宝だって少しは残ってるし、あのがめついおやじは貯めこんでいるはずだしね。でも小王よ。迂闊に手を出せないでしょ。ばれたらそれこそ吊るし首よ。だから吸血魔のあんたに兵を追っ払ってもらいたいってわけ」

「それで俺を仲間にひき入れようっていうことか。一人で危険を冒しても、吸血魔だから大丈夫だと？」

ディアンはメイヴェの意図が読めたとばかりに眉をひそめた。

「一人で行けとは言わないわ。わたしが城内の案内をするから、あんたは護衛よ」

「だめだ！」

ルーフィスが拳を握りしめて、二人の会話に割りこんだ。

「ディアンまでなんだ、盗みだなんて！ そんなこと神がお許しにならないよ！」

「うるさいわねえ。そんなに許しがほしければ、わたしが許してあげるわよ」

「その発言はどういうことですか！ あなたは神と自分を同列に考えているのですか！」

「俺、のった」

ディアンの落ち着いた一言がルーフィスを絶句させ、メイヴェの顔をぱっと輝かせた。

「あんた、吸血魔のわりにいい子じゃないの！」

「だって俺たちには金が必要なんだもの。野宿と水の暮らしはもう限界だよ」

「盗みなんて墮落した人間のすることだ！ 僕は許さないぞ、ディアン！ 悪事の護衛なんて冗談じゃすまされない！」

「うん、俺は護衛はしないよ。人を殺す羽目に陥るのはごめんだからね。ルーフィスと約束したんだ。血をもらうかわりに人は殺さないって……そうだろ？」

ルーフィスは慚然として頷いた。

「それじゃどう協力するって言うの？」

メイヴェが訊ねると、ディアンは椅子に再び腰かけ、背もたれに寄りかかった。頭のうしろで手を組みながら、涼しい顔でルーフィスを見上げる。

「だからルーフィスが護衛をやるよ」

ルーフィスは一瞬言葉を失ってから、声を張り上げた。

「ふざけるなよ、ディアン！ 僕は絶対に盗みはしない！」

「パンがほしけりゃ稼ぎなよ」

ディアンはゆっくりと前屈みになり、罪人に石を投げるようにルーフィスに言葉を投げつけた。

「俺はもうルーフィスのためにウサギを捕ってこないよ。食べ物がなかったら、死ぬしかないんだ。そしたら死ぬ？ 俺をのこして死ねる？ ルーフィスが死んだら血をくれる奴がいなくなるから、俺は人殺しに精を出すさ」

ディアンは皮肉な笑みを浮かべていたが、膝の上の拳はかたく握りしめられていた。

ルーフィスは無言でディアンを見てから、静かに言った。

「神の教えに背くくらいなら、腹なんか満たされなくてもいい。必要最低限のパンさえあれば、僕は満足だよ」

「その必要最低限のパンさえもうないって言ってるんだよ、俺は」

ルーフィスの灰色の瞳に翳が射す。意外な顔をするものとメイヴェエは思った。深い悲しみが希望や喜びをこそげ落としたという顔だった。

「……じゃあ僕も狩りを覚えるよ。魚を捕まえてもいいし、森で木の実もとろう。そうすれば盗みなんかしなくても、生きていける」

「へえ、狩りね。教会で聖本をめぐっていただけのルーフィスが狩りなんかできるの？ まあいいけどね。それでいつまで生きられる？ 冬が来たらどうするの？ 寒さをどうやってしのぐ？

飢えたらどうするの？ 施しを頼んで歩く？」

「頼んでもいいよ。盗みよりはましだ」

「ルーフィスにはできないよ。そんなふうに簡単にできると言いきれるんだから。貴族の坊ちゃんも施しを与えても、施しを乞うことはできないもんだよ」

パンがなければ飢えて死ぬ。掘っても灰色の岩ばかりが出てくる西部の地で生まれ育ったメイヴェエは、飢饉を何度も経験してきた。あまりに当たり前のことで言い争いをしている二人に、業を煮やして割りこんだ。

「何度も言っているけど、少しは状況を理解してよ。今あんたたちはわたしに脅されてるの。だからあんたたちの都合よりわたしの都合が優先なのよ、わかる？ 施しを受けられるかどうかはどうでもいいことなの。とにかく黙ってわたしに従いなさい」

「お断りです」

ルーフィスの吐き捨てるような言い方に、メイヴェエはかっとなった。めまいも忘れてベッドから起き上がり、ドアへ向かう。

ルーフィスがあわてて追いかけて来た。

「どこへ行くつもりですか！」

「決まってるでしょ、あんたたちを処刑するよう命じに行くのよ！ ああ、逃げようたってだめよ、門はもう閉まっているんだから！ それと馬車を借りるわよ！ あんたたちはどうせ逃げられないんだもの、もう必要ないでしょうからね！」

「待ってください、メイヴェエ様！」

「そうだよ、ちょっと待ってくれよ、メイヴェエ様。どうしても行くって言うなら、口封じのためにあんたを殺すっていう手もあるんだからね。そうだろ、ルーフィス？」

「……よせ、ディアン……メイヴェエ様も」

ルーフィスは言葉をつまらせながら言った。

「わかった……これっきりですよ……協力しましょう」

「よろしい。さて、どうやって盗みに行くか考えましょ」

メイヴェエはドアの前でくるりと向きを変え、軽い足取りでベッドに戻り、腰かけた。ルーフィスは虚ろな目をしてよろめきながら壁に寄りかかり、そのままずるとくずおれるように座りこむ。俯いて胸の前で手を組みながら、この世の不幸をすべて背負ってしまったような顔で独り

言を呟き始めた。

「……僕は悪の誘惑に負けたんだ、もうだめだ……現世での利益を追求して神の教えに背くな
んて……僕の魂はこれからどこへ行けばいいのだろう……」

魂がどこに行くかという疑問どころか、すでに魂を失ってしまったような陰鬱さに、メイヴェ
はぎよっとした。

ディアンはルーフィスをにらんで苦々しげに舌打ちをしてから、メイヴェに言った。

「続きは明日の晩にしてくれよ」

「……そうね」

メイヴェの事情

「食事の支度をしておいたから、早く来いよ」

ディアンの声で、ルーフィスは黴臭さと知らない人間の体臭の混じったベッドの上で重いまぶたを開けた——ディアンが起きているということは、あれから一晩たったのか。

焦点の合わない頭で昨夜のことを思い出す——一緒に盗みを働くと承知したあと、メイヴェに容赦なく追い出された——「二人ともそろそろ小屋に行つてね。ここは淑女の寝室なのよ。わたしは疲れたから、今夜はもう休みたいの」

憂鬱で食欲はなかったが、靴を履き、服の埃を落とし、顔を洗って髪を整えてから、居館へ向かった。

ドアを引くと、吊り鍋のかかった暖炉の炎と料理を盛られた皿に迎えられた。まともなスープが煮こまれ、テーブルにはパン、チーズ、モリバトのあぶり肉が並べられている。肉は昨夜ディアンが捕ってきたものだろうと見当をつけた。彼は動物を捕まえては血を吸い、肉を調理する。

メイヴェは上機嫌で、暖炉に近い奥の席に着いていた。ルーフィスが入ってくるのを見ると、空いている向かいの席を指す。

「本来ならあんたがわたしと一緒に食事をとるなんて許されないことだけど、今は特別よ。その椅子に座りなさい」

ルーフィスは「光栄です」と言って、命令に従った。

ディアンは暖炉の前の床に膝を立てて座り、火かき棒で薪をつつき、火の粉を舞い上がらせて遊んでいる。メイヴェは席上からディアンに声をかけた。

「あんたは吸血魔なのに料理ができるのね」

「俺だって生まれたときから吸血魔だったわけじゃないからね」

「昔は人間だったってこと？」

「当たり前だろ」

「信じられないわ、あんたが人間だったなんて」

メイヴェは軽く頭を振ると、目を閉じて手を組み、食前の祈りを唱え始めた。

「我らに日々の糧を与えてくださった神よ……」

ルーフィスはあわてた。

「ちょっと待ってください、メイヴェ様。胸の内で祈るだけにしてもらえませんか。ディアンの体に障りますから」

「あら、そうなの。じゃあお祈りは省略」

メイヴェは目を開けると、組んでいた手をさっさと解いてしまった。昨夜から気づいていたことだが、彼女の信仰心にはかなり問題があるようだ。

「さあ、いただきましょう。ディアン、給仕しなさい」

「なんで俺が？」

「『なんで俺が？』じゃないわよ。あんた従者でしょ。『はい、姫さま』とだけ言えばいいの」

ディアンは火かき棒を白い灰の中に突き立て、メイヴェを睨みつけた。

「食いたきゃ自分で食え。人の手を借りなきゃ食えないって言うんなら食うな。パンは回して各自ちぎって食えばいいんだし、スープは鍋をテーブルの真ん中に置いて、てんでにスプーンを突っこめばすむことだろ。二度と給仕しろなんて言うなよ。言ったら、金輪際料理しないからな」

「その口のきき方はなんなの？ もういいわ。わたしは食べないから」

メイヴェはむくれて横を向いた。

「……僕が給仕しましょう」

ルーフィスは席を立て、暖炉の吊り鍋にかかっていた豆のスープを皿に盛りながら、この二人と一緒にいる以上、罪を犯すことについて悩む時間すら与えられないのだと悟った。二人分の皿を置くと、メイヴェはすぐに機嫌を直し、食事を始めた。

ディアンは暖炉に薪を足しながら訊ねた。

「ねえ、俺の長持もこの館に置いていい？ あの小屋ぼろすぎていやなんだよね」

「だめよ」

メイヴェはにべもなく言った。

「どうせ長持に入るんだから、どこで寝ても一緒でしょ。それに一日おきに偵察が来るんだから、そのときあんたたちがここには困るの。あんまり図々しいことを言うと、食糧を貯蔵するための穴の中に入れるわよ」

「けち！」

ディアンは火かき棒で灰に怒りをぶつけた。

「ちょっとやめてよ、食事中なのよ！ 灰が飛ぶじゃないの！」

「やめろ、ディアン。偵察ってどういうことですか、メイヴェ様？」

ルーフィスが訊ねると、メイヴェはあっさりと答えた。

「わたしはこの館に軟禁されているんだもの」

「軟禁？ でも今はお一人じゃないですか。第一道で座りこんでいたのは……」

「いろいろといきさつがあるのよ。一昨日の朝までは、護衛と侍女と称した者が常にそばにいて、わたしを見張っていたの。食事を届けに来る下男は、彼らからわたしがおとなしくしているかどうかを聞いて、城に報告しているのよ」

「報告って？」

「わたしが元小王の娘だからよ。逃げないように、反乱を起こさないようにって監視しているってわけ」

「どうしてそんなことになったのですか」

ルーフィスが訝しげに訊いたので、メイヴェは居ずまいを正し、話を続けた。

「わたしの一族アニェック家はエリルアド国の小王の一人として、代々このエニスレーンの町を治めてきたの。それなのにあんたたちベラント人がこの島に攻めこんできたせいで、何もかもめちゃくちゃになったわ。エリルアドはあんたたちに踏み荒らされたのよ」

メイヴェは声をふるわせ、それを抑えるかのように大きく息を吐いた。

「あんたたちベラント人はけだものだけど、今城にいるトゥルベク家はけだもの以下よ。こういうときこそ力を合わせてベラント人を追い払い、国を守るために立ち上がらなくてはならない小

王なのに、エニスレーンをのっと思ったんだもの。わたしはお父さまが亡くなった日に城を奪われたの——トウルベク家の兵はお父さまが息を引きとった直後に、城にのりこんできたのよ」

ルーフィスは食事の手を休め、メイヴェエの話に聞き入った。ディアンは相変わらず火かき棒で遊んではいるが、やはり無言で耳を傾けている。

「お父さまは今年の春、町の視察から戻られたとき、広間で突然倒れてしまったの。頭を押さえて額には脂汗がにじみ出て、すぐ寝室に運んだんだけど、そのまま寝こんでしまわれて。それからまもなくすると、お父さまは目を覚まさなくなったわ。夏の初めになると三日も意識がないこともあって、医師や薬師、魔術を知っている者を何人も呼び寄せて、とっかえひっかえ治療に当たらせたのに、どれも役立たずだった——そして意識を取り戻したときに、お父さまは無言で鍵を差し出し、わたしの手に握らせた。エニスレーン城主の証となる金庫室の鍵よ。本当は返したかったんだけど、あの真剣なまなざしを見たら、それはできなかったわ。鍵を受け取ったわたしの手を、お父さまはふるえる手でしばらくのあいだ包んでくれた」

メイヴェエは涙を押さえるかのように目元に手を当て、言葉を継いだ。

「六月に入るといよいよ悪くなったわ。お体に障らないようお父さまの寝室は板窓をぴったりと閉められ、朝からろうそくを灯し、うす暗くしてあるの。わたしはその中を足音を立てないように静かに近づいて、ベッドを覗きこんで、その日のお顔がどんなふうかを見たわ。四十を過ぎたばかりなのに長老のように老いてしまって、わたしのことなんててんでわからなくなっていて... ..毎日これが最後のお別れになるのかもって思いながら、部屋を出たわ。それでも生きているかどうかを確かめられれば、わたしも一日をなんとか過ごせた。だけど結局最後は終油の秘蹟だてまともに受けられないくらい弱ってしまって——あんなにかわいがってくれたのに。お母さまはわたしが幼いときに亡くなっていたから、二人で寄り添うように暮らしてきたのよ。わたし、お父さまに叱られたことなんてなかった——すごくかわいがってくれたんだから」

メイヴェエの頬に涙が伝い、ルーフィスは優しく声をかけた。

「お父上をととても愛していらしたのですね」

「そうよ。真に優しく偉大なエリルアドの小王と呼べる父だった」

メイヴェエは静かに言ってから、話を続けた。

「エニスレーンで最も美しい季節を過ごしてから、お父さまは逝ったの。どんどん冷たくなっていくお父さまの手から体温が逃げないように、必死に手を握ったけど、お父さまはわたしの手を握り返すこともなく、ただ横たわっていた。そのときよ、窓の外から馬の蹄と甲冑の音が聞こえたのは」

「蹄と甲冑の音？」

ルーフィスが訊ねると、メイヴェエは頷いた。

「わたしは初め葬儀の手配か何かだろうと思ったの。気温が高い季節だから早く埋葬しないといけないって、家臣たちが騒いでいたから。気がつくとも家臣たちは早々に退出していて、となりにいた城づきの司祭さままでそわそわして、『ちょっと外の様子を見に行ってください』と言って、出て行っちゃったの。まもなく甲冑の音がどんどん近づいてきて、何かが起こっていることによるやく気づいた。わたしの知らない恐ろしいことがこのドアの向こうで起きていると感じたわ。

そしてノックの音が聞こえて……恐る恐る返事をしたら、入ってきたのはトゥルベク家の嫡男ダーモットだったのよ！」

メイヴェの涙声に怒りがこめられた。

「一瞬拍子抜けしちゃったわ。彼とは幼い頃から親しくしてるから、お悔やみに来たのかと思ったの。でもそれはまちがいだった。側近のフィンガルまで連れて、他人の城に無断で踏みこんできて、すぐに城から立ち去れと命じてきたのよ！ ダーモットがあんな乱暴なふるまいをするなんて信じられなかった。もしそばに剣があったら彼を斬り殺していたわよ。わたしはエニスレーンの新しい当主として、毅然とした態度で出て行くよう言ったの。そしたらダーモットはごちゃごちゃ訳のわからないことを言い出して、わたしを連れ出すよう兵に命じた」

今まで無言だったディアンが突然口を開いた。

「ごちゃごちゃって何を言われたの？」

「ごちゃごちゃはごちゃごちゃよ。もう忘れたわ。それよりわたしが話をしているときには口を挟まないで！」

「なんだよ！ 俺がルーフィスと話してたときには、平気で邪魔したくせに！」

「静かにしろ、ディアン。それでメイヴェ様は兵に連れ出されたんですか」

ディアンは懔然として黙り、メイヴェは頷いた。

「わたしはここを離れるまいと思って、お父さまの手をしっかりとつかんでいたんだけど、大勢の兵たちに寄ってたかって引き離されたわ。わたしが神なんて信じないと思ったのはそのときからよ。そのあと馬車に押しこめられ、この館に連れてこられたの。悔しかったし、悲しかった。新しい当主としてエニスレーンを守りたかったのに、ドムナルなんかに国を奪われては、亡くなったお父さまに合わせる顔がないわ」

「ご自分のほうが正当な小王だと主張してみてもどうですか」

「どうやって？ だってドムナルはうまくやっているのよ。橋や道路を整備したり、大きな船着場を造ったりして、町にお金をばらまいてるの。領民の支持を得るためのご機嫌とりよね」

メイヴェは涙を拭き、唇を噛みしめた。ルーフィスは慰めの言葉を見つけられず、ただ黙って聞いているしかなかった。ディアンは火かき棒で遊ぶのをやめてはいたが、同情を表さず無表情だった。

「わたしのほうは惨めな暮らしが始まったわ。こんな小さな館に閉じこめられ、侍女だの護衛だのという名目の見張りをつけられ、一步も外へ出られなかったんですからね。ところがふた月が過ぎたとき、見張り役の二人が突然いなくなったの。妙にべたべたしていたから、駆け落ちでもしたんだと思うわ。それがあなたたちに会った一昨日の朝のことよ」

「では昨日、食事を持った男がやって来たのは、先ほどおっしゃっていた報告役の下男というわけですか」

「そうよ。あなたたち見つかってないでしょうね？」

「もちろんです。こちらも誰かに見つかっては困る立場ですからね。馬車は小屋の裏に隠したし、馬は納屋に入れたし、使いが来たときは長持をベッドの下に隠して、僕は納屋に身をひそめていましたよ。居館に入って行ったようでしたが、メイヴェ様がお休みだったので、起こさずに帰

ったようです」

「そう、よかったわ」

メイヴェは安堵したように言って、再び食事に手をつけ始めたので、ルーフィスは穏やかに訊ねた。

「つまりこういうことですか。見張りがいなくなったので、ここから逃げるために僕を騙したと――そういうわけですね？」

「そうよ。見張りがいなくなったことが城に知られないうちに、ここを出ようと思ったの。でもね、無一文で馬一頭ないんじゃ逃げられっこないわ。わたしは世間知らずじゃないもの。やみくもに出て行っただめってことくらい知ってる。お金と足がなくちゃ、連れ戻されるか野垂れ死ぬのが落ちだわ」

神妙な顔つきで耳を傾けていたルーフィスが言った。

「あなたはたしかに不幸な出来事に見舞われました。それはつらかったこととお察しします。ですが、お金を得て町を出れば幸せになれるですか。そのために人をだましたり、盗みを働いて魂を穢しても、幸福だと言えるのですか。穢れた魂では、神の御許へいくことはできないのですよ」

ルーフィスの説教にメイヴェはむっとした。

「ベラント人にそんなことは言われたくないわね。あんたは司祭のつもり？ 祈ったってディアン一人救えないくせに」

ディアンが真っ赤に焼けた火かき棒を燃えている薪の山に叩きつけた。火の粉が埃のように盛大に舞い上がり、メイヴェは大声を上げる。

「何するのよ、危ないじゃないの！」

「うるさい！ 焼けた鉄の棒で目ん玉突き刺してやりたいくらいだよ！」

「なんですって？ わたしの身の上を教えてやったのに、その態度は何なの？ 少しは敬意を払いなさいよ！」

メイヴェは腹立ちまぎれにテーブルの脚を蹴飛ばし、スープをこぼした。ルーフィスは椅子から腰を浮かせる。

「食事中ですよ、二人とも！ 静かにしなさい！」

睨みあっていたメイヴェとディアンは、揃って不満げに口を尖らせた。この二人の行動傾向はどこか似ている――ルーフィスは嘆息し、道で貴婦人のようにふるまっていたメイヴェを、遠い過去の美しい思い出として懐かしく思いながら、再び腰を下ろした。

メイヴェは泣き顔を見られまいとするように俯き、時おり鼻を静かにすすり上げながら、食事を持っていた。ルーフィスは彼女が本当に傷ついていることに気づいた――横柄な言動はきっとそのせいなのだろう。彼女の信仰心の欠如を大目に見ることにし、胸の内でメイヴェのために祈った。

険悪な雰囲気の中で食事が終わると、メイヴェは鼻声のまま、まだ怒気をはらんだ口調で言った。

「盗みの計画を話すわ」

ついにきた。メイヴェ様の改心も祈ったのだが、神には届かなかったのか――ルーフィスは自

分の力不足に落胆した。

「まず、ディアンは寝室からダーモットを連れ出して、どこかに引き止めておいて。その間にルーフィスとわたしは彼の寝室を通過して、城内に入るわ。で、成功したらまた落ち合しましょう」

ルーフィスは懸命に口を挟んだ。

「でも、どうやって城へ入るのですか。城の周りには濠がありますし、警備兵も多いでしょうし、忍びこむのは不可能なのでは……」

「あそこはわたしの城よ。トゥルベク家の者が知らない抜け道だってあるのよ」

メイヴェはルーフィスをねめつけた。

「難癖つけて計画を断念させようとしたって、そうはいかないわよ」

女性は生来男性より魔物的な行動をとりやすいと言われているのは真実だとルーフィスは悟った。これは試練なのだ。この罪深い娘を改心させるという使命を見失ってはいけないと、自分に言い聞かせた。メイヴェ様とディアンの二人を救うためにも、自分の信仰をゆるぎないものにしなければならない。自分が正しい道を示してやらなければ、彼らは今のまま迷い続けるだろう。

ディアンは身をのり出して訊ねた。

「俺はダーモットっていう男を連れ出しておけばいいんだね？」

「そうよ。まだ十八歳なんだけど、恥知らずの卑怯者よ。連れ出したら、あんたの好きにしていわ」

「人殺しはさせないって約束だったではありませんか！」

ルーフィスは声を張り上げた。

「わたしは好きにしていっていいと言っただけで、殺していいと言ったわけじゃないわよ。そんなことよりあんたのほうは大丈夫なの？ まるで他人事のようにだけど、一緒に城へ行くのよ」

「……だ、大丈夫ですよ……」

これは試練、試練なのだ。めまいがして、気がつくともテーブルの縁を握りしめていた。

メイヴェは口元を端布で拭ってから、明るく言った。

「あんたは物事を難しく考えすぎるの。いざとなったら袋の中は盗品じゃなくて小石だと思いなさい。小石を持ち歩いちゃいけないなんてことはないものね」

魔物は誘惑する者と言われているが、彼女の場合そう生やさしいものではなく、脅迫か一種の暴力だろうと思われた。いくら傷ついているといっても、どこまで許容すればいいものか。どうすれば彼女を止められるだろうとルーフィスが真剣に考え始めたとき、メイヴェは盗みとはまったく関係ない細かい段取りにうきうきと頭を悩ませ始めていた。

「わたし泥棒に行くのって初めてなの！ 何を持っていったらいいかしら？ どんなものを着たらいいかしらね？ 服はすべて届けさせてあるのよ」

「黒で動きやすく、目立たないようにすればいいんだよ」

ディアンはそう言ってから、メイヴェに向かって口ごもった。

「ちょっと……お願いがあるんだけど」

「なにかしら？」

「あのさ……」

「なによ。はっきり言いなさい」

「……うん」

ディアンは咳払いをして、言い訳をするように言った。

「ルーフィスに……金を詰めさせないでくれる？ つまり、ルーフィスはただの護衛役だってこと。だって俺たちにつき合わせるわけだからさ」

ディアンは早口で言い終えると、決まり悪そうにメイヴェェから顔をそむけてしまった。ルーフィスは驚いてディアンをまじまじと見つめ、メイヴェェはあきれて声が大きくなった。

「護衛役だけだったらどうだって言うの？ 手を汚したことにはならないってわけ？ バッカみたい。それじゃこうしましょう。これは泥棒じゃないわ。わたしの財産を取り戻しに行く正当な行為よ。どう、これで納得した？」

「なんでもいいけどさ……とにかくルーフィスはただの護衛だよ。承知してくれないなら、俺は降りるよ」

「わかったわよ。袋にお金を詰めるのはわたしがする。それでいい？」

ディアンがこっくりと頷いた。

「ありがとう、ディアン」

ルーフィスはディアンに礼を言った。ディアンが自分の信仰のために言い出してくれたことだと察したからだ。しかしディアンは礼に対して顔を上げもせず応えもしなかった。

そしてディアンのこの申し出のおかげで、ルーフィスはいよいよ犯罪計画から逃れられなくなった。

ルーフィスとディアン事情

食事がすむと、ルーフィスはディアンを連れて居館を出た。あたりに他の民家はなく、たとえ明るい月夜であっても、夜の冷えとともに静寂が肌に染みる。

二人が寝泊りしている小屋は居館よりさらに古い。ちょっと風が吹いただけで家が激しく揺れ、漆喰の壁がぼろぼろと落ちるので、気がついたらどこかべつの土地に吹き飛ばされているのではないかという不安に駆られる。しかしどんな家であっても屋根があり、雨露をしのげるだけ神に感謝しなければならない。

ドアを開けるとすぐ左手に、ぐらつくベッドが一台と椅子が一脚置かれている。右手の空いていた床に、ディアンの長持と日用品の入った木箱を入れたので、小屋は過ごすための空間ではなく、ぎっしりと物を納めておく倉庫のように窮屈になっていた。

ディアンは「またここか」とぼやきながら、自分の長持を長椅子がわりにして座った。「あの女、盗みが決まったとたん、やけに張りきってるよね。うるさいっらないよ」

ろうそく一本与えられていないので、ルーフィスは転ばないように慎重に移動した。上着を脱いでから寝床に腰かけ、長靴を脱ぐ。ディアンはその様子を黙って見ていたが、声を落として訊ねた。

「ルーフィスはどうなの？ メイヴェと俺のせいで罪を犯すことになったんだよ。本当にいいの？」

「いいよ。君が護衛役だけと言ってくれたからね」

盗みに行くことを納得したわけではないが、護衛役だと頼んでくれたディアンに行きたくないとは言えなくなっていた。

しかしディアンは声を苛立たせた。

「勘違いするなよ。あとでルーフィスに恨まれたらいやだから言ったんだ。それだけだよ」

「違うよ。あれは思いやりからだ。君にはまだ人間の心が残っているんだ。そうだろう？」

「これだからルーフィスのために何かするのはいやなんだ」

へそ曲がりなディアンの様子を見ながら、ルーフィスはひそかに希望を持った。彼は人間の心を捨ててしまったわけではない。魔物になりきっていないのなら、神を愛することもできる。そうすれば吸血魔としての肉体にも何らかの変化が訪れるのではないか——肉体と魂は繋がっているのだから。

下着だけになってベッドに横たわった。枠の横木が外れているせいで、ベッドは大きく揺れる。すえた臭いが鼻をついた。

目が闇に慣れ、室内の様子がぼんやりと見えるようになった。長持の上に薄紫色の二つの光が見える。ディアンが瞬きすると、虹を帯びた光がちらちらと点滅した。

「血をやるうか」

「いらないよ。まだ新月じゃないだろ」

ディアンは即座に拒絶した。ルーフィスがディアンに血を与えるのは月に一度の新月の晩だけと決まっており、それ以外のときに与えようとすると、必ず不機嫌になる。

近頃はいつもこうだ。ルーフィスが歩み寄っても、ディアンは急いで逃げてしまう。このくり返しが続いている。ディアンの思いやりに希望を持ったあとただだけに、ルーフィスはがっかりし、黙っていることができなくなった。

「……君は変わったね。出会ったときはそんなふうじゃなかったのに」

「出会ったときって人間だった頃のこと？ 変わって当たり前じゃない。今は吸血魔なんだからさ」

事もなげなディアンの言葉がルーフィスの胸を刺した。

「……そういう意味じゃないよ。あの頃の君は家族思いの優しい少年だった。午後の川べりで僕は釣りをした……仲のよい友人だった。まだほんの二年半前のことじゃないか。どうして君はそんなに変わってしまったんだ？」

暗闇の中ではディアンの表情はわからず、返事もない。ルーフィスは続けて訊ねた。

「僕の何が不満だ？」

「……不満なんかない」

「それじゃどうして僕にそういう態度をとるんだ？ 僕は旅で何があろうと、自分を見失うまいと努力している。君のためにもやけになってはならないと、自分を奮い立たせているんだ。それなのにどうして君は僕を拒む？」

ディアンは沈黙してから、小さな声で言った。

「……俺は変わったのに、ルーフィスは何も変わらないからだよ」

「じゃあ僕はどう変わればいい？ 一緒に盗めば満足か？」

薄紫色の光がいきなり立ち上がる。ディアンは返事のかわりにドアを開けて出て行ってしまった。ルーフィスは引き止めることもできず、閉じられたドアをしばらく見つめていた。

ルーフィスは激しい自己嫌悪に陥った――ディアンが僕のために護衛役だけと頼んでくれたことを考えれば、あんなひどいことは言えなかったはずだ。自分がいったん背負うと決めたものを放り出すような真似はしたくなかったが、メイヴェエの言うように、祈ったところで誰も救えないのかもしれない。

ルーフィスは虚無感に苛まれながら、重苦しい眠りに落ちていった。

ルーフィスとディアンが引き揚げるとすぐ、メイヴェは羊皮紙の切れ端にわずか二行の手紙を書き、寢室で黒く動きやすい長衣に着替えた。憂鬱な気分させる地味な服が役に立つ日が来ようと思ったことはなかったが、使いの侍女のふりをするには仕方がない。カンテラに火を入れ、折りたたんだ手紙と銀貨一枚を掌に収める。

メイヴェは音を立てないようにそっとドアを開けた。小屋はすでにしんとしており、話し声もない。カンテラの灯りがもれないように片手でおおいながら、外へすべり出た。もう一度あたりを用心深く見回し、人の気配がないことを確認する――異状なし。ルーフィスはともかく、ディアンは吸血魔のせいだ感覚が鋭いから、慎重に動いたほうがいいだろう。

棘(とげ)のついたハリエニシダが庭の柵沿いにこんもりと繁っている。メイヴェはその陰に身を隠しながら庭を抜け、足早に館を離れた。たびたびうしろを振り返り、岩を取り除いていない悪路につまずきながら進むと、ブナの森の入り口が見えた。ここまで来れば森が姿を隠してくれる。メイヴェは安堵して森に入った。

メイヴェは小屋に残した二人の顔を思い浮かべながら、戦利品を三等分なんてとんでもない、と考えていた。本来城は自分が相続するはずだったのだから、財産を彼らに分けてやることはない。自分に襲いかかった吸血魔や、他人の土地にやって来てのんきに暮らしているベラント人を騙しても、良心がとがめたりしない。

ブナの森を抜け、轍の跡がくっきりと残る道を左折し、町の中心街に向かう。シラカバの木立ちが途切れ始めたあたりから、メイヴェは頭巾をかぶり、心もちうつむいて歩くことにした。ここから先は民家が増えるし、帰宅の合図である終鐘が鳴っても、人影はわずかに残っている。目立たない長衣を身に着けていても、領民とすれ違うたびに緊張した。

中心街に向かうにつれ、かつてこの町にはなかった熱気に違和感を覚えた。橋は補強され、道路は拡張され、曲がりくねった道の空き地のそこそこに、骨組み状態の建物が見える。町は生まれ変わろうとする興奮に包まれているようだった。

喜ぶべきことなのかもしれないが、やはり悔しい。メイヴェは建設中の建物の骨組み一本くらい引き抜いてやろうかという衝動に駆られたが、なんとか思い留まった。見張りつきで軟禁されているはずの小王の姫としては、目立つ行動を避けなければならない。

無事に広場に出て、西側の一角を曲がるとまもなく、斜めにのびたやや細い通りにぶつかる。個性的な看板が並ぶ職人通りで、金細工屋、仕立屋、鍛冶屋、商館などが軒を連ね、昼は多くの領民が行き交う場所だ。しかし終鐘のあとでは一軒を除いて静まり返っている。

通りの端に唯一の賑やかな一軒、二階建ての酒場があった。二階の宿屋からも灯りがもれ、一階は音楽と話し声であふれている。もう閉店の時刻は過ぎているのに、閉められたドアの奥からは軽快なハープの音がもれていた。『よい人たち亭』と書かれた看板は、打楽器のようなダンスのステップと手拍子に合わせて、小刻みに揺れている。

メイヴェは久しぶりに聞く快いハープの音色に心を躍らせた。エリルアド音楽の旋律は複雑で速く、人の心を陽気にさせ、気がつく足にステップを踏ませている。

西部の田舎町エニスレーンであってもエリルアド全土と同じように、音楽とダンスは身分を越えた共通の娯楽であった。すべてのエリルアド人は優れた音楽家や踊り手であり、身分や場所に応じて思い思いの音楽を楽しむ。エリルアド人にとって音楽とは、健康を維持させ、人の輪を作らせ、誇りを与えてくれる、神からの贈り物であった。

メイヴェも酒場の音楽に合わせて小さくハミングしながら、踊るような足どりで酒場の脇に伸びる細い路地に入った。漆喰の壁の行き止まりになっているので、この路地に入ってくる者はまずいないだろう。メイヴェはカンテラを地面に置くと灯りがもれないようその前に立った。暗闇に身をひそめ、音を立てないようにつま先だけでステップを踏みながら、酒場の出入り口を見張る。

この手紙を頼めそうな人はいないだろうか――メイヴェは掌を開き、汗ばんだ羊皮紙の紙片を眺めた。トゥルベク家の出入りの誰か――農民でも商人でもいいのだが――を捕まえて、明晩伝令を送るという内容の手紙をダーモットに渡すよう言いつけなければならない。そのためにルーフィスの財布から取り上げた貴重な百ルグ銀貨を、駄賃として添えるつもりで持ってきたのだから。

計画を円滑に進めるためには、ダーモットに余計なことをされては困るし、下手に抵抗されて、ディアンに癩癢を起こされてはもっと困る。ディアンにはダーモットを好きにしてもいいと言ったものの、メイヴェは彼を危険にさらしたくないと思い始めていた。裏切りは許せないが、やはり――一度は好きだった人なのだ。

曲が終わって、ひときわ大きな拍手が起こった。新しい曲が始まるのを待っていると、開かれた窓から話し声が洩れてきた。

「乾杯！ トゥルベク家に乾杯！」

トゥルベクという言葉聞き、メイヴェは壁に張りついた。陽気な男たちの声が続く。

「アインガス様が倒れたと聞いてからは、夜もおちおち眠れなかったよ。城に残っているのはメイヴェ様だけだろ？ 十六歳の娘が小王になったら、エニスレーンは終わりだよ」

「すぐにベラント人の軍がやって来て、占領される場所だったよな」

「その点トゥルベク家なら安心だ。ドムナル様はベラント諸侯と親しいから、占領されることはないし」

「西部で繁栄している国はトゥルベク領だけだもんな。ドムナル様のおかげで久しぶりに仕事にありつけたから、こうして酒を酌み交わすこともできる」

「乾杯！ エニスレーンと新しい小王ドムナル様に乾杯！」

酒杯の鳴る音を聞きながら、メイヴェは酒場にのりこみたい気持ちを必死で抑え、唇を噛み締めた。

民とは卑しいものだ。今まではアネック家を主君として仰いでいたのに、今は侵略者に平気で尻尾を振っている。自分を守ってくれる者なら誰でもかまわないのだから、始末に負えない。

新しい曲が始まったが、もう踊る気にはなれなかった。ぼんやりと聞き流し、曲が半ばにさしかかった頃、ようやくドアが開く。

一人の男が出てきた。メイヴェはすぐに声をかけたいのを我慢して、まずは男が誰なのか確か

めることにした。メイヴェ本人が手紙を持ってきたとばれたら、元も子もない。

男は三十歳くらいのようにだった。足元をふらつかせながら、人通りの途絶えた往来を前屈みに歩き始め、道の真ん中で立ち止まり、酔いを冷まそうとして軽く頭を叩いている。

メイヴェの位置からはうしろ姿しか見えず、男が見覚えのある者なのかどうかはわからなかった。もう少し近づいて、どういう身分の者が確かめようと思い、身をのり出そうとしたときだった。肉屋の角から、小さな人影がひょっこりと現れる。メイヴェはあわててあとずさり、元の路地に身を隠した。

人影は足音を立てずに、男を目指してまっすぐ歩いていく。子供が父親を迎えに来たのだろうかと言ったとき、薄紫色の二つの光が見えた。

ディアンだーメイヴェは身を縮めた。

あとをつけてきたのだろうか。メイヴェはびくびくしながら、そっと二人の様子を窺った。男は背中を向けていて、やはり顔はわからなかったが、こちらに向かってくる子供の顔は次第にはっきりと見えてくる。子供のくせに気味の悪いほど完成された顔立ちーディアンにまちがいない。見慣れた大きめの灰色の服に黒い上着を羽織り、すっかり闇にまぎれている。

ディアンは男の前まで来ると、ぴたりと足を止めた。男は目をこすりながら、ディアンを見下ろした。

どうやらディアンの目的は自分ではないようだ。メイヴェは安堵の息を吐き、続いて不思議に思った。それなら何をしにこんなところへ来たのだろうか。

男はろれつの回らない舌で言った。

「何だァ、ガキ……」

「俺、おなかが空いてるんだ」

ディアンは男の言葉を遮るように言うと、にっこりと微笑んだ。自分の美しさが人を惑わせることを知っている女のような、下心を隠した微笑である。男はディアンに吞まれてしまい、返す言葉を失っているように見えた。ディアンは男の右手をとって、そっと包んだ。

「ねえ、俺の手冷たいでしょ。ずっと食べてないんだよ、ぺこぺこなんだ。優しそうな人が通りかかるのをずっと待ってたの。おじさんの手は温かくていいね。俺、おじさんみたいな人を連れてきてって頼まれて、探してたんだよ」

「連れてきてって……誰に頼まれたんだ？」

「俺の姉さん」

「姉さん？」

男の声が上ずった。

「そう、俺にそっくりの姉さん。二人で旅をしてるの」

「……姉さんってのはいくつだ？」

「十七」

「……お前にそっくりだって言ったな？」

「うん、すごい美人だよ。ほら、あそこ……あの角のところで俺たちが来るのを待ってる」

ディアンは人っ子一人いない道の先を指さす。男は首を傾げた。

「……誰もいねえみてえだがなあ」

「見えないの？ そりゃおじさんが飲みすぎたせいだよ。ねえ、早く行こうよ、姉さんは食べさせてくれたら、おじさんが望むことならなんでもするって言ってるんだからさ」

男はごくりと喉を鳴らした。

「……なんでも？」

「そう、なんでも。おじさんは優しい人だから。姉さんは優しい人と仲良くするのが好きなんだ」

「仲良くって……おまえ、言ってる意味わかってんのか？ どうせ金がほしくて俺をおだててんだろ」

「お金じゃないってば。ほんの少し食べさせてくれるだけでいいんだよ。食べさせてくれた人にお礼をするのは悪いこと？」

「俺ァ今は食べ物なんて持ってねえよ」

男が肩をすくめると、ディアンは安心したように言った。

「ほら、やっぱりおじさんは正直ないい人だ。俺をだまそうとしなかったもの。食べ物はあとでもいいから、まずは姉さんに会ってみてよ。おじさんみたいな人なら、姉さんきっと喜ぶと思うな。それにさ」

ディアンはずっとつかんでいた男の手を持ち上げ、その甲に口づけた。手に唇をのせたまま、上目遣いに男を見た。

「俺は言ってる意味わかってると思うよ。いやなら断れば？」

男はディアンから手を振りほどかなかった。ディアンはきれいな顔に花を咲かせるように微笑んで、男の手を引いた。

「早く行こう。姉さんが待ってる」

二人は静まり返った通りを並んで歩き始め、広場とは反対方向の路地に入り、消えた。

『よい人たち亭』から喝采が響き、メイヴェは我に返った。声にならない声で叫びそうになる――姉さんって誰よ！ 何やってんのよ、あの子は！

ディアンを叱りつけてやりたい気持ちとは裏腹に、メイヴェの指先は細かくふるえていた。二人に見つかったら大変なことになる――そんなことはわかっている。それでも確かめなくてはという気持ちがメイヴェの背中を強く押した。

カンテラの炎を落とし、路地から一步を踏み出した。二人のあとを追い、細い路地に入る。漆喰の家並みがまばらになったところで、二人を見つけた。充分距離をとって、家の陰から陰へと走って身を隠しながら、用心深くあとをつける。

月明かりの下、二人は手をつないで楽しそうに歩いていた。普段のディアンの性格からは考えられないと、メイヴェは自分の目を疑ったが、よく見ると、ディアンが男の手をつかんで離さないのだ。這いのぼるいやな予感に襲われた。

中心街を過ぎると次第に木々が増え、道は草に覆われ始めた。まっすぐ空に向かって伸びるハンノキや小枝を繁らせたヤナギが闇の中で不気味にそびえ立っている。メイヴェが身を隠す場所は家から木立や繁みに変わり、枯葉や枯枝を踏む音に神経を尖らせた。

林に入る小道の前で二人は足を止めた。メイヴェも離れたヤナギの陰で立ち止まり、様子を窺う。ディアンはかわいらしく小首を傾げ、小道を指さしている。二人は何か話し合っているようだが、内容はわからなかった。やがて男は頷き、二人は小道を分け入っていった。

メイヴェもあとを追い、小道の入り口まで来ると、二人と同じく立ち止まった。たしか突き当たりは湖で、夜になると鬼火が飛び回っているという噂があったのを思い出す。ハンノキに挟まれた小道はぽっかりと浮かび上がった闇のようで、見通しが悪く、数歩先は何も見えない。男が躊躇したのがわかった。

二人の影はとうに消えてしまっているが、ここで尻ごみしている場合ではない。周囲を見回し、鬼火が飛んでいないことを確かめてから、いざ一步を踏み出そうと唾を飲みこんだ。

その瞬間、小道の先で男の短い悲鳴が響いた。踏み出したメイヴェの足が硬直すると同時に、重いものが地面にぶつかる音を聞く。メイヴェは悲鳴を上げそうになり、とっさに自分の口を手で押さえた。

太い木の枝が折れる大きな音――地面の上を何かが引きずられる音――静かな森を騒がせる音に男の呻き声が混ざっている。しばらくすると男の声は聞こえなくなり、かわりに湖に何か重いものが落ちる音がして、闇は元どおりに静まった。

何事もなかったかのように、ハンノキの葉がさわさわと風に揺れている。

メイヴェはディアンの目を思い出した――獣が獲物を追いつめる鋭い目。押し殺された息遣い。むき出された白い牙。

湖のほうから小さな足音が近づいてきた。

――見つかったら、殺される。

メイヴェは目の前のハンノキの陰に飛びこんだ。根元から生える三本の太い幹と下草の背後に身を隠し、はみ出した長衣の裾を丸め、足元に寄せる。

枯葉を踏むかさかさという音がどんどん近づいてくる。息を止めた。心臓の鼓動が耳に響く。目をかたく瞑った。

草を踏む足音が、木一本へだてた目の前を過ぎていく。その歩みは一足ごとに大地を踏み固めているのではないかというほど遅く思われた。

――お願い、早く行って。神様、わたしをお守りください。助けて、お父さま。

息を止め、足音が通り過ぎることを祈ると、神様が父によってメイヴェの願いは聞き入れられた。足音はしだいに遠ざかり、しばらくすると聞こえなくなった。

メイヴェはそろそろと目を開いた。乾いた涙でまぶたが貼りついている。木陰から頭だけをそっと出し、ディアンの姿を探した。

町の中心街に戻って行くディアンの姿はすでに小さくなっていた。夜道を急ぎもしない子供のうしろ姿が一つぽつんと歩いており、なぜか迷子のように寂しげに見える。ディアンはそのまま暗い道の果てに消えた。

メイヴェはハンノキの陰からひっそりとした道へ這い出し、腰を抜かしたように座りこんでいた。煌々と冴える月光は変わらず美しく、今の出来事が幻であったならよかったのにと思わせる。

つい先ほどディアンが夕食をつくってくれたことを思い出した。それから暖炉の前に座って憎まれ口を叩き、痲癢を起こしては騒ぎ、ルーフィスに叱られていた。

ディアンは人を殺さないと言った。ルーフィスとそう約束していると言った。

しかし男は戻ってこない。

メイヴェは体の奥からふるえがわき起こってくるのを止められなかった。冷や汗が引いてくると、寒さを覚えた――帰らなくちゃ――ディアンに見つからないうちにベッドにもぐりこんで、何も見ていなかったふりをしなくちゃ。

冷たくなったカンテラをつかんで立ち上がり、おぼつかない足どりで家路を急ぐ。自分では急いでいるつもりだったが、足はもつれ、ふるえる手はカンテラを何度も落としそうになり、家路は気が遠くなるほど長い道のりに思われた。歩いているあいだ中、ディアンに見つかりませんようにと祈り続けた。

誰にも見つからず居館のドアを閉めたたん、一気に体の力が抜け、ドアに寄りかかってへなへたと座りこんだ。汗ばんだ掌を開くと、くしゃくしゃになった手紙と銀貨が膝の上に落ち、ずっと拳を握りしめていたことに初めて気づく。

ディアンに殺された男は誰だったのだろう――自分の身の安全を確保したメイヴェは、ようやく死んだ男のことに思い至った。ディアンを警戒し、男のことはほとんど注意していなかったので、よく思い出せない。だけど――とメイヴェは思った。どうせドムナルのために乾杯していた領民だ。そんな男、死んだってどうということはない。そうでしょう？

殺された領民のことよりも、ダーモットへの伝言を果たせなかったことが引かかった。

夏も終わったこの季節になると、一時課の鐘が鳴ってまもなく夜明けとなる。メイヴェはしっかりと閉ざされた寝室で一睡もせず、小鳥の鳴き声を聞いてようやく、肩に入っていた力を抜いた。これほど夜明けを待ち望んだのは、生まれて初めてだった。

錠を上げて居館の外に出ると、世界は昨夜とは一変し、命を脈打ち始めていた。館からブナの森に続く一本道がくっきりと浮かび上がり、穢れのような闇が見る見る消えていき、かわりに緋色の朝焼けが一面を照らしている。朝靄がゆっくりと晴れ、露に濡れた草原が輝いていくのが見える。

メイヴェは居館の前に立ち、朝焼けに染まった小屋を眺めた。ドアは閉ざされている。メイヴェは明るい顔になって澄んだ空気を深呼吸した――もう大丈夫だ、ディアンはわたしのところへは来なかった。

緋色の光が透過り始めた頃、小屋からルーフィスが出てきた。メイヴェの姿を見ると、帽子を取って、爽やかに朝の挨拶をした。ルーフィスは早朝でもきちんと髪をなでつけ、隙のない身なりをしている。メイヴェは昨夜の尾行のせいで自分の髪や服が乱れていることに気づき、恥ずかしくなった。眠っていないのだから、目の下の隈や肌の荒れもひどいに違いない。

身支度のために寝室に戻ろうかと考えたが、もう少しこの美しい朝を見ていたいという思いに駆られ、その場にとどまった。エニスレーンの朝をゆっくりと眺められるのは、今朝が生涯最後になるだろう。

ルーフィスは館の背後から射してくる朝日を浴び、自らも輝きながら近づいてきて、周囲を見渡し呟く。

「この館で早朝の景色を見るのは最高ですね」

ベラント人であるルーフィスが自分と同じ思いでいることに驚いて、メイヴェが顔を向けると、ルーフィスは朝の静けさを乱すまいとするかのように優しく微笑んだ。

「ここはゆるやかな傾斜の丘の上だし、草原に囲まれているから、空が広く見え、朝のすばらしさを存分に味わえますね。ここへ来るとき通ったブナの森は暗くて、正直気味悪く感じていたのですが、今はまがまがしさのかけらもない。朝とはまるで奇跡のようです。爽やかな光を浴びただけで、すべてがあんなに違って見えるものなのですからね。ここで朝を迎えると、世界は神がお創りになった芸術だと心から感謝できます。それに、こうして誰かと」

そこまで言うと、ルーフィスはふいに口をつぐんでしまった。

メイヴェは訊ねた。

「ディアンは眠ってるの？」

「はい」

ルーフィスは頷き、穏やかに続けた。

「メイヴェ様にお願ひがあるのです。貯蔵穴があるとおっしゃっていたでしょう？ それを借りられませんか。念のため、ディアンを穴の中に入れてたいのですよ。小屋に錠はありますが、かなり古く、ちょっと力を入れて叩けば、ドアごとはずれてしまいますので……誰でも侵入できる状

態は困ります。彼は日光に当たると死んでしまいますから、人目につかない場所に匿っていたほうが安心できるのです」

あの子は人殺しよーメイヴェはルーフィスに真実を話してやろうと思ったが、ここでいきなり話しても、信じてもらえるとは思えなかった。穴を貸すことを承知し、納屋の奥の床板を開けると石張りの空洞になっていると説明した。ルーフィスは礼を言って、納屋に向かう。

館の周囲にあるのは害獣よけの柵ぐらいなので、吸血魔にはたしかに危険ではある。それに使いの下男が小屋を覗く可能性は高く、ベッドの下に隠してある長持が見つけれたら、一巻の終わりだ。貯蔵穴にディアンを隠すというのはいい考えかもしれないールーフィスが何も知らないなら。

メイヴェは居館に戻った。少し肌寒かったので、薪を暖炉に足してから、奥の椅子に腰かけた。暖炉の炎がはぜるのを眺めながら、ぼんやりと考えたーディアンは人を殺している。しかもあの慣れた様子では常習犯のようだが、ルーフィスは本当に何も知らないのだろうか。

ひと仕事を終えたルーフィスが、明るい表情で入ってきた。

「長持を入れるにはちょうどよい大きさの穴ですね。食料を入れる余裕はなくなっていました」

「かまわないわ、入れるものなんてないから。それより長持を揺らしたりして、ディアンは起きなかったの？」

「大丈夫です。眠っているあいだは仮死状態に近いみたいですから」

ルーフィスは皿を並べ、テーブルの上の籠からパンとチーズを出して分け、杯に水と葡萄酒を注いで割った。メイヴェはささやかな朝食ができあがるのを眺めながら、ディアンが眠っているうちに真実を話してしまおうと決めた。

ルーフィスは昨夜と同じドア近くの椅子に腰を下ろすと、「共に祈りましょう」と言って手を組み、迫るような目でメイヴェを見据えた。メイヴェもつられて手を組むと、ルーフィスは満足そうに頷き、熱心に食前の祈りを唱え始める。今朝はディアンがいないので、声を出してもいいらしい。

メイヴェは目を伏せ、祈りの言葉を聞き流しながら、昨夜のことをどう話そうかと考えていた。ルーフィスがディアンの秘密を知っているかどうかわからないのだから、いきなり、あの子は人殺しよ、とは切り出しにくい。

ルーフィスの「感謝します」という一言が結ばれ、ようやく食べることが許された。メイヴェはどんなショックを受けても食欲だけは失わないという胃袋の持ち主だったので、すぐパンを手にとって口を開いた。

「ディアンはどうして吸血魔になったの？」

ルーフィスは一瞬怯んだように灰色の目を見開いたが、すぐに落ち着いて答えた。

「僕も詳しくは知らないんですよ。彼は話したがりませんしね。これは推測ですが、おそらくあの民族特有の容姿のせいだと思います」

「容姿ってどういうこと？」

「ディアンの民族は見目よい者が多いようなのです。彼らはきめ細かく透き通るような肌を持ち

、顔立ちも際立って整っていて、体つきも立派です。特に特徴的なのは目なのですけどね」

「目？ どこが？」

「目の色自体は様々なんですが、光の加減で美しい虹彩が映ります。ディアンは夜しか起きていないので、わかりにくいかもしれませんが、注意深く見れば薄紫色の目に七色の光がかかっています」

「七色の光ねえ……見えた気もするけど、どっちかと言うと、獣のように光ることのほうが特徴的よね」

「光るのは魔物だからですね」

ルーフィスは苦笑して続けた。

「とにかくその美しさが評判を呼び、王都デリンでは妖精の血を引いていると言われ、社交界で人気だとも聞きました。英雄は妖精を妻に娶るというエリルアド国の伝説に倣って、ベラント貴族に嫁いだ娘までいるとか」

「ふうん、妖精ねえ。確かに吟遊詩人が大喜びで讚えそうなほどきれいだものね」

「ええ。それに彼らはどこから来たのかよくわからないので、神秘的に見え、そういった評判を増長させたのだと思います」

「どこから来たのかわからない？」

「はい。訊ねても山の向こうとか谷を越えてとか、あいまいなことしか言いません。出身を隠したがつているようです」

「出身を隠して、どうするつもりかしら」

「さあ、僕にもよくわかりません。それに人気なのは王都やベラント人が多く住む地方でだけですしね。僕たちの住んでいた町クロネアではまったく扱いが違いました。森の民またはアナグマと呼ばれていましたからね」

「アナグマ？」

「そうです。森という穴ぐらにこそこそと隠れ住んでいる不潔な者という意味です。唾棄すべき蔑称ですよ。彼らは貧しく、それゆえに人口が少なく、金も力も持たなかった。ディアンの一家もクロネアでは町の住民とは認められず、市門の外で生活していたのです。町の人々は彼らと関わったら災いが降りかかると言っ、近づこうとしませんでした。そして……」

ルーフィスは手を休め、テーブルの上に手を組んだ。

「ここからの話は決して他言しないと約束してくださいますか」

「大丈夫よ。神かけて」

「それでは」

ルーフィスはいったん言葉を切ってから、重々しく話し始めた。

「妖精の血を引くという評判の無力な彼らを所有することが、王都では流行となっているようなのです。金になる奴隷売買という商売の中でも、森の民を扱えばいっそう利益を得やすらしく、彼らはひどい追われ方をしています。口減らしを兼ねて子供を奴隷として売るとするのは他の貧民でもよくあることですが、森の民は特に狙われているというわけです」

「全然知らなかったわ！」

「ある日、ベラント貴族の婦人とその娘がクロネアへやって来ました。母娘はディアンを見かけ、娘の召使として彼を買いとると一家に申し入れ、一家を驚かせたのです。そりゃあそうでしょう、召使といえば下級貴族の仕事ですから、自分たちにお呼びがかかるなんて想像したこともなかったはずです。ディアンの両親は彼を小姓に出すことを決めました。生活に困っていたし、彼の発育が人並みより悪いことを心配していたからです——ところで、彼は何歳に見えますか」

「十歳ってところだと思うけど」

「十四歳ですよ、当時でね。肉体の成長は吸血魔になったとき止まってしまいましたが、あれから二年たつので、精神的には十六歳ということになるのでしょうか。立派な体格を持つ森の民にしては、あの体はめずらしいことなのだそうです」

「十四の肉体に精神は十六？　ということはわたしと同じ年？　ずいぶん大人びた口をきく子だと思ってはいたけど、とても見えないわね」

「ええ。森の暮らしは厳しいものです。ディアンは森には真理があると言っていました。真理というか、雨が降ったら草が生えるというような単なる法則を、森の民は真理と呼んでいるのですけれどね。彼らは常にその真理に身をさらし、森や泉、空や大地に試されながら生きているのだそうです。そしてディアンはその真理からはじかれてしまう存在だった。要は体力のない者は死に、成人しても独り立ちできないってことで……それなら理解できるでしょう。たとえば彼はたっぷりした服を着ていますが、大きめの服を着ると大きく育つというならわしで、母親が兄弟の中で彼にだけ着せていたらしいのですよ。今は単に、ぴったりした服は着慣れないからだと言ってますが」

ルーフィスの声は沈んでいった。

「結局ディアンはその母娘に連れられて森を出ていきました。ところが数日後、夜中に一人で僕の家を訪ねてきたのです。そのときにはすでに吸血魔になっていました——じつはその母娘が吸血魔で、仲間にしたところを逃げ出してきたと言うのです。でも話してくれたのはそれだけで、他にどんないきさつがあったかは知りません。訊いても口をつぐんでしまうのです」

ルーフィスは黙想でもするように、目を伏せた。

「吸血魔になってから、ディアンは変わってしまいました。何事もあきらめ、投げやりになってしまったように見えます。体の小さなディアンは、もともと森の民の法則からはじかれている存在でしたが、吸血魔になって、輪廻の輪からもはずれてしまいました」

「輪廻の輪？」

「そうです。彼らは太陽を上神、森や海、川などを素神と呼んでいます。死後魂は自然という器に移り、素神となって天と地の間に立ち、世界を支えるのです。そこでの命を終えるとまた人間の器に入って生まれてくる。それをくり返すのです。死ねなくなったディアンは人間の器に閉じこめられたと考えているようです」

「自然に還れなくなったというわけね」

「そうです。彼にはどこにも行き場がなくなってしまった。だから僕は彼のために祈っているのです。僕にできることは彼が罪を犯さないようにすることだけですから」

メイヴェはルーフィスの話に聞き入った。あのディアンにこんな事情があったことに感嘆し

て言った。

「積荷の中でいちばんの値打ち物がディアンだったとはね。うかつだったわ」

ルーフィスは口をあんぐりと開けた。

「あ……あなたはいったいどういう人なんですか！ 僕の話のどこをどう聞けば、そういう感想が出てくるのです？ ディアンを売ろうとでも言うのですか？ 憐れだとか、共に祈ろうとか思わないのですか！」

「べつに売りはしないわよ。わたしだって命が惜しいもの。それだけ値打ちのある民族なら、見た目でもうまくダーモットをたぶらかして、引っかけてくれるだろうと思っただけよ。それに、あんたの希望どおり、同情だってしてるわよ。美少年の人生って意外と大変なのね。吸血魔だからひねくれてるっていうだけじゃなかったのね」

言いながらメイヴェは考えた――わたしが血を吸われた夜、ディアンは罪人なら殺してもいいと言っていた。つまり妖精のような自分の姿を餌に声をかけ、寄ってくる者を奴隷狩りに見なし、襲っているということなのかもしれない。

ルーフィスが本気で怒り出したので、次の質問をした。

「ディアンは吸血魔になったけど、人を殺さないと約束した。そうよね？」

ルーフィスは慚然として答えた。

「そうですよ」

「そのかわり、あんたはディアンに血を与えていると言ってたわね？ どんなふうにしてるの？ つまり、どのくらいあげてるかってことよ」

ルーフィスは怪訝そうにメイヴェを見た。

「新月の晩に少し。噛みつかれたと思ってもすぐ終わってしまうから、たぶんほんの少しだけなのでしょう」

「少しだけって……血を飲ませたあと、気分が悪くなったりしないの？」

「しませんね」

「それでディアンは足りているの？ お腹が空いたって言わない？」

「言いませんよ。吸血魔は人間と違って少しの食事で――食事と呼んでいいものかわかりませんが――すむのです。たまに飲めば生きられるようですし、それにほら、モリバトの血が抜かれていたでしょう？ 夜になるとじっとしているから捕まえやすいと言って、彼はよくモリバトを捕まえてきます。そうやって動物の血も飲んでますから、心配はいらないのですよ。どうしてそんなことを訊くのです？」

あんたバカじゃないの、と怒鳴りつけそうになり、あわてて堪える。

メイヴェはディアンに襲われた夜のことを思い出した。喉の渇ききった人間が水を飲む様子に似て、ごくごく飲み干した瞬間、次の水杯に手を伸ばす。血どころか体中の水分を吸いとられるという感じで、すぐ気を失う羽目になった。あれは満たされた者ではない。ディアンはまちがいなく飢えている。

そしてルーフィスは本当に何も知らない。おつきあいでしか血を飲まれたことがないなら、恐ろしい牙を見たこともないのだろう。だから月明かりのない新月の夜か。あの姿を見られたら、

一瞬で人間とは別種の生き物だと拒絶されてしまうから、ディアンは闇夜を選んだのかもしれない。

金なんて望んでない。ディアンが飢えていることにも気づかない。ベラント人として生まれ、美しい信仰の世界に生きてきた。ルーフィスはあまりにも穢れを知らず、きれいだった。

「ねえルーフィス、今度はあんたのことを訊きたいわ。どうして貴族から落ちぶれたの？」

ルーフィスは持ち上げたぶどう酒の杯を空で止めた。当惑しているように苦笑しながら、杯を下ろして話し始めた。

「だから、ディアンに血をやるためなのですよ。僕は彼が人間だった頃から友人でしたが、ディアンは吸血魔になってしまって、クロネアに住めなくなってしまいました。彼には助けが必要だったわけで……まあ、そういうことです」

「地獄があるでしょ。ディアンにはそっちに行ってもらったら？」

「そうですねえ……でも吸血魔になったからといって、ディアンはそんな場所を知らないですよ。だから僕たちはこの世界を転々と旅するしかないわけです」

「じゃああんたは、ディアンのために自分の人生を捨てたって言うの？」

メイヴェの質問にルーフィスは頭を振りながら微笑んだ。

「捨てたわけではありませんよ。ディアンの件をきっかけに、僕は弱き者を助けるために生まれたのだと知ったのです。父はよく、神は人を平等につくられたのだと申しておりました」

「お父さまが？」

「そうです。父は領地を持たず領主に仕える一介の騎士ですが、在野の修道僧と呼ばれるほど博学でした。父がエリルアドへの移住を決意したのも信仰のためなのです。七百年前この地にセレス教が布教されたというのに、現在のエリルアドの聖職者は神の言葉を人々に伝えることを怠っていると聞いて、父は心を痛めていました。自分も何かできまいかとずっと悩み続け、そしてついに監督教会の援助を志し、家族を連れて海を渡ったのです。この地で暮らし始めてから誰もが父を慕い、頼ってきましたから、父はあらゆる階層の人間に分けへだてなく与えました。僕はそんな父の名に恥じない生き方をしなければなりません」

「じゃああんたがディアンと親しくなったのは、父親にならったから？」

「そうです」

「ディアンに血をやるのは弱者を救うという教えのため？ だからできるということなの？」

「ああ、そう……そうなのかもしれません。自分でもよくわからなかったのですが」

いつのまにかルーフィスは何十年も生きた老人のようにひっそりとして見えた。

「ディアンとの約束は魔物との契約ですから、僕は禁忌を犯したことになります。初めはディアンに血を与えるたび、神から遠ざかっていく自分を感じ、悩みました。しかし結局ディアンを見捨てられないのです。なぜなら僕はディアンと世界を結ぶ唯一の接点であるからです。僕がいなくなったら、彼は世界から完全に背を向けてしまうでしょう。目の前でまさに溺れようとしている者を見たなら、助ける義務がありますからね」

メイヴェにはルーフィスがわからなかった。義務を友情と呼べるのだろうか。聖本の教えどおりの自己犠牲は立派な行為だが、何かがおかしいという気持ちは拭い去れない。しかしそれは

っきりと説明することはできず、メイヴェは質問を続けた。

「あんたはディアンが好き？」

「好きですよ、もちろん」

ルーフィスは即座に答えた。

「ディアンは吸血魔ですが、人間の心を捨ててしまったわけではありません。本当は誰よりも思いやりがあるのです。あなたも彼の友人になってやってください」

ルーフィスは優しい灰色の目をくしゃっと細め、心から友を案じているという顔で微笑んだ。

聖性という言葉思い出した。穢れなく尊い魂――血で汚れたディアンが生きていくには、ルーフィスの聖らかな魂が必要だったのだろうか。ディアンはルーフィスに見捨てられるのが恐くて、自分の飢えを必死に隠しているのだろうか。

ルーフィスは貴族から落ちてもお、騎士道精神の持ち主だった。現実的なメイヴェにはさっぱり理解できない、吸血魔以上に不可解な生き物だった。彼の優しい微笑は魔物以上に厄介だ。

メイヴェは独り言のように呟いた。

「.....それがあんたたちの誓約ってわけね」

「誓約？」

「エリルアドでは、誓約ってとても神聖なものなのよ。守らなかったら死に至る義務のことを言うんだから。あんたたちの誓約は、ディアンは人を殺さないこと、あんたは血を与え続けること。あんたたちの場合、誓約を破っても死んだりはしないだろうけど、旅は終わるでしょ」

「.....誓約を破れば、旅は終わる.....」

ルーフィスは言葉を噛み締めるようくり返したあと、黙ってしまった。

メイヴェはディアンの友になってほしいと頼まれたが、わかったとは答えられなかった。昨夜、ディアンは一人の男を餌食にしているのだ。しかしそのことをルーフィスに告げる気も失せた。

誓約はすでに破られている。ルーフィスがそれを知ったらどうするだろうか。そしてディアンは自分の秘密を知られたとき、どうするつもりだろう。

食事がすんでしばらくすると、下男が食料を届けにやってきた。メイヴェはルーフィスを寢室のベッドの下に隠してから、ドアを開けた。下男は護衛や侍女の姿が見えないことに不審をあらわにしたが、メイヴェは「護衛は水汲み、侍女は薪を拾いに出ているけど、わたしがここにいるんだから問題ないでしょ」と高飛車に言って追い返した。

下男が帰ったあと、メイヴェは今夜に備えて眠ることにした。一方ルーフィスは夜まで祈って過ごしたいので、ろうそくがほしいと言う。ご苦労なことだと思いながら、希望のろうそくを与えてやった。

日が暮れてから目を覚ますと、納屋のほう騒がしい。メイヴェが目をこすりながら外に出ると、庭にディアン怒鳴り声が響いている。

「こんな穴に入れるなんて、どういうことか説明してくれよ！ 俺は生き埋めか？」

「いや、ここには濠がないから……」

「当たり前だろ、ここは城じゃないんだから！ 濠がないからって、どうして納屋に埋められなきゃならないんだよ？」

また喧嘩か、とメイヴェは嘆息した。どうやらディアンは貯蔵穴に入れられたことを怒っているようだが、大切な盗みの前に喧嘩なんて、本当にやる気があるのだろうか。しばらくすると納屋からディアンが足を踏み鳴らしながら出てきて、そのあとを困った様子のルーフィスがついていくのが見えた。メイヴェはかまわず盗みの支度を命じた。

二人は不承不承ながらも、長持や日用品の入った木箱、メイヴェの衣類や食料品の入った袋などを幌馬車に積みこんだ。そのあいだにメイヴェは黒衣に着替え、頭巾をかぶり、カンテラに油を入れる。首にかけてある城の金庫室の鍵を服の上から確かめた。

すべての準備が整い、三人は緊張した面持ちで居館の前に集まった。メイヴェが宣言するように言った。

「行くわよ」

ディアンは力強く、ルーフィスはずられたように頷く。メイヴェはカンテラを下げ、威勢よく歩き始めた。ディアンは昨夜と同じ黒い上着を羽織り、ルーフィスは盗人用の小道具――ろうそくと火口、火打石、火打金、縄ばしご――の入った麻袋を持ち、一行は出発した。

地面に盛り上がった木の根につまづかないよう気をつければ、ブナの森は抜けられるが、昨夜同様森を出たところから緊張感が高まった。シラカバに挟まれた道は満月の光を浴び、銀色に輝いて明るい。三人は頭巾を深くかぶって一言も口をきかず、先を急いだ。

広場に入る手前の路地に来ると、突然ディアンが立ち止まって言った。

「ちょっと待って。この道はだめだよ」

「どうして？」

メイヴェが小声で訊くと、ディアンは折れた道の先を指さした。

「この先に人がいるから」

「人？」

メイヴェは一瞬どきりとしたが、すぐに思い直して続けた。

「いるわけないでしょ。もう真夜中過ぎなんだから」

「でも、いるんだってば」

喧嘩になりかけた二人を、ルーフィスが両手を上げて制した。

「少し冷静になりましょうーディアンはとてつもない鋭いんですよ、メイヴェ様。彼が人がいると言うなら、それは真実です。べつの道を行ったほうがいいと思いますが」

ルーフィスの言葉を聞き、メイヴェは考えこんだ。

「ということは……本当にいるのね？」

ディアンは頷く。

「じゃあこの道を行きましょう」

「どうしてですか！」

「だって確かめずに通り過ぎたら、あとで気になるじゃない」

「だからと言って……見つかったら危険ですよ」

「わたしが行くと言ったら行くの。黙ってついてきなさい」

メイヴェはうるさいハエを払うように片手を振り、ディアンの指さしたほうへ向かって歩き始めた。二人はあわててあとを追う。

曲がり角から顔を覗かせると、道の先にはディアンの言ったとおりに人がいた。白い漆喰の壁が真新しい建物の前に、荷馬車が止まっている。三人の男が忙しげに、重そうな箱を中に運びこんでいた。

頭上からルーフィス、下のほうからディアンの声が聞こえた。

「何をやっているんでしょうね？」

「悪だくみだよ、悪だくみ。こんな夜中にこそこそ何かしてるんだもん、いいことしてるわけないって。ま、俺たちと同じってことだね」

「いや、そういう決めつけはよくないよ。僕たちのことはともかく、他人を予断で判断するのは危険なことだ」

メイヴェは振り返り、小声で命じた。

「ちょっと行って、何を運んでいるか見てきなさい、ディアン」

「なんで、俺が？ やだよ」

「あんた今、あいつらが悪だくみしてるって言ったでしょ。だったら、確かめなくちゃ」

「どうして？ 一口のせてもらおうっていうの？」

「バカ。わたしはこの町の小王の娘なのよ。わたしの知らないところで勝手に悪だくみなんかさせないわよ」

「どういう理屈だよ、それ？ じゃあ城へ盗みに行くことは悪だくみじゃないってわけ？ 確かめたいなら、自分で行けば？」

「あんた、誰に向かってものを言ってると思ってるの？ いいかげんその口のきき方を直しなさいよ！」

「そっちこそ、俺はメイヴェの従者じゃないってこと、いいかげん覚えてくれよな！」

険悪な雰囲気になりかけた二人の間に、ルーフィスが再び割って入る。

「行って来てくれないか、ディアン。女性を危険な目に遭わせるわけにはいかないから……」

「ルーフィスまで何言ってんだよ？ 盗みは危険じゃないと思ってんの？」

「いや、その……人の役に立つというのはすばらしいことなんだよ、ディアン」

「人の役に立つって盗みがか？」

「そうじゃなくって……」

ルーフィスは真剣な顔でディアンを見つめた。

「そういう気持ちがないと、君はだんだんと人間の心を……」

ディアンは癩癢を起こして、ルーフィスを遮った。

「説教はたくさんだ！ もういいよ、見てくりゃいいんだろ！」

ディアンは怒りながら走り出した。足音を立てずに家の陰から陰へと移動したかと思うと、いきなり屋根に飛び上がった。メイヴェとルーフィスが驚いて目をみはっていると、ディアンは屋根伝いに走り、あっという間に問題の建物の近くに着く。しばらく上から眺めたあと、同じ道をたどり、戻ってきた。

メイヴェは待ちきれずに、勢いこんで訊いた。

「で、なんだったの？」

「金属製のもの。武器じゃないかな」

「武器じゃないかなってどういうこと？ きちんと報告してよ！」

「仕方ないだろ、箱には蓋がしてあって、中は見えなかったんだもん。ただ、やけに重そうだったし、金属のぶつかる音がしたんだよね。あの音は鉄みたいだったから、お金じゃないよ……箱の大きさから言っても、武器か防具だね。それにしてもすごい数だったよ、あの倉庫の中に山のように積み上げられてたもん。たぶん今回運んだだけじゃない」

「……どういうことよ、それ……」

メイヴェの胸に不安がきざした。現在のエニスレーンで大量の武器が必要だとは思えない。自分の知らないところで、何かが起ころうとしているのか——しかしメイヴェの不安をよそに、ディアンが淡々と言った。

「いずれにしてもここを早く離れて、城に向かったほうがいいと思うけどね。あいつらが何を企んでいるか知らないけど、メイヴェにできることなんて何もないだろ。元小王の娘なんだからさ」

「あんたって最低！」

メイヴェはディアンを睨みつけてから、くるりと振り返り、元来た道を踏みしめて戻った——悔しい！ 人の気も知らないで、生意気なことばかり言うんだから！ 城に着いたら、目にものを見せてやるから、覚えてなさい！

三人は寝静まった通りを早足で過ぎ、無事寂しい荒れ野に出た。ここまで来れば誰かに見つかることはない。

なだらかな上り坂の荒れ野は西部特有の不毛の地だった。木立はなく背の低いヒースと灰色の岩に埋め尽くされ、荒涼という言葉がぴったりと合う。荒れ野の真ん中をつづら折の一本道が

貫き、登りきったところに懐かしいエニスレーン城の篝火が見えた。

メイヴェは思わず足を止めた。愛おしさに目を離すことができなくなる。荒れ野から吹きつける風に長衣をあおられながら、毅然として言った。

「あれがわたしの城よ」

「で、どうやってあの城に忍びこむの？」

ディアンは訊いた。

ベラント人の建てる城に比べると、エニスレーン城は少々大きな館程度の、ささやかな規模である。しかし長年にわたるエリルアド小王の絶え間ない小競り合いのため、防御の点ではそれなりに力を入れていた。正面にコリグ川から水を引いた濠、背後には急峻な山を控えさせ、高く厚い城壁の四隅には監視塔も設けてある。

「通常、入城するにはこの一本道に行くしかないわ。でも荒れ野にはヒースしかないから、城門の両脇に立つ監視塔からは丸見えになる。どうにかして荒れ野を抜けたとしても、今度は濠にかかっている跳ね橋があるの。当然弓をかまえた塔の監視兵と、剣を携えた門兵がいるわ」

「盗人が門を叩いて入れてくださいというわけにはいかないか。それで？」

「こっちょ」

メイヴェは城への一本道には向かわず、左手に荒れ野を見ながら、町との境を縁どるように歩いた。しばらくすると、荒れ野とは反対の方向に当たる右手に、藪に覆われ隠れかかった細い山道が見えた。

「本当にこっちょでいいのですか。城から離れて行っている気がするのですが」

ルーフィスが怪訝そうに訊ねる。メイヴェは言った。

「まちがってないわよ、あの山道を登るんだもの」

「山道？」

「そうよ。黙ってないとすぐに息が上がって歩けなくなるわよ」

メイヴェが急峻な山道を指さして言い、初めの一步を踏み出そうとすると、ルーフィスはうしろから声をかけた。

「ちょっと待ってください」

「なによ」

「暗い中、山道を歩くのはかなり危険です。僕が先に行きましょう。メイヴェ様はあとからついて来てください」

メイヴェは目を丸くし、ディアンはあきれたように深々と嘆息した。

「あんた、いつからそんなにやる気になったの？」

「女性は守られるべき存在ですからね。さあカンテラを貸してください。ディアン、君はしんがりを務めてくれ。では行きましょう」

メイヴェはルーフィスにカンテラを渡し、ルーフィスがディアンに荷物を預けた。一行はルーフィス、メイヴェ、ディアンの順に隊を組み、山道に入る。

山道は人が一人通れる程度の幅しかない。ルーフィスは道に張り出した太い枝や蔓をよけて道をつくり、足をとられないよう細心の注意を払って登っていった。

ディアンは跳躍力を生かし、岩や木の枝にリスのように飛び移りながら、余裕でついて来る。前方からルーフィスの声が聞こえた。

「岩場がありますから、気をつけてください。すべりやすいですよ」

いつのまにか道は岩盤に変わっていた。この岩場ならメイヴェも何度か通ったことがある。地面からしみ出した水気で確かにすべりやすく、夜間に崖から落ちるようなことがあれば、即、命取りだ。

メイヴェの背後でディアンの呟く声が聞こえた。

「バカだバカだと思っていたけど、これほどとはね」

確かにルーフィスはバカかもしれない、とメイヴェも思った——この山登りは泥棒計画を中止にする絶好の機会ではないか。もし自分が前を歩いていて崖から落ちでもすれば、この計画は終わりになる。ルーフィスはどうせ自分に逆らえないディアンを説き伏せて下山し、町を出ればいい。そんな好機をふいにして、自ら危険な先頭を買って出るなんてバカとしか言いようがないが、彼はそんな姑息なことを思いつきもしないのだろう。

メイヴェはルーフィスの背中を見た。身長があるので、腰の位置は高い。幅広く、頼もしい背中がゆっくりと自分を率いていく。ベラント人でも尊敬されるべき者もいるのだと知った。

わたしはこれからそんなルーフィスを裏切るのだ——そう思うと胸がちくりと痛んだ。

首の下まで流れ始めた汗を拭いながら、慎重に登り続けると、次第に傾斜が緩くなり、まもなく広い道に出た。少し下ると水音がどんどん近づいてくる。ルーフィスとメイヴェは木の枝につかまり、ディアンは途中で拾った枝を振り回して遊びながら、斜面を下りた。三人は石の敷かれた川岸に立つ。

目の前を民家二軒ほどの幅のコリグ川が流れていた。ここ数日雨が降っていないため水量が減り、川面には岩の頭が見え隠れしている。

「この川を渡るのよ、いいわね」

「わかりました」

「服が濡れたらいやだな」

ルーフィスは従順に頷き、ディアンはぼやいた。

メイヴェは川を見て立ちすくんだ——そう言えば重大な問題があった。メイヴェは腕を組み、二人に目をやった。

「あんたたち先に渡りなさい。向こう岸に着いたら、こっちを見ないで待ってて」

「はい、わかりました……」

「なんだよ、それ？ どういうこと？」

ディアンが目を細めた。メイヴェは素直じゃない子は本当にうっとうしいと思いながら、照れ隠しに鼻を鳴らす。

「なんだっていいでしょ」

「変だな……何か隠してるんじゃないの？ どうせメイヴェのことだから」

「どうせって、それどういう意味よ！」

「ひょっとしてこの川危険なんじゃないの？　すごく深いとか変な魚がいるとか」

失礼なディアンへの質問にメイヴェはむっとした。

「そんなわけないでしょ。ここはせいぜいふくらはぎくらいの深さしかないから、歩いて向こう岸に行けるわ。何けちつけてるのよ」

「だってメイヴェは信用できないもん。どうして自分はあとから渡ろうとするんだよ？ 俺はいけどルーフィスは生身だからね、また罠にかけられたりしたら困る」

罠という言葉にメイヴェはどきりとした。

ルーフィスが片手を上げ、とりなすように言った。

「ディアン、僕は大丈夫だから、あまり失礼なこと言うなよ……」

「理由を聞かせてもらおう。でなきゃ俺は渡らないよ」

「うるさいわね！ 川を渡るには長衣の裾を上げないといけないからよ、バカ！」

メイヴェがやけになって叫ぶと、ルーフィスが慌てた。

「僕が先に行きますから！」

すぐにルーフィスは長靴を脱ぎ、ズボンをたくし上げ、ざぶざぶと水に入った。

ディアンはぶつぶつと文句を言った。

「自分から裾を上げてルーフィスを引っかけたこともあるのに、どうして今度は見られたくないんだよ。女ってわからないよなあ」

ディアンは今来た道を少しだけ戻り、川沿いの木によじ登って蔓をつかむと、勢いをつけて一気に向こう岸に飛んでしまった。

ディアンなんかに乙女心は一生わかるわけがないと憤りながら、メイヴェは靴を脱ぎ、長衣を上げて膝の上で結び、川を渡った。川の水は冷たく、足の裏に水ごけが当たり、ぬるぬるして気持ち悪かったが、転ぶこともなく向こう岸に着いた。

二人は背を向けたまま、たくし上げたズボンを下ろしたり、靴を履いたりしながら身支度を整えている。メイヴェは二人にちらちらと視線を送りながら、急いで長衣を下ろした。二人はメイヴェがいいと言うまで、決して振り向かなかった。

川岸には丈高くごつごつした岩壁が伸びており、三人は上流に向かって少し歩いた。しばらくすると岩壁に黒々とした口を開けている洞窟の入り口が見える。山道よりいっそう暗い穴からは、冷たい空気が流れ出していた。メイヴェは穴を指さして言った。

「ここよ。この鍾乳洞に入るの」

「鍾乳洞？」

ルーフィスとディアンは揃って声を上げた。

「そうよ。わたしたちは山を登りながら荒れ野を迂回して、城の背後に回ってきたってわけ。この鍾乳洞の先は城壁のすぐ外側に繋がっているの。そこに一箇所だけはずれる壁石があるから、そこから城の庭に入れるわ」

「よくこんな道を用意しておいたね。昔から自分の城に泥棒に行くつもりだったの？」

ディアンが感心したように言ったので、メイヴェは頭を小突いた。

「バカ言わないで。非常時の脱出用に決まってるでしょ。トゥルベク家の者はこの秘密の通路の存在すら知らないはずよ。まあ知ったとしても通り抜けはできないけど」

「なぜです？」

「鍾乳洞の中は細い枝道がいくつもある迷路だからよ。アニエック家の者は、幼いとき小王から直々に正しい道を教わるの。つまりあんたたちみたいな素性の怪しい者がここを通るのは初めてということね。さあはぐれないようについてきて」

「……本当に忍びこめるんですね」

ルーフィスが驚きと失望をないまぜにしたような声で言った。

メイヴェは勇ましく先頭を切り、ルーフィスは再び麻袋を引き受け、ディアンは肩をすくめ、歩き始めた。

カンテラの炎は水気に反射し、内壁をてらてらと光らせる。洞内を知り尽くしているとはいえ、メイヴェは慎重に道をたどった。磨き上げられたような石灰岩は滑りやすく、歩きにくいし、低い天井から垂れ下がる太い鍾乳石や水たまり、地面から突き出る魔物のような形の岩が障害物となる。一本でも道をまちがえれば、ここから出ることは困難だ。

道が急に細くなり、濡れた岩壁に体をこするように歩いてしばらくすると、外へ出た。

そこは岩壁と石積みの壁に囲まれた井戸の中のような場所だった。大人が五人もいれば身動きが取れなくなるほどの狭い空間で、頭上には壁で丸く切りとられた星空が見えた。

三人ともすっかり泥だらけになっている。ディアンは泥を振り落とそうとしてぶかぶかの袖を振った。ルーフィスが安堵の声を上げる。

「無事抜けられましたね。メイヴェ様、ディアン、怪我はないですか」

「わたしは大丈夫よ」

「怪我はないけど、服が汚れたよ」

ディアンがぼやいた。メイヴェは眼前にそびえる丈高い壁をこつんと叩いて言った。

「エニスレーン城よ」

この石積みの壁が城をぐるりと囲む防禦壁である。三人は無言で互いの顔を見つめあった。ルーフィスとディアンの表情が引き締まっているのが見える。メイヴェの緊張も高まっていく。

積み重ねられた石のうち、下から三段目を端からそっと叩いていくと、わずかにずれる石が見つかった。

「ここが入り口よ。この先は城内になるわ」

二人は頷いた。

「この向こうは城壁の四隅に立つ円塔の一つ、西塔の一階に出られるの。そこは中央に井戸があって、それをとりまくようにらせん階段あるだけよ。塔から城の庭に出て、居館のある窓の下に行く。そこがたぶんダーモットの寝室——以前わたしの寝室だった部屋よ。そこからは二手に分かれるわ。ディアン、それからルーフィスとわたしの組にね。ディアンはカシの木伝いに窓に上ったら、縄ばしごを下に下ろしてちょうだい。それからダーモットの部屋に入って彼を外に連れ出し、気絶させて木の陰にでも隠しておいて。ディアンたちがいなくなってから、わたしたちは中に入るわ」

「了解」

二人は声を揃えて請け合った。

メイヴェはカンテラの炎を消した。ルーフィスが石を静かに叩いて塔の内側にずらし、人の通れる穴を作った。もはや自分が先に行くとも言わず、当然のように初めに中へ入る。

円塔の中は真っ暗だった。真正面の居館に抜けるドアを二人に気取られないよう、メイヴェは右へ向かって手探りで壁を移動する。突起の出た石を見つけて、そこを押すと、再び人の通れる穴ができ、外へ出られた。

そこは防御壁と居館に挟まれた細い通路だった。前進すると、通路の端はカシの木で塞がれている。太くごつごつとしたカシの幹の陰から顔を出すと、裏庭が見えた。

メイヴェは裏庭を眺めた――ようやく懐かしいエニスレーン城に戻れたのだ。

裏庭は城門とは反対側に当たり、右に礼拝堂の白い壁、そのそばには作物が豊作であるよう祈りをこめて植えられているカシとヒイラギの植え込みがあった。遠くの四つの円塔の上では篝火が揺らめいている。何もかもメイヴェには馴染みのものだった。

周囲を見回し、歩哨がないことを確認した。カシの木のうしろから出て、居館の角を曲がり、そのまま壁沿いに走る。冠のように枝を広げたカシの木の下で立ち止まり、もう一度歩哨がないか確認した。

顔を上げ、寝室の窓を見る。板窓は閉められ、物音一つしない。

「この窓よ、ディアン。ダーモットを縛り上げたら、さっきの細い通路で待っていて」

「ここ？」

ディアンは首を傾げながら、周囲をきょろきょろ見回している。

ルーフィスは麻袋の中から縄梯子とダーモットを縛るための縄を探し始めたが、手際が悪く、なかなか取り出せずにいた。メイヴェが急かそうと口を開きかけたとき、ディアンが言った。

「メイヴェに訊きたいことがあるんだけど」

「なによ？」

「この居館とさっきの西塔は別々の建物じゃなくて、くっついているんじゃないの？」

「え？……ええ」

ディアンは探るような目でメイヴェを見た。

「俺は夜目がきくからね、西塔の中にはドアが見えたよ。あれは居館に続くドアだろう？」

「……そうよ。それがどうかした？」

「居館に入るなら、二階の窓を使うよりも、ドア一枚開けて忍び込んだほうが早いし、確実なんじゃないの？ どうしてこんな回りくどいことするわけ？」

「それは……」

メイヴェは言葉をつまらせた。ルーフィスは現実的な知恵が回らないが、ディアンは彼を補って余りあるということを忘れていた。

あのドアを使うことはできない。ドアの向こう、居館の一階は従者たちの控えの部屋があり、そのことを二人に知らせないために、いったん外に出たのだ。

メイヴェはルーフィスと二人で二階から忍び込んだら、ルーフィスを一階の従者の部屋へ追いやり、自分一人で三階の城主の寝室へ向かうつもりだった――囷なしに城から金品を盗んで脱出することは不可能だからだ。

メイヴェは平静を装った。

「あのドアには鍵がかかっているから開かないの」

「鍵？ 見えなかったけど？」

「向こう側からかかっているのよ、もちろん。居館側からかんぬきが下ろされているの。わかった？」

「本当に？」

「本当よ。疑うんなら、戻って確かめてくればいいでしょ」

「納得したか、ディアン。それじゃこれ」

ルーフィスがようやく取り出した縄と縄ばしごを差し出して続ける。

「暴力はいけないよ。気絶させるといっても、できるだけ手荒なことはしないように」

ディアンは不審そうな目でメイヴェを見ながら、ルーフィスから縄ばしごと縄を受け取った。メイヴェは平然として言った。

「まずはディアンの出番よ。あんたならあの部屋に行くくらい簡単でしょ？」

「……まあね」

「神のご加……いや、気をつけるんだよ、ディアン」

ディアンは縄ばしごを縄を肩にかけ、軽く地面を蹴って、カシの下枝に飛びついた。枝から枝へと飛び移ったかと思うと、あっという間に窓の前に着く。すぐに縄ばしごが落とされ、メイヴェとルーフィスの目の前で揺れた。吸血魔とはまったく泥棒向きである。

「……ディアンは仕事が早すぎる。これでは心の準備もできやしない」

ルーフィスはため息混じりに胸の前で手を組んだ。

ディアンは下を見て一つ頷くと、窓を叩いた。メイヴェとルーフィスはカシの木の下に身を隠し、息をひそめ、耳をすませる。

ディアンの声が聞こえる。

「ダーモット様、起きてください。ダーモット様」

「誰だ？」

ダーモットの反応は早く、すでに寝ぼけ声ではなかった。エリルアドの勇猛の証である雄猪の紋章をいただくだけのことはある。

板窓が細く開けられ、抜き身の剣が突き出された。ディアンはわざとらしく声をふるわせる。「け、剣を置いてください、ダーモット様。ついでにお静かに。おいらはあなた様にお願いに上がっただけなんです」

「おまえ……子供か？」

窓が大きく開けられ、焦げ茶の髪のダーモットが顔を出した。久しぶりに見るダーモットの姿に、メイヴェの胸はひそかに高鳴る。

メイヴェより二つ上の十八歳であるダーモットは、戦士になるために生まれてきたような男だった。背は高く、骨格もしっかりしており、剣の腕前も相当なもので、若いながら歴戦の勇者の風格を備えている。兜の下からエリルアドの戦士にふさわしい長めの髪をのぞかせて戦場を走る姿は、戦の女神も恋をするだろうという評判だった。

「おい小僧、どこから城内に入った？」

「そんなことより大切なのは、おいらがここへ来た理由じゃねえですか」

ディアンは美貌を武器にするより、貧しい浮民風の口調で警戒をとく作戦らしい。なかなかの名演技だ。

「しゃれたことを言うガキだな。それじゃ侵入路についてはあとでじっくり吐かせてやることにして、先に用件を聞こうか。物乞いに来たわけでもなさそうだしな」

ダーモットの声は落ち着いていて、半分この状況を楽しんでいるようにも見えた。子供相手に大騒ぎする気はなさそうで、メイヴェはほっとした。

「そうですよ、物乞いなんてとんでもねえです。おいらをここに遣わした方が充分食わせてくれましたから」

「おまえの主人は誰だ？」

「メイヴェ様ですよ」

自分の名前を聞き、メイヴェは木陰で肝を冷やした――わたしの名を出すなんて、ディアンはいったいどういうつもりなのだろう。

ダーモットの声が動転する。

「メイヴェ？　メイヴェが俺に用があるというのか？　彼女に何か問題でも起きたのか！」

「おいらは何も知りません。ただダーモット様を城の外に連れてきてほしいと頼まれただけなんで。誰にも見つからないように、こっそりって」

「おまえがメイヴェの使いだという証拠を見せろ」

「何もねえです」

「証拠がなければ行けないぞ――では訊こう。メイヴェとどこで知り合った？」

「おいらは浮民で親もねえし、行く当てもねえしで、旅をしていたんです。で、行き倒れ同然でこの町に着いたところを、メイヴェ様に助けられたんで。あの方はおいらの恩人です。すばらしく優しい方です――けど、森のはずれで寂しそうに暮らしておいででした。おいら木登りが得意だから、メイヴェ様を喜ばせようと思ってお見せしたら、きれいな涙をはらはらとこぼされて、城に行ってもらえないかと言われて」

聞いているこちらのほうが恥ずかしくなるようなことを、よく次から次へとと言えるものだ。ダーモットが抵抗することを予想して酒場まで行ったのだが、その必要はなかった――ディアンは場慣れしすぎている。

ダーモットは少しのあいだ沈黙し、短く言った。

「入れ。したくをするから、待ってろ」

過剰な演技が功を奏したのか、ダーモットはあっさりとだまされた。ディアンの姿は窓の中へ吸いこまれ、すぐに衣ずれの音や靴が木の床に当たる音が聞こえ始める。まもなくドアは閉じられ、室内は静かになった。

ルーフィスが頷き、麻袋をしっかりと肩にかけ、縄ばしごを登り始めた。メイヴェもあとに続く。ルーフィスは室内に入ると、メイヴェの手をとって引き上げた。メイヴェはかつての自分の部屋に下り立った。

深く息を吸いこむと、懐かしい自分の部屋の匂いがした――窓際にはよく磨かれて黄金色になったカシ材の長椅子と椅子、右には絹のカーテンが下がった天蓋つきベッドがある。その足元には彫刻を施した櫃、毛織りの敷物――ていねいに作られた品々がどれほど部屋を温かく見せ、人の心を明るくすることか。

実際に目にしなくても、目を閉じるだけで城の全景を見ることだってできる――裏庭の草地を踏んで歩けば、左正面に日当たりのいい畑。その奥には台所と従者の小屋、駿馬を揃えた厩、大きな音を立てる跳ね橋に城門。夜明けとともに家畜は鳴き、台所からの煙が立ち上り、兵や従者たちの声で城内は一日中活気づく。春には待ちかねた隊商の荷馬車が城門をくぐり、夏は木陰にテーブルを出させて、父と食事をした。秋になると豚に食べさせるためのカシのどんぐり拾いを勝手に手伝うのが楽しみだった。乳母にはしたないとよく叱られた――。

「メイヴェ様？ どうしたんですか」

ルーフィスの小声で我に返った。メイヴェは小さく頭を振った。

「何でもないわ。行きましょう」

言うてからメイヴェは唇を噛み締めた。今の自分はあまりにもみじめだ。主君として君臨していた場所でこそそと身を隠しているなんて、亡くなった父に詫げる言葉もない。

――城をとり返したい。せつないほどこの城が欲しい。

カンテラを灯すことはできなかったので、手探りで壁を伝った。音を立てないようにつま先立ちで進み、窓の正面にあるドアに耳を当てる。物音がしないことを確かめてから、そっと開けた。

西塔へ出た。人けはなく空気も沈んでいる。左手には広間へ通じるドアがあり、正面には石造りの細いらせん階段が上下へ伸びている。上れば城主の寝室と金庫室、下れば従者たちの部屋。まさに天国と地獄というわけだ。

メイヴェはぴったりとうしろについているルーフィスにささやいた。

「荷物を貸して。わたしが持つから」

ルーフィスは怪訝そうにしながらも、麻袋をメイヴェに手渡す。メイヴェは道具類が音を立てないようにそっと袋を肩にかけた。

「わたし、怖いわ。先に行ってくれる？」

ルーフィスは頷いた。

メイヴェは深く息を吸った。それから自分のものであるべきこの城のことを思った。思いきって、口を開く。

「下よ。階段を下に下りて」

ついに言ってしまった。

ルーフィスは一瞬の間をおいてから、首を傾げた。

「……でもここは……」

言いかけてすぐ口をつぐんだ。まだ何か言いたげだったが、ルーフィスは黙って急な階段を一段ずつ下り始めた。

メイヴェはルーフィスの頭頂部を見下ろしながら、忍び足であとに続いた。一步、二歩、三歩。ルーフィスは慎重に前だけに注意を払い、背中メイヴェに預けていた。

この城の主人は替わったのだ。懐かしい時間は決して戻ってこないし、この城に自分の居場所はない――城内ばかりではなく、この町のどこにも。

町を出たらすべてを忘れられる日が来るかもしれないと、あの寂しい館で考えたこともあったが、一生忘れられそうもないと今夜悟った――どこか見知らぬ町で年老いても、わたしの想いはエニスレーンにあるだろう。

――わたしからエニスレーンを奪ったトゥルベク家が憎い。ベラント人も嫌い。ささやかでもいいから、仕返しをしてやりたい。このままおめおめと町を出るのはいやだ。そのためならどんなことだってする。

一階に下りた。ルーフィスは従者の部屋へ続くドアの前に立ち、階段を下りてくるメイヴェエを待っていた。メイヴェエも一階に着き、どうやってルーフィスにドアを開けるよう命じたらいいか、思案し始めたときだった。

「このドアを開けるのですね」

ルーフィスは自ら温かみのある声で言った。

メイヴェエは驚き、つられて頷いた。声も出なかった――ここはかんぬきが下りていて開かないと説明したはずなのに、どうしてそんなことを言うのだろうか。

ルーフィスはゆっくりと振り向き、ドアを押した。重いドアは大きくきしみ、メイヴェエは音の大きさに身を縮める。

室内は暗かった。従者たちは平行に並べられた五つのベッドで安らかな寝息を立てている。

ルーフィスはベッドのあいだの通路をまっすぐ進んで行った。メイヴェエは一步も動かず、ルーフィスの広い背中が遠ざかっていくのを眺めていた。ルーフィスは振り向かなかった。メイヴェエがついて来ているかどうか、確かめるつもりもないようだった。

――初めから振り向くつもりはなかったのだ。

そのことを悟ったとき、メイヴェエは何かから逃れるように、ドアの取っ手をつかみ、勢いよく引いた。ドアは闇に轟くような大きな音を響かせて閉じられた。

メイヴェエは階段を駆け上った。階下で男が叫んでいる。

「何者だ？」

「おい、起きろ！ 灯りをつけてくれ！」

メイヴェエはらせん階段をぐるぐると走った。一気に二階、三階と駆け抜け、屋上へと続く階段の途中で止まる。

「こっちだ！ 誰かいるぞ！」

階段に座り、乱れた呼吸がもれないように、メイヴェエは口元を押さえた。一階の騒ぎはどんどん大きくなり、石造りの西塔の壁に反響した。

「立てよ、この野郎！」

怒鳴り声と同時に人を殴る音が響く。メイヴェエの動悸が激しくなった。階段を上がってくる従者の声が聞こえた。

「侵入者は捕まったみたいだな」

「無抵抗で気が抜けたよ。いったい何をしに来たんだか。俺たちの部屋なんかに忍んできたって

何もないのにな」

「おおかた迷ったんだろうさ。いくらまぬけでも、どうやら相手はベラント人らしいぞ。面倒なことになりそうだな」

そのとき悲鳴のような叫び声が上がった。

「大変だ！ ダーモット様がいません！ ドムナル様を早く！」

ダーモットの不在が見つかった。メイヴェの心臓の音はどんどん早くなる。足音が轟音のように響き出した。二階に人が集まっているようだ。

三階のドアが開いた。

「なに？ ダーモットがおらぬと？」

ドムナルだ。ついに当主が起きてきたのだ。カーブを描く階段から顔だけを出して様子をうかがうと、夜着の上に上着を引っかけたドムナルと警護の従者が、駆け下りていくのが見えた。

城主の寝室は空になった。その奥の金庫室に入るには今がチャンスだ。

足音が二階に向かったのを確認して、メイヴェは三階に下りた。激しくなる呼吸を抑えながら、城主の寝室に近づく。

ドアを細く開けた。室内に誰かがいる気配はない。奥方はこの城に連れて来られていないのだから、ドムナルと警護の従者さえ出せば、誰もいないはずだ。メイヴェはするりと室内にすべり込み、すぐに厚いドアを閉めた。喧騒がずっと遠くなる。

かつてここは父の寝室だった。

すぐ左手の小さなドアは開かれたままだった。中は警護の従者が寝泊りする小部屋で、寝乱れたベッドが見える。父の従者も常にここに控えていたのを思い出した。

右奥の暖炉では熾火がちらちらと動いている。父は生前こまめに煤を掃わせ、大切に使っていた。薪はブナを好み、部屋が明るくなると気持ちも明るくなっていいとよく言っていた。

左手は天蓋つきベッドが占めている。メイヴェの使っていたベッドより柱は高く、幅も広い。メイヴェは吸い寄せられるように、ベッドに向かった――あの日父はこのベッドの上で息を引きとり、わたしはこのベッドにすがって泣いた。

亜麻布のシーツにふれると、父のものではないぬくもりが残っていた。自分たち父娘からこの城を奪った張本人の体温だ。シーツに置いた手が拳に変わった。

右の壁には、父が生きていたときにはなかったものがかかっていた――大きなタペストリーである。右手に矢を持ち、左脚をあらわにした森の女神フリダシュが中央に立ち、彼女に寄り添うように猟犬が頭を上げている。ずいぶん俗っぽい趣味だ。

メイヴェはベッドの脇にある金庫室のドアに向かった。ドアは小さいが板は厚く、鉄の横板で補強された頑丈なつくりになっている。

首にかけておいた金庫室のドアの鍵を、服の下から引っ張り出した。鍵の持ち主が城主の証であるのは、金庫室内に納められている家宝の首飾りの所有者であることを意味するためだ。

この首飾りは表面に精巧な組紐文様が彫られた黄金製で、先祖代々アネック家の当主のみが身につけることを許されていた。メイヴェはエニスレーンを出る前に、何としてもこの首飾りを持ち出そうと決めていた。他の金品はもちろん路銀に換えることになるだろうが、これだけは生

涯守り続けるつもりだった。

はやる気持ちを抑えながら、青銅の小さな鍵を鍵穴に差し込んで、右へ回してみる。空回りだった。改めて左へ回してみる――まったく動かない。メイヴェは焦って鍵を左右にひねったり、ドアの取っ手を押したり引いたりしてみたが、同じことだった。不審に思い、鍵穴に顔を近づけ表面を撫でてみると、さびが消え、鍵穴の周りの板に傷がついているのがわかった。

――ドムナルはこの鍵を付け替えたのだ。

メイヴェの頭に血が上った――あいつはわたしの知らないところで、勝手に鍵を付け替えたのだ！ 他人の城をのっとったあげく、勝手に！

メイヴェは焦って取っ手をつかんだが、ドアは開けなかった――首飾りまで――ドムナルはわたしの首飾りまで奪ったのだ――怒りが頂点に達した。

メイヴェは暖炉へ行き、火かき棒をつかむと、ドムナルが運びこんだ新しいタペストリーに向かって斜めに引き下ろした。タペストリーはばさりと音を立てて床に落ちる。火かき棒で表面をこすると少し焦げた臭いがしたが、厚い布地を切り裂くことはできなかった。涙で視界がぼやける中、火かき棒を振り、足で踏んだ。いくら踏みつけても怒りは治まらない。

タペストリーを転がすようにして丸め、窓のそばに持って行った。暖炉から火のついた薪を一本取り出し、息を吹きかけた。火はみるみるうちに大きくなり、熱くなる。板窓を開けると、タペストリーに火をつけ、外に放り投げた。積んであった干し藁に火が移り、一気に燃え上がる。

「火事だ！ 庭で火事だぞ！」

大声で叫ぶ男の声が聞こえた。同時に階下が騒がしくなる。

一階と二階に集まっていた従者たちが揃って外へ駆け出した。馬の蹄の地響きのように居館が揺れる。水を求める男たちの叫び声上がる。

メイヴェは寢室を飛び出し、階段を駆け下りた――悔しいけど、今は逃げるしかない。消火中の今なら、ダーモットの寢室に見張りを立てておく余裕はないはずだから、きっと逃げられる。

ダーモットの部屋が見えた。ドアは開けっぱなしで、中には誰もいないようだ。メイヴェは飛びこんだ。

大きな男がメイヴェの前に立ち塞がる――しまった、見張兵だ。メイヴェは戻ろうとしたが、背後でドアが閉められた。一瞬にして手足が冷たくなる。

「俺だよ、メイヴェ」

聞き慣れたダーモットの低い声だった。メイヴェは目を見開き、小声で言った。

「ダ……ダーモット？ びっくりさせないでよ！ どうしてあなたがここにいるのよ！」

「ここは今、俺の部屋になったんだよ。それより、この騒ぎはなんだ？」

ダーモットの問いに言葉を詰まらせていると、背後で錠の下りる音がした。はっとして振り向くと、薄紫色の双眸がこちらを睨んでいる。

「ルーフィスはどこだ？」

張りつめたディアンの声だった。

メイヴェは慌てた。

「ディアンの？ ディアンじゃないの？ どうしてあんたがここにいるの？ ダーモットを連れ出

しておいてって頼んだのに！ いえ、そんなことを話している暇はないわ！ ここにいるとまずいの！ 早く逃げるのよ！」

メイヴェの言葉は我ながら言い訳がましく、早口になった。ディアンはまったく動じず、冷ややかな視線を向けた。

「俺、ダーモット様に会ったとき、どこかおかしいって思ったんだ。だってメイヴェの言っていたような人には見えなかったんだもの。この人、メイヴェの婚約者なんだって？」

「――そうよ。でも昔の話だわ」

「どうしてそのことを話してくれなかったんだよ？」

「もう終わったことだもの。話す必要ないでしょ」

ダーモットが静かに言った。

「終わっていないだろう、メイヴェ。俺はおまえを城に迎えたいとずっと言い続けている。それなのにおまえが逃げてるんじゃないか」

「だってあなたは裏切ったじゃない。そしてこの城をのっとったじゃない」

「それは違う」

ダーモットはうしろ暗いところなど何もないというようにきっぱりとした声で言った。

「アインガス殿はたくさんの借金をつくって亡くなった。この城を維持していく力はもうアニエック家にはなかった。ベラント人に渡すならと、縁続きのトゥルベクが引き継いだんだ、違うか？ おまえが強情を張らなければ、あんなみすぼらしい館に閉じこめたりはしなかった」

「――口ではなんとでも言えるわ」

メイヴェは吐き捨てた。

「ほんと、口ではなんとでも言えるよね」

ディアンの目が気味悪く光り始めた。

「ダーモット様の話とメイヴェの話はどこか違う。何か引っかかるんだ。だから俺はここに引き返すよう頼んで、兵が退くまで窓の外で待ってたんだよ。さあ、俺は訊いてるんだ。ルーフィスはどこだ？」

ディアンは凄みのある目つきで睨みながら、冷然と言った。激昂していないのがかえって恐怖をおおる。メイヴェは唾を飲みこんだ。ディアンに襲われた夜が脳裏に蘇る。吸血魔は人を殺すことなんかどうとも思っていない。ここを切り抜けなかったら、侵入の咎で裁かれるまでもなく、ディアンの餌食になってしまう。

静かな声には緊張の糸が一本ぴんと張っているのが感じられた――この糸が切れたら殺される。

「……知らないわ」

「知らない？」

「はぐれちゃったのよ」

「城の中で？」

「そうよ。いつの間にかいなくなってたんだもの」

「じゃあ、あの騒ぎはなんなの？」

メイヴェはごくりと唾を飲みこんだ。

「……捕まったのかしら」

そう言ったとたん、メイヴェは跳ねたディアンの体に押し倒された――首筋が苦しい。襟元に爪が食いこんでいる。次は牙だと思い、ぞっとした。

ダーモットがディアンを背中からとり押さえた。ディアンがわめく。

「殺してやる！ 絶対殺すからな！」

「落ち着け！ はなすんだ！ おまえの友人は俺がなんとかするから！」

ダーモットがディアンの腕をつかみ、メイヴェから引きはがした。メイヴェは喉を押さえ、咳きこみながら、立ち上がる。

「おい、ダーモット様の部屋から物音がしたぞ！」

兵士たちの叫び声が聞こえ、ダーモットは舌打ちをした。

「おまえたちは侵入者だという自覚があるのか」

ディアンは背中からダーモットにはがい絞めにされたまま、メイヴェに手を伸ばそうとした。勢いよく四肢をばたつかせると、体勢を崩し二人は揃って倒れる。次の瞬間、ディアンはダーモットから逃れて立ち上がり、再びメイヴェに飛びかかった。メイヴェは急いで椅子のうしろに回りこむ。

ディアスが椅子をのり越えようとしたとき、ダーモットが立ち上がり、ディアスに体重をかけて床に押さえこんだ。ダーモットは顔だけを上げて、メイヴェに言った。

「大丈夫か」

メイヴェは呼吸を荒げながら頷き、椅子の背をつかみ直す。

「誰だ！ ここを開ける！」

部屋の外では兵士が叫び、ドアを叩いている。ダーモットは自分の下敷きになっているディアスに言った。

「ここは俺の城だ。助けてやるから心配するな。はなすから、暴れるなよ」

ダーモットがはなしたとたん、ディアスはダーモットの顔に拳を打ちこんだ。ダーモットが顔を押しさえすきに下から這いだし、立ち上がった。

「あんたには頼まないよ！ 俺が一人で助けに行ったらかまわないんだ！」

メイヴェは窓に向かって走り、窓枠に足をかけた。

「ありがとう、ダーモット。そしてさようなら。死にたくなかったら、あんたは黙ってついて来なさい、ディアス」

「どこから逃げるつもりだ、メイヴェ？」

「俺は行かないよ！」

ディアスは目を光らせて言った。

「そんなこと言ってる場合じゃないのよ。とにかく今は逃げるの。もたもたしていたら、夜が明けてしまうでしょ。捕まっていちばんまずいのはあんたなのよ、ディアス。窓の下にも兵が集まったら、逃げ道がなくなるわ。ひとまず逃げて、あとで助けに来ればいいじゃない」

「助ける気なんかなくせに、よくそんなことが言えるな！ メイヴェのことなんて、もう絶対

信用しないよ！」

「手伝うって言ってるじゃないの！ いちいちうるさいわね！ じゃああんた一人で助けに行
って、ルーフィスとの約束を破ればいいのよ！ そんなことをしたら、ルーフィスはあんたのこ
とを許さないわ、一生ね！」

「静かにしろと言っているだろう！ そいつは大丈夫だよ。父上は下手人をすぐに始末すること
はないからな。メイヴェの言うとおりで、とにかく今は逃げろ。おまえたちがいたんじゃ、俺も
かばいきれない」

ドアは今にも破られそうだ。メイヴェは急いで縄梯子を下り始めた。

「くそっ！」

ディアンは悔しそうな顔で吐き捨てると、あとに続いた。梯子に足をかけ、三段ほど下りたこ
ころで足を止め、二人を見送るダーモットを見上げた。

「一緒に来てよ」

ダーモットは驚いた。

「なぜ俺が行く必要があるんだ？」

「だってメイヴェを好きなんだろ？ 来なかったら俺、メイヴェを殺しちゃうよ」

ディアンの口ぶりは軽かった。ダーモットは言葉をなくして、得体の知れない少年を見つめた
。ディアンはするすると下りて、メイヴェに近づいて行く。ダーモットも縄梯子に足をかけ、大
騒動になっている城をあとにした。

地下牢と後悔

ルーフィスは自分の体を抱えながら暗闇の中に横たわり、ふるえていた。硬い石の床は冷たく、打撲と熱で弱った体を苛む。少しでも体を動かすと全身に激痛が走り、どこがどう痛むのか、もはやわからない。

ひどく痛めつけられた。従者の部屋で捕まったあと、城内は次々と騒動が持ち上がった。手足を縛られ、床の上に転がされながら、メイヴェ様がどうなったか心配していると、まもなく地下に引き立てられた。仲間が誰なのかを詰問される――彼女は無事逃げたのだと安堵すると同時に、石造りの地下牢の悪臭が、これから起こることを予感させた。

拷問が始まり、顔や腹を殴られ、倒れると背中を蹴られた。胸を押しつぶされ、息ができなくなって気を失うと、水桶の中に顔を突っこまれ、むりやり目覚めさせられる。それが何回くり返されたかは覚えていない。

今の自分は死にかけているような気がするが、気持ちは穏やかだった――僕は何も言わなかった。メイヴェ様のことも、ディアンのこと、何も。

メイヴェ様のことを恨んではない。父を亡くし、城を奪われ、小さな館で見張りに囲まれた生活を送っていた十六歳の姫君が、復讐心を育ててしまったのは当然のことだし、僕が望んでこうなったのだから。

「祈ったってディアン一人救えないくせに」とメイヴェ様は言った。そのとおりだと思う。生きる価値のない僕の祈りが、誰かを救えるわけがないのだから。

ここで死ぬるとすれば、心残りはディアンのことだけだ――メイヴェ様と喧嘩していないだろうか。陽の当たらない場所に逃げられただろうか。領民や奴隷狩りに見つかっていないだろうか。彼は僕よりもずっと強いし、なんでもできるけれど、彼を傷つけるものはあまりにも多すぎる。

。

そして、彼をもっとも傷つけているのは僕だ。城へ行く前の晩にも、吸血魔に変わってしまったディアンに、僕はどう変わればいいのかと訊いた――彼が答えられるはずのない残酷な質問をした。

ディアンは何も知らない。僕が彼を裏切った罪悪感から、一緒に旅をしていることを、ディアンは気づいてもいない。

僕が死んだら、ディアンはどうするだろう。血は与えられなくなり、誓約は破られる。

そのときディアンは救われるかもしれない。

ダーモットの事情

ダーモットは体にしびれを感じ、目を覚ました。夢と現のあいだのまどろみは霧散し、けだるさだけが残る。

起き上がろうとしていつもと様子が違うことに気づいた――体が動かない。拘束されている。両手はうしろに回され、胴体ごと椅子に縛りつけられ、両足も椅子の脚にくくりつけられている。

どうしたことだ、これは、と思ったが、声が出ない。ごていねいに口にも猿轡を噛まされていた。にわかには怒りがこみ上げてくる。

ダーモットはけだるさを払いのけようと、唯一動かせる頭を軽く左右に振ったが、かえってめまいをひき起こしただけだった。幸い目隠しはされていなかったのだから、とにかく何が起きているのかくらいは確かめようと、まばたきしてあたりを見回した。

自分のいるところはすぐにわかった。メイヴェに与えた町はずれの館だ。室内は暗く、左手の暖炉の炎だけがささやかな灯りだった。人の気配はなく、寝室も静かで、外へ通じるドアと板窓には錠が下ろされている。

テーブルを挟んで向こうの椅子には、メイヴェが頭を垂れて座っていた。彼女も同様に椅子に縛られているようだ。まだ目覚めてはいないらしい。

耳をすますと、静かに葉を打つ水音が聞こえてきた――外は雨か。この程度の小雨なら、この館でも心配するほどの雨漏りにはならないだろう。

ディアンはどこに行ったのだろう。ダーモットはあらためて部屋を見回したが、少年の姿はなかった。

黒髪に薄紫色の目を持つ、整った顔立ちの見かけない子供――おそらく領民ではないだろう。見たところ十歳くらいのようなのだが、異様なほどの腕力と度胸がある。

窓から寝室に入ってきたとき、一目見てこの少年は何か違うと直感した。少年の誘いにのったのは、メイヴェが寂しがっているという話を聞いたからだけではなく、食事運びの下男からこの少年の報告を受けていなかったのだから、不審に思ったからだ。

その後、ディアンがメイヴェを殺すと脅したときの軽すぎる口調に胸騒ぎを覚え、同行することにした。鍾乳洞だの山越えなどを経て（実際、この秘密のルートには驚いた）、夜明け前にこの館に着いた。まず自分がドアを開けて、中に入る。続いてメイヴェ、ディアン――ディアンはすぐにドアを閉めた。無事に逃げられたことに安堵してうしろを振り向き、それから――それからどうしただろう。そのあとは記憶がはっきりしない。

この状況はディアンの仕業としか思えないが、ダーモットは納得できなかった。戦士として名を馳せる自分が、わずか十歳ほどの子供に後れをとるなんてことがあるだろうか。

テーブルの向こうでメイヴェの頭が揺れた。目を覚ましたようだ――ダーモットはメイヴェが無事だったことに改めてほっとし、彼女を守れなかった自分を恥じた。

メイヴェは顔を上げると同時に、縄をほどこうと激しく体を揺すり始めた。猿轡から呻き声をもらしながら、椅子を前後に揺らして移動しようとする。よほど怒っているのか、ディアンが殺

すと言ったことを真に受けて逃げ出そうとしているのかわからないが、ダーモットは半ばあきれ、半ば大した娘だと感心した。

突然寝室のドアが開いた。

「何してんだよ？」

ディアンは怒った声で言った。うなっているメイヴェに近づくと、面倒臭そうに彼女の猿轡をはずす。

はずされるとすぐに、メイヴェは怒鳴った。

「あんた、わたしの寝室で寝たわね！」

「寝たよ。寝たらどうだって言うんだ？」

「そんなこと許した覚えはないわよ！ 早くこの縄をほどきなさい！ このままじゃすまさないから！」

「あんまり騒ぐと殺すよ」

ディアンの憎悪のこもった声に、メイヴェは嘔みつくのをやめた。すぐに猫なで声にすり替える。

「ねえ、ルーフィスを助けたいんでしょ？ 協力するわよ。縄をほどいてくれたらね」

ディアンはメイヴェに氷のような視線を向けてから、ダーモットの猿轡をはずした。

「あんた、こんな女のどこがいいんだ？」

「メイヴェに二度とそういう口のきき方をするな」

ディアンは冷ややかさに軽侮を加えて一瞥し、暖炉から火をとってろうそくを灯した。

大きめの服に身を包んだかわいらしい姿が浮かび上がる。少年は暖炉の前に立ち、椅子に括りつけられた二人に対峙した。

「どう協力してくれるのか、先に聞かせてもらう」

「しつこいわね。手伝うって言ってるでしょ」

「それじゃどうするんだ？ 本当にルーフィスを取り返す策はあるわけ？」

「あるわ」

メイヴェは自信たっぷりに答えた。

「ダーモットがいるじゃない。連れてきてもらえばいいのよ」

ダーモットはため息をついた。他ならぬメイヴェの頼みとあれば、ひと肌脱いでいいところを見せておきたいが、この状況で安請け合いはできない。

「そりゃ無理だな」

「どうしてよ？ あなた、助けてやるって言ったじゃないの」

「あのときならな。おそらく今、その男は地下牢の中だ――処刑の日までな。身元を確認せず処刑して、あとで面倒なことになったら困るから、その場で殺さなかったというだけだよ。父上は慎重な性格だが、城に忍びこんだ侵入者を大目に見てやるほど甘くはない。連れ出すことは不可能だ」

ディアンは処刑という言葉に顔を曇らせたが、メイヴェはかまわず続けた。

「じゃあ、あなたの父親を説得してよ。あのベラント人は友人だとでも言ってちょうだい」

「ベラント人なのか」

「ええ」

「それなら少し時間が稼げるかもしれないな。今、父上はベラント人といさかいを起こしたくないだろうから、きちんと身元を調べて、処遇を決めることになると思う。それはそうと、友人が夜中に忍びこんできたって説明するのか？ おまえ、俺の父上を知っているだろう？ 生半可な答えで納得させられる相手じゃない。いやこの場合、父上でなくても納得しないだろう」

「まあねえ……」

「ダーモットを人質にしてルーフィスと交換しよう」

ディアンが冷たく言い放った。

ダーモットはディアンに視線を向けた。

「初めからそのつもりで俺を連れてきたんだらう？」

「そうだよ。自分の城に忍びこんだ侵入者を逃がしてやるなんて話、信じるわけないだろ。本当は俺一人で助けに行ってもかまわないんだけど、あんたを人質にしたほうが、あんたにとっても都合がいいはずだしね。俺が暴れるよりはさ」

「どういう意味だ？」

メイヴェはあわてた様子で遮った。

「そうね、ダーモットを人質にするのはいい考えだわ。息子を返してほしかったら、ルーフィスを返せ。これならあなたの父親でも要求をのむわ」

「そのルーフィスとやらがメイヴェの名前をもらしていたらどうするんだ？ 泥棒未遂に誘拐、脅迫じゃ、ばれたときおまえの命もないぞ」

「ルーフィスは言わないよ」

ディアンは力なく言った。

「バカだから、口を割らない。だから俺たちが助けに行かなくちゃいけないんだ」

「ほら、そんなに情けない声を出さないの。わたしがなんとかしてあげるから」

メイヴェは明るく請け合った。

「ダーモット、人質になってくれるわね？」

無謀な試みであっても、断ることなどできなかった。無鉄砲なメイヴェと、友人の安否に心を痛めているきれいで不気味な少年。めまいが強くなる。

「よかったわね、ディアン。これでルーフィスは助かるわ。さあ、縄をほどきなさい」

メイヴェはもう助け出したかのように言ったあと、当然と言わんばかりに命じた。ディアンが相好を崩すわけがない。

「ルーフィスを助け出すまで、このままにしておきたいくらいだね」

ディアンは文句を言いながら、二人の縄をほどいた。ダーモットは自由になったらディアンを叱ってやろうと思っていたのだが、思うように体が動かない——熱でもあるんだらうか。一方メイヴェは元気そうに首や肩を回したり、手足を伸ばしたりしていた。

ディアンはテーブルに背を向け、暖炉の前に座りこんでしまった。床の上で膝を抱え、炎の揺らぎを一心に見つめている。静まり返っている姿はやや気味が悪く、このままひっそりと消えて

しまうのを望んでいるかのように見えた。

ダーモットは軽く咳払いをした。体調がすぐれないせいもあって、ディアンに同調した声で優しく話しかける。

「なあ、ディアン、おまえの友だちは大丈夫だよ。まあ、見てろって。俺たちがなんとかするから、早まった真似はするなよ」

「何それ？ どういう意味？」

「おまえは子供なんだ。たしかに並よりしっかりしているようだが、やっぱり子供なんだ。いいか、俺が言いたいのは焦るなってことなんだよ。おまえが大人になるまでは俺たちに任せてもいいだろう？ それは恥じゃないんだ」

「俺が大人になるまで？」

ディアンはぼつりとくり返すと、突然怒りを全身にたぎらせた。目に炎を燃やして立ち上がり、テーブルに小さな拳を叩きつける。

「俺はあんたみたいな奴が大嫌いだ！ 大人っていうだけで、わけ知り顔をしていばりたがる奴がな！ 俺に説教したことを後悔させてやる！ 今すぐ殺したっていいんだぞ！」

「少しは大人になれ、バカ。おまえみたいなガキが大人になるには、自分がガキだと自覚するのが第一歩だ。俺が憎かったら、あと十年たってから殺しに来な。そのときなら相手になって……」

言い終える前に、ディアンの拳がダーモットの腹をめがけて突き出された。皮一枚のところどかわしたが、軽いめまいを覚え、体勢を崩す。

ディアンはダーモットの間を見つけて、テーブルの上に飛びのった。

メイヴェェが叫ぶ。

「何やってんのよ、ディアン！」

ディアンは上からダーモットに飛びかかろうとする。メイヴェェがうしろからディアンの腕をつかんで引き、ふいをつかれたディアンは大きな音を立てて、テーブルの上に仰向けに倒された。

ダーモットはため息まじりにディアンを見下ろした。ぎらぎらした目がこちらを睨みつけている。

「どこか打ってないか？ 本当にどうしようもないガキだな、おまえは」

ダーモットの一言に、ディアンは過剰に反応した。怒りで体を痙攣させ、唇を噛みしめた。細い体の奥から絞り出したような声を上げる。

「……黙れよ」

ダーモットはディアンの様子に戸惑った。暴れたかと思えば落ちこみ、今は怒っているのか泣いているのかわからないような顔をしている。あまりにも感情の起伏が激しい。友人を心配している少年に対して、もう少し優しく接するべきだったかもしれない――。

「悪かった」

ダーモットが詫びると、ディアンは横向きになって背を丸め、目を伏せた。

メイヴェェがディアンの様子を見て嘆息し、艶のある黒髪を優しく撫でた。

「テーブルから下りてちょうだい、ディアン」

それからダーモットに向かって言った。

「ディアンはちょっと特殊なのよ、ほっといてやって」

特殊といえばたしかに特殊だろう。ただし、その一言でこの少年を片づけられるかどうかは疑問だ。

ディアンはのろのろと起き上がると、テーブルを下り、再び暖炉の前に腰を下ろしてしまった。ダーモットとメイヴェも椅子に座る。

ダーモットは尋ねた。

「で、この子とおまえはどこで知り合ったんだ？」

「道ばたよ。シラカバ並木の近く」

「シラカバ並木？ おまえ、なんでそんなところに行ったんだ？」

「お城で暮らしていたときは、散歩に出ることなんかできなかったからよ。悪い？」

「――いや、いいけどな。そう言えば護衛のロートはどうした？」

「護衛？ 見張り、いいえ、盗っ人でしょう？ あの男なら侍女と一緒に、髪飾りを持って逃げたわよ」

「なんだって？ 本当か？」

「本当よ。だからわたしが城へ出かけられたんだもの」

「――なんてこった」

ダーモットはがっくりと肩を落とした。あの男は本当に護衛のつもりでつけたのだ。メイヴェは十六歳の娘だし、没落したとはいえ小王の姫君である。城で保護したいところを本人の猛抵抗にあい、気持ちが落ち着くまで待とうと、こんな町はずれに住まわせているのだから、護衛をつけるのが当たり前だ。

それなのに肝心の護衛が逃げ出すとはなんてざまだ、と憤りかけたところではたと気づいた。メイヴェのわがママが手に負えなくなって、護衛たちは逃げ出したのかもしれない。ありうることだ。

「それでおまえは、このディアンに泥棒に行こうと誘われたのか」

「違うわ、わたしが誘ったの。貧乏人同士で気が合ったから」

メイヴェの答えはそっけなく、厭味だった。彼女の怒りはまだおさまっていないようだ。ダーモットはメイヴェをこれ以上怒らせたくなかったので、追求するのを控えた。

メイヴェは差し入れの籠からパンとチーズを出して、それぞれ半分に割ると、ダーモットと自分の前に置いた。

「あーあ、お腹がすいたわ。ずっと何も食べていなかったんだもの。食べ終わったらまた何か考えてあげるから、待ってなさい、ディアン」

メイヴェはパンを割って食べ始めた。ダーモットは食欲がなく、分けられたチーズをディアンに差し出した。しかしディアンはちらりと見ただけで、受け取ろうとはしない。

「食わないのか」

ディアンのかわりにメイヴェが答えた。

「いらないの。そうよね？」

ディアンは背を向けたまま、小さく頷いた。

「おまえ、いくら大人になりたがっても、食わないんじゃ大きくなれないぞ」

そう言ってダーモットは、ディアンの腕をつかんで立たせようと、腰を浮かせた。しかし強いめまいを覚えて体勢を崩し、テーブルに手をつく。

「ダーモット、どうしたの？」

ダーモットは俯いたまま頭を振って、片手を上げた。目の前が回っている。

「……大丈夫だ。心配ない」

軽い立ちくらみだが、メイヴェは立ち上がって寄ってきて、肩に手を置いた。彼女の細い手の温もりが伝わってくる——こんなふうに親しげなメイヴェは久しぶりだった。

「ずいぶん具合が悪いみたいよ」

「ああ。でも、大したことはないよ。目が覚めてから何だか調子が悪くてね。食欲もないんだ」

ダーモットは元気な声を出して、不調を隠そうとした。

メイヴェはダーモットをじっと見つめていたが、やがて顔色を変えた。

「ディアンね？」

そう言うなり、暖炉を見つめ続けているディアンにつかつかと向かうと、いきなり拳で頭を殴った。

ダーモットはめまいも忘れて、目をみはる。

「ダーモットに何したの？ きちんと言ってみなさい！ あんたって本当に人でなしなのね！」

ディアンは怒りもせず、逃げもしなかった。身を守る術を知らない子供のように、ただそこに座っている。それから小さく呟いた。

「……メイヴェが言ったんじゃないか。ダーモットみたいな恥知らずの卑怯者、好きにしてもいいって」

「そんなこと言ってないわよ！ わたしはダーモットを連れ出してって言っただけよ！ 今度ダーモットに何かしたら、ただじゃおかないからね！」

恥知らずの卑怯者——俺はそんなふうに言われていたのかと、ダーモットはかなりのショックを受けたが、今はそれよりも二人のことが気になった。ディアンはいっそう落ちこんだ様子で俯いてしまったし、メイヴェの剣幕も不可解だ。しかし二人に説明を求められる雰囲気ではなかった。

ディアンは突然立ち上がり、ドアに向かって走り出すと、錠を上げ雨の中へ飛び出して行ってしまった。

メイヴェはあとを追わなかった。「ごめんなさい」とダーモットに詫びて、ドアを閉め、自分の席に戻る。

葬式のように陰鬱な食事が始まった。メイヴェは水分をとったほうがいいと沈んだ声で言って、しきりに水やぶどう酒を勧めてくれた。ダーモットは逆らわず、水でパンとチーズを流しこみながら、食事がすむまで待つことにした。

さらさらと鳴る冷たい雨音だけが響く中、メイヴェは落ち着かない様子で、しきりに閉じられたドアに視線を送っている。

食べるものと会話の少ない食事はあっという間に終わった。ダーモットがメイヴェエにさっきの話を問いただそうと口を開きかけたとき、メイヴェエは決意の表情を浮かべて、いきなり立ち上がった。

「ちょっと出てくるわ」

「俺も行くよ」

ダーモットも腰を浮かせた。

「だめよ、来ないで」

メイヴェエは凜とした声で言った。

「あの子はわたしが見つねなくちゃいけないの」

そう言ってメイヴェエも雨の中に飛び出して行った。雨音に混じって、ディアンを呼ぶ声が聞こえてくる。ダーモットは心配しながらも、苦笑した。この上なく自己中心的なくせに、妙なところで真心を感じさせるのは昔から変わらない。

ダーモットが七歳のとき、五歳のメイヴェエに初めて会った。さわやかに晴れた六月のある日、ダーモットは父に連れられて、エニスレーン城を訪れた。

我が父ドムナルは野心家で、西部の頂点に立つことを望む老獪な面を持っているが、メイヴェエの父アインガスは対照的に、年をとっても少年のような目をした人物だった。気位が高く、自由と土地を愛するいわゆるエリルアド気質の持ち主で、ベラント人とは決して手を組もうとはしなかった。

彼はメイヴェエをことのほかかわいがっていた。甘やかされたメイヴェエは生来父から受け継いだエリルアド気質をさらに増長させ、この自己中心的な性格に発展させていったのだと思う。

その日、大人たちは城でたった一人の姫君を捜し回っていた。どうやら姫は乳母の目を盗み、どこかへ遊びに行ってしまったらしい。

待ちくたびれたダーモットは、いっせいに白い花をつけている大きなヒイラギに誘われて、庭へ出た。

充分に枝を張り、天を目ざして伸びる見事なヒイラギが何本も並び、緑のじゅうたんのような草の上にも、白い花を落としていた。

花を踏みながら歩いていると、うろのある灰褐色の幹の陰から、女神のような赤い髪をした少女がちょこんと顔を出した。

この子がメイヴェエ姫だとすぐにわかった。大きく生命力にあふれた草色の瞳には、すでに女王の輝きが備わっていたからだ。この子が将来自分のお嫁さんになる子なのかと思う前に、ダーモットは一目惚れしてしまった。

それから何度か会ううちに、一風変わった人柄もわかってきた。メイヴェエは人形のように退屈な娘ではなかった。伝説に残るエリルアド女王のように、メイヴェエは大胆に行動する。彼女と結婚したら、退屈することはないだろう。ダーモットはこのはねっ返りな性格にいつそう惚れこんだのだ——いちおう変わった女の趣味だという自覚は持っている。

雨は降り続いていた。迎えに行きたい気持ちを抑えて、ダーモットは思った——自分が手を貸さなくても、メイヴェエはきっとディアンを連れ戻すだろう。

「出てきなさい、ディアン！ 帰るわよ！」

雨足が強くなってきた。メイヴェは力いっぱい叫びながら、光る薄紫色の瞳を探したが、ディアンの返事はなかった。

空を仰いでも、月は雨雲に隠れて見えない。闇夜の中、無数の雨粒がメイヴェを打った。長い髪や服は濡れて体に張りつき、体温を奪っていく。人探しには最悪の天候だ。

ディアンはどこに行ったのだろうか——周囲を見回しても、目印の光る目はない。聞こえていて出てこないだけならいいが、町に行ってしまったのなら大変だ。あの荒れている様子ではまた領民に牙を向けるかもしれないし、ルーフィスを助けようとして単身城にのり込むことも考えられる。

メイヴェは焦って、森に向かう一本道に駆け出したが、濡れた草にすべり、転倒した。顔も服も泥だらけになり、泣きたくなった。

「出てきなさいって言うているでしょ、ディアン！ わたしが風邪でも引いたら、あんたにパンがゆくらいは作ってもらうからね！」

水たまりを叩きながらわめいていると、何かが飛んできて、メイヴェの頭に当たった。

「痛い！」

頭を押さえながら地面を探ると、小石が落ちていた。

「何これ……」

呟くと同時に次々と小石が飛んでくる。メイヴェは頭をかばって、地面に伏せた。怪我をするほどの大きさではなくても、顔を上げることはできない。ディアンが館を出て行っていないことがわかり安堵もあったが、それよりこの仕打ちへの怒りのほうが大きかった。

「やめなさい、ディアン！」

伏せた姿勢のまま怒鳴ってみたが、背中に降り注ぐ小石はやまない。いったいどこから投げているのかわからないので、居場所を突き止めることができず、反撃もできない。メイヴェが激怒しながら、ひたすら石つぶてを我慢していると、背中に何かが刺さった。

「痛っ！」

思わず起き上がって見てみると、とげのついたハリエニシダの枝だった。メイヴェの怒りが爆発する。小石をかき集めてつかみ、柵の向こうに生えているハリエニシダの茂みに向かって突進していく。

茂みが揺れた。

「そこね！」

メイヴェはつかんでいた小石を投げつける。小石は細かい枝を張るハリエニシダにぶつかり、ディアンには当たらなかったが、メイヴェはようやく光る目を見つけた。

ディアンが柵沿いのハリエニシダの向こうから出てきて立ち上がった。殺気立った目つきでメイヴェを睨みつけている。

メイヴェは怯まず、怒りに任せて怒鳴った。

「せっかく迎えに来てやったのに、よくもやってくれたわね！ さあ、帰るわよ！」

「俺は帰らないよ！ 誰が迎えに来いなんて頼んだ？」

「口ごたえするんじゃないわよ！ いいから来なさい！」

「やだよ、メイヴェなんかが迎えに来て感謝してないからね！ 俺、メイヴェ嫌いだもん！」

「嫌い？ あら、それは貴重な経験だわ！ わたし、人に嫌われたことってないから！」

メイヴェが言うと、ディアンは啞然とした表情でメイヴェを見た。すぐに口元に冷笑を浮かべる。

「それ、本気で言ってんの？」

「そうよ。わたしのことを嫌っている人間といえば、ダーモットの乳兄弟のフィンガルくらいのものね。まあ、彼の場合、あっちの性格に問題があるせいだけど」

ディアンは濡れそぼった体を揺らして、くすくすと笑い始めた。

メイヴェは訝しむ。

「なによ、何がおかしいの？」

「だってさ、本気で嫌われてないと思ってるわけ？」

「もちろん」

ディアンがわざとらしく嘆息した。

「メイヴェっておめでたいね」

「どういう意味よ、それ？ あんたこそおかしいんじゃないの。わたしは城でまちがいなく好かれていたわよ。たくさんの家臣がかしずいてくれて、大切にされていたんだから」

「それがおめでたいって言ってんの。かしずかれていたのは今までお姫さまだったから、気を遣われていただけで、べつに好かれていたわけじゃない。お姫さまじゃなくなったメイヴェなんてなんの価値もないよ」

「……なんですって？」

「本当のことだろ」

「適当なこと言わないでよ！ あんたなんて城のこと知らないくせに……」

「じゃあ訊くけどさ、その家臣たちはどうして助けに来ないんだよ？」

胸をがつんと殴られたような気がした。雨のせいではなく、体が芯から冷えていくのがわかる——どうして誰も助けに来てくれないのか。それは館に閉じこめられてから二か月間、頭の中から追い払い続けてきたことだった。

「……今頃、準備しているのよ」

「そう思ってりゃいいよ。でも、永久に助けなんて来ない。賭けたっていいね。メイヴェが一人で小王だっていばっても、誰もそんなこと認めてないんだから。結局口ばかりで、エニスレーンをのっとりたんだもんね」

メイヴェは体をこわばらせた。酒場での男たちの会話が脳裏に浮かぶ——『十六歳の娘が小王になったら、エニスレーンは終わりだよ』『トゥルベク家に乾杯！』

「なによ……だって……」

「メイヴェはベラント人の悪口を言ってるけど、俺に言わせりゃベラント人以下だ」

ディアンは憎悪をこめて低く言ったあと、闇を引き裂くような声で叫んだ。

「ルーフィスを返せよ！ 返せ！ 返せっ！」

ディアンはハリエニシダを飛び越え、メイヴェエに飛びかかってきた。

メイヴェエは泥の中に倒され、息を呑む。ディアンがのしかかり、首に牙を突き立てた。鋭い痛みが走る。メイヴェエはもがいたが、ディアンの言葉が体を麻痺させ、力が入らなかった。血はどんどん吸われ、地面がぐらぐらと揺れ始める――今度こそ殺される――そう確信した。

その瞬間、突然首からディアンが離れた。メイヴェエがぼんやりとディアンを見ると、ディアンは泣き出しそうに顔をゆがめながら、拳を握り締め、メイヴェエの上で振り上げている。ディアンの拳は逡巡するように宙でふるえていたが、しばらくすると静かに下ろされた。

――どうしてこの子はわたしを殺さないのだろう。

ディアンはメイヴェエの体から下りて、一言だけ言った。

「俺は帰らないから」

メイヴェエは立ち去ろうとするディアンの腕をとっさにつかんだ。行かせてはだめだ、と思った。メイヴェエの勘がはなしてはいけないと告げている。

「行かせないわよ！」

「ほっといてくれ！ 俺はもう勝手にする！」

ディアンはメイヴェエの腕を振りほどく。メイヴェエは足にしがみついた。

「行かせないって言ってるでしょ！」

「はなせ！」

ディアンは足を振り、メイヴェエは必死につかむ。泥が口の中に入る。それでも手ははなさなかった。

この子はおそらくわたしと同類だと直感した。このままルーフィスが助からなければ、ディアンに血を与え続けるという誓約が破られてしまう。今のディアンはルーフィスがいなくなり、孤独の中に一人放り込まれ、怯えている――だからわたしの孤独を言い当てることができた。

そんな孤独の中にディアンを陥れたのはわたしだ。わたしがディアンからルーフィスを奪った――ドムナルがわたしからすべてを奪ったように。

誓約が破られたら、たぶんこの子は死ぬ――死なせたくない。

「はなせってば！」

ディアンがメイヴェエを蹴り、メイヴェエは泥の中に転がった。ディアンが叫ぶ。

「もう俺はメイヴェエとは関係ない！ ほっといてくれ！」

「あんたになくても、こっちはあるの！」

「何が！」

「ルーフィスが帰ってくるまで、わたしがあんたに血をあげるんだから！」

ディアンは一瞬目をみはってから、唇を歪めた。

「見張り役を買って出るってわけ？ 突然信心深くなるなんて空々しいよ！」

「神様のためじゃないわよ！ わたしだって反省してるんだから！ あんたのことも心配してるんだからね！」

「あ、そう！ でも見張り役はいらないし、メイヴェエの血なんて飲みたくないから！」

「今飲んだばかりのくせに、何言ってるの！ それにあんたが断っても、わたしは勝手にあんたにくつつくわよ！ だって無事なあんたをルーフィスに返してあげなきゃいけないんだから！」

ディアンは口を開けたまま、メイヴェエを見据えた。メイヴェエはディアンの視線をしっかりと受け止めて続ける。

「あんたが無事なら、ルーフィスは何より喜ぶわ。せめてあんたを守るくらいしなきゃ、だめなもの、わたし。絶対助けようって言ってるのよ……これでも」

ディアンは何も言わずにメイヴェエを見下ろしていた。表情がゆっくりと変わっていく――頬が緩み、むき出された牙が隠され、雨に流されるように目の中の怒りが消えていった。夜の秋雨は冷たいが、メイヴェエを汚した泥も少しずつ洗い流していく。

「帰りましょう、一緒に」

メイヴェエが静かに言うと、ディアンは踵を返し、柵とハリエニシダを飛び越え、先に館に向かって歩き始めた。メイヴェエは今度こそ本当に安堵して、柵を回り、ディアンのあとを追った。

ドアが開いて、二人は並んで姿を現した。メイヴェは泥と雨にまみれ、真っ青な顔で歯を鳴らしていたが、同じように濡れているディアンはすました顔である。その差にダーモットは不審を覚えつつも、とにかく二人に暖炉の前で温まるよう勧めた。ディアンは暖炉の前に立ち、両手を広げて服を乾かし始めたが、メイヴェは着替えをするからと言って、寝室に下がった。

寝室のドアが閉められるとすぐ、ダーモットはディアンのとなりに椅子を寄せ、耳を引っ張った。

「今後絶対にメイヴェをわずらわせるなよ。いいな？」

「メイヴェが勝手に追いかけてきたんだよ」

「今度そんな口をきいてみる。殴ってわからせるからな」

ダーモットはもう一度ディアンの耳を引っ張った。ディアンはむくれて横を向くと、濡れた床の上に座りこんだ。

しばらくすると、着替えたメイヴェが居室に戻った。無言のまま並んで暖炉の前に座ったが、二人は何か通じ合った仲に見える。さすがメイヴェだと、ダーモットは内心感嘆した。

二人が体を温め終わった頃、雨はやみ、ぶどう酒がふるまわれ、小さな館はくつろいだ雰囲気にも包まれていた。無理に食べ物を喉に通したら、ダーモットの体調はいくらかよくなり、会話を楽しめていた。

メイヴェはすでにいつもの元気を取り戻し、テーブルに着いて、どんどんぶどう酒を呷っていた。彼女は昔から、精神的にも肉体的にも、驚くほど回復が早い。

ディアンは相変わらず床の上に座っていたが、メイヴェが楽しげな様子を見て、表情をやわらげていた。友人を城に置き去りにしていることでずっときりきりしていたが、いくらか余裕が出てきたようだ。この少年のメイヴェを見つめる目は思ったより優しく、ダーモットは安堵した。

「あなたの父親を脅迫する方法を考えなくちゃいけないわね」

メイヴェが椅子の背に寄りかかりながら言い、ダーモットはひそかに嘆息した。自分の父親を脅迫する方法を考えるのは気がすすまないが、ベラント人を取り返してやると約束したからにはつきあうしかない。

「まずはあなたが捕まっていることを知らせなくちゃ。知らせるには、誰かが使いに行くしかないわよね」

メイヴェは勢いよく杯を空にし、ダーモットは少しだけ酒をすすった。色男としてのダーモットの欠点の一つに、ちびりちびりとしか酒を飲めないことがある。

「わたしはだめね。ふらふらと城へ行ったら、ここを調べられてしまうもの。人質のダーモットは論外。あとはディアンね」

メイヴェは床の上のディアンを見下ろした。

「あんたもだめだわ。危険すぎる」

ディアンは顔を上げた。

「俺は平気だよ」

「バカね、だめよ。伝令が捕まったら、この計画はおじゃんなのよ」

「捕まらなきゃいいんだろ。それに、その……好き勝手なこともしない。こっそり知らせて帰ってくるよ」

「本当？ 約束する？」

「するよ」

「じゃあ手紙を書くわ。置いてきて」

ダーモットには話が今一つ見えなかったが、酒の勢いでそんなことはどうでもよくなってきていた。

メイヴェは寝室に行き、組紐文様を施した平たい箱を持って戻ってきた。中から羊皮紙とペン、インクを取り出し、「筆跡でばれないようにするためだ」と言って、左手にペンを持つ。

「『ダーモットを預かっている。そちらに滞在中のベラント人との交換を希望する』——これでどう？」

メイヴェはなんとか判別できるといった文字を書いた。どういうわけかメイヴェの声ははずんでるように聞こえる。

「いいんじゃないか。交換場所はどうする？」

「そうねえ。ドラマチックに盛り上がる場所がいいんじゃない？」

「ドラマチック？」

ディアンが首を傾げた。

「そう、ドラマチックよ。こっちは人数が少ないんだから、城の兵たちが圧倒されてしまうような場所がいいと思うの。屋根の上とか崖の突端とか」

「それ、単にメイヴェの趣味じゃないの？」

「……俺は城の者を必要以上に危険な目に遭わせたくないんだが……」

「じゃあ、処刑場」

「処刑場？」

ダーモットの顔からさっと血の気が引いた。剣の腕に自信はあるが、死者を相手に戦いたくはなかった。色男であるダーモットのもう一つの欠点として、怪談は苦手というのがある。

ディアンは子供のくせに怖がりもせず、あきれたように肩をすくめた。

「そこで人質交換するってわけ？」

「いい考えでしょ。はったりをきかせられるもの」

ダーモットがおずおずと訊いた。

「ちなみに——昼か？ それとも夜？」

「夜に決まっているじゃない」

「こっちには子供がいるのに？」

「ああら、ディアンは真っ暗闇だって怖くないわよね？」

ディアンは顔色一つ変えずに頷き、立ち上がって羊皮紙の上を指さした。

「早く書いてよ」

「わかってるわよ。『明晩終課時、処刑場に来られたし』——これでいいわね」

メイヴェは書き終わると、インクが早く乾くように羊皮紙に息を吹きかけ、ダーモットの杯にぶどう酒を注ぎ足した。

「あとは人質の交換ね。ちょっと驚かして向こうが怯んだすきに、ルーフィスを奪い返せば終わりよ。そうしたらダーモットは自分で歩いて帰ればいいわ。乾杯！」

メイヴェは自分の杯を掲げ、一気に飲み干す。

ダーモットは深々と嘆息した。

「これで終わりってわけにはいかないぞ、メイヴェ」

「どうしてよ」

「人質交換っていうのはな、交換するときがいちばん危険なんだ。たいていの場合、失敗して幕引きとなる」

「何よ、難癖をつける気？ いまさら人質になりたくないって言うの？」

メイヴェは機嫌を損ねたが、ここで躊躇するわけにはいかない。ダーモットは続けた。

「手紙を届けるところまではいいさ。そのあと父上はどう出てくると思う？」

「どうって……」

メイヴェは言葉を詰まらせる。

「父上がなんの準備もせずにやってきて、あっさり人質交換をしてさようなら、なんてことはありえない。十分な兵を用意するだろうし、取引場所が処刑場だとわかっていれば、罠をしかけることも考えられる。一方、こちらは人員も物資も不足している。のこのこと出て行ったら、確実に捕まるな」

「じゃあどうすればいいんだよ」

ディアンが顔を曇らせながら訊く。ダーモットは唸った。こちらは丸腰で女子供しかいないとなると、あまりにも分が悪い。しばらく考えて口を開いた。

「……処刑場っていうのは案外使えるかもしれないな」

「ほら、やっぱりはったりは必要ってことでしょ！」

「はったり以上ってことだよ」

ダーモットは顎に手を当て、考えながら言った。

「多勢に無勢なんだから、できるだけ地の利を利用するしかない。いいか、あそこは川に挟まれた中州になっているだろう？ しかも処刑場には木立がなくて、ちょっとした広さの草むらって感じだ。地形が単純だから、相手の出方を読みやすい」

「どういうことよ」

「障害物がないってことは隠れる場所がないってことだ。あそこで伏兵をひそませようとしたら川向こうの林の中しかないから、出方は限られる。ひそんでいた兵にいきなり剣を突きつけられるってことはないから、こっちとしては大いに助かる」

「それのどこが使えるって言うの？ 向こうも同じ条件でしょ」

「いやそうじゃない。見張りに人員を割かなくてもいいからだ。こっちは三人しか一人質の俺を除いたら、二人しかいないんだ。しかもメイヴェは堂々と姿を現すわけにはいかないし、表に出られるのは実質ディアン一人ってことになる。見張りを立てずにすむというのはありがたい」

ディアンが訊ねた。

「ねえ、逆じゃないの？ こっちは二人しかいないんだから、隠れる場所のあるところで人質交換したら？ 先に行って隠れていて、こっちが不意打ちを食らわせる作戦はどう？」

「だめだ、隠れる場所があっても隠れようがないからな。場所を指定しておけば、父上は事前に周囲を徹底的に調べさせるだろう。何よりこっちが罠をしかけるより前に、父上が罠をしかける可能性が高い。それだけは避けたい」

「多勢に無勢だの罠だの言われても困るわ！ じゃあどうすればいいのよ！」

「そうだな」

ダーモットは策を練りつつ独り言を呟いた。

「あそこは戦場ってわけじゃないからな……連れてきても十人少々ってところだろう。騎馬兵はほとんど来ない……馬の機動力を発揮するには、処刑場は狭すぎる。主力は歩兵と……障害物がないから、特に有効なのは弓兵か。うん、父上は弓兵の比重を多くすると思う」

「ふうん。それで？」

すべて任せたとばかりにメイヴェェが促した。

「弓兵に矢を射かけられないようにすることと、こっちより大人数で来る兵力をそぐのが肝心だ」

「どうするの？」

「まず俺を絞首台の柱に縛りつけておけ。そうすりゃ弓は射られない。処刑場は吹きさらしで風の強い場所だ。万一矢が俺に当たったらと思えば、手も足も出ないだろう。次に兵力をそぐために、あの橋を利用しよう……処刑場へ行くには、橋を渡るだろう？」

「ええ」

「兵たちに橋を渡らせないようにするんだ。そこで、ディアンの出番だ」

「俺？」

「おまえは偶然俺を見つけて助けようとしている子供ってことにしよう。俺の縄をほどいているふりをしろ。暗ければどこの子かなんてわからないだろうし、おまえが俺を部屋から連れ出したときのやり方ならいけるだろう」

ディアンは頷いた。

「浮民風のしゃべり方だね」

「そうだ。俺の姿を見せておいて、ディアンが言う——『大きな男たちがこの人を置いて、市門のほうへ行っちゃったよ』——俺も同じように言う——『あいつらは突然行ってしまった。この子はあいつらの仲間じゃない。あいつらが戻ってくる前に助けてくれ』ってな。そうしたらたぶん——フィンガルが駆け寄ってくるはずだ。そこで言う。『その橋にあいつらは細工をしていた。一人くらいなら通れるが、大勢で渡ったら橋が落ちる。渡るのはフィンガル一人にしる』」

メイヴェェが口を挟んだ。

「フィンガル？ いちばんずる賢いのを渡らせてどうするのよ」

「たぶん指揮官はフィンガルだよ。だからあいつをこっちに来させて、兵を烏合の衆にするんだ。処刑場にいるのは俺と子供だけ、さらに罠の場所を教えられ、縛られている俺の姿を見れば、

きつと渡ってくる。それにあいつはエリルアド人だ。俺が呼んでいるのに部下に渡らせたなら、戦士としての名誉に瑕がつく。フィンガルがこっちに来たら、もう一度ディアンの出番だ」

ディアンは頷く。

「おまえは渡ってきたフィンガルに剣を向けて、捕らえるんだ。できるな？」

「うん」

「そうしたらあいつを人質にして、おまえはいったん退け。俺はベラント人とフィンガルを交換するよう兵を説得する。説得に失敗したら、町に火をつけると脅されていると言えば、なんとかなるだろう。これでいいな？」

「いいけどさ、それじゃダーモットは裏切り者ってことになるよ。それでいいわけ？」

「俺のことは心配しなくていい。俺よりおまえたちのほうがまずい状況なんだ。なんとか生きて、この町から出ることを考えろ。それにはもう一人人質が必要なんだよ。俺とベラント人を交換してしまったら、おまえたちの身の安全を保証してくれるものはなくなる。だからもう一つ手駒を増やすためにフィンガルを人質にし、指揮官を失わせ、迅速に追っ手をかけられなくするんだ」

メイヴェェが割りこんだ。

「ちょっと待ってよ！ それじゃわたしは何をすればいいの？」

「おまえはその脅迫状に『小細工無用。終鐘前に来たら、罨をしかけたものとみなし、即刻人質を処刑する』と書き足してくれ。俺たちが先に処刑場に着くことが前提条件だ。フィンガルに先を越されたら、この計画は始めようもないからな」

「いいわよ。それから？」

「そのあとは何もせず、隠れている」

メイヴェェは大声を上げた。

「どうしてよ！」

「おまえの役目は決して顔を出さないことだ。この騒ぎがおまえのしわざだとわかったら、この町にはいられなくなるし、俺は人質として役に立たなくなる。おまえが俺に手をかけるはずがないことくらい、父上もご存知だ」

「……でも、何かあるでしょう？ 手紙を書くだけじゃいやよ」

「いいからおとなしくしている。今回はおまえのわがままをきく気はないぞ」

「でも」

「だめだ」

「……だって、わたしもルーフィスを助けるために何かしたいのよ」

ダーモットはメイヴェェの聞き分けのなさに苛立ち、声が険しくなった。

「たまには俺の言うこともきけ！ こんなことになったのはいったい誰のせいだと思ってるんだ！ これ以上バカな真似はさせないからな！」

「なによ、その言い方！ あなたなんてフィンガルに恥をかかせて、せいぜい恨まれればいいわ！」

「フィンガルは俺の腹心の友だ！ こんなことくらいで恨んだりするか！」

「そうかしらね！ あいつはねちっこいもの！ 絶対恨むわよ！」

「喧嘩している暇があったら、早く書いてくれる？」

ディアンが羊皮紙をとんとんと叩いた。

メイヴェはふくれっ面で追加文を書き足した。インクが乾いたのを確かめてから手紙を丸め、ディアンに手渡す。ディアンは手紙を受け取ると、すぐに館を出て行ってしまった。

「おい、子供がこんなに夜遅く出歩いて平気なのか」

「あの子は特殊だって言ったでしょ。心配いらないわ」

メイヴェは不機嫌そうな声で答えた。ダーモットはテーブルに両ひじをつき、メイヴェを見つめた。メイヴェはまだ不満げな視線を返してくる。

「何よ？」

「おまえは怖くないのか、メイヴェ」

「何が？」

「何もかもだよ。人質交換でばれたら、殺されるかもしれないっていうのに」

「もっと怖い目にあったわ」

メイヴェはあっさりと答えた。彼女の言う怖い目とは、落城のとき自分が彼女にしたことを指しているのだと察した。ダーモットは安易に慰めるより、今までのいきさつをきちんと話しておいたほうが良いと判断し、静かに口を開いた。

「父上はベラント人が西部制圧をするのではないかと懸念している。コリグ川下流のブロウを落とすのは、トゥルベク領にして守りを固め、ベラント人の西部進軍に対する堤防にしようという考えなんだ……エニスレーンも同様だ」

「堤防？ そんな話、信じられないわ。じゃあ、あの武器は何？」

「武器？」

ダーモットは首を傾げた。

「武器ってなんのことだ？」

「わたし、知ってるのよ。夜中にこそこそと倉庫に武器か何かを運びこんでいるじゃない。堤防だなんて調子のいいことを言って、どこかに戦でも仕掛けるつもりなんじゃないの？」

「それは本当の話なのか？ どのくらいだ？ どの倉庫にあるんだ？」

「どのくらいかなんて知らないわよ。ディアンが箱には蓋がしてあって、中は見えなかったって言ってたんだから。倉庫の場所は広場の近く。曲がりくねった道沿いの空き地よ」

ダーモットは内心嘆息した。どうやらメイヴェは武器を直接見たわけではないらしい。

倉庫の場所も広場の近くらしいが、あのあたりは現在建設中の倉庫が多い。父上は頻発する飢饉に備えて、食糧の備蓄を行うと言っていたので、メイヴェはそれと勘違いしているのかもしれない。

しかしダーモットはそのことを告げてメイヴェの機嫌を損ねるつもりはなく、穏やかに言った。

「父上は戦は避けなければならないといつも言っている。トゥルベク家の目的は西部を豊かにすることだ」

「……そんなはずないわ」

ダーモットはメイヴェの目をまっすぐ見て、根気よく続けた。

「平和を望んでいることはアニェック家の家臣にも伝え、信任を得ている。ベラント人と協力しているのは、戦を避けるためなんだよ。それは俺も同じ思いだ」

「でも、お父さまが言ってたのよ……あなたの父親はきっと戦を起こすって」

メイヴェはテーブルの上に視線を落とし、弱々しく言った。ダーモットはメイヴェの言葉を否定する気はなかった。彼女の亡くなった父への思慕がどれだけ強いものか、ダーモットは知っている。

メイヴェはテーブルに頭を預け、目を閉じた。ダーモットがおずおずと彼女の頭に手を伸ばすと、メイヴェはされるがままになっていた。彼女の柔らかな赤毛にふれ、指にからめる。

「戦は起こさないよ。おまえの父親が守ろうとした土地を決して悪いようにはしない」

ダーモットはいったん言葉を切り、思いきって言った。

「だから、城へ戻ってこい、メイヴェ」

この二ヶ月間、いくどもくり返した言葉だった。今の自分がどう慰めても偽善にしかならないのだから、慰めの言葉よりも自分の気持ちを伝えようと思った。メイヴェを助けてやれるのは自分しかいない。この娘をこれ以上悲しませたくない。

「すまなかった。俺はおまえをこんな目に遭わせるつもりはなかったんだ。城に戻ってこい、メイヴェ。俺の妻になる約束を果たしてくれ。一生おまえを守ると、神の前で誓わせてくれ」

メイヴェは瞼を開けて、草色の瞳を輝かせた。

「ありがとう」

メイヴェは静かに言った。

「もっと前にその言葉を聞いたかった……何も起きていなかったときに」

「どういう意味だ？」

メイヴェは答えのかわりに小さく微笑んだだけだった。それからテーブル越しに手を伸ばし、ダーモットの腕を愛しげに撫でた。柔らかな手を通してメイヴェの温くなった気持ちが自分のほうへ伝わってくるように思われた――そうだ、メイヴェは少しかたくなになっているだけだ。今だって喧嘩したが、すぐ仲直りできたじゃないか。大丈夫だ、俺たちはきつとうまくいく。

ダーモットは希望的観測に浸った。そして酒精が効果を表し、いつしか意識は酒の波に漂い、さらわれていった。

メイヴェがダーモットの腕を揺すった。

「ダーモット？　ダーモット？……あら眠っちゃったわ。色気のない人ね」

メイヴェはテーブルに伏せていた顔をしゃんと上げて、優しく囁いた。

「求婚、嬉しかった。ほんとよ。だってわたしもあなたのことが好きなんだもの。でもね、トゥルベク家のしたことは許せないの。あの日のことはたぶん一生忘れられない。ルーフィスを取り戻したら、わたしはエニスレーンともあなたともお別れするつもりよ……ごめんなさい」

緑色の瞳に涙がにじんだ。メイヴェは嗚咽をこらえてダーモットの腕に手をのせたまま、目を閉じた。

深夜の訪問者

メイヴェはダーモットに揺り動かされ、突っ伏して寝ていたテーブルから顔を上げた。

「何？」

「馬の蹄の音がする。誰か来た」

メイヴェが椅子から立ち上がると同時に、館のドアが強く叩かれた。

「メイヴェ様！ ここをお開けください、メイヴェ様！」

言葉こそしていねいだったが、声音は罪人を問いつめるかのように厳しい。

「ばれたのかしら」

「俺は人質だから、ここにはまらずい。寝室に隠れる」

ダーモットはそれだけ言うと、脱いであった上着をつかみ、寝室に急いだ。メイヴェは髪と服を簡単に整えながら、返事をする。

「誰？」

「夜分に失礼致します。トゥルベク家の家臣フィンガルと申します。確かめたいことがあって参りました。ドアを開けていただきたい」

訪問者はフィンガルか一厄介な男が来たものだ。

フィンガルはダーモットより半年早く生まれた十八歳。明るい茶色の髪に、彫りの深い顔立ちの青年で、外見だけは乳兄弟のダーモットと遜色ないが、性格は似ても似つかない。冷やかな直情型で、犬猿の仲のメイヴェに対しては、露骨に慇懃無礼な態度を表す。

「こんな時間に無礼じゃないの。明朝出直しなさい」

「火急のことですので、そうは参りません。どうしても開けていただけないと言うのなら、このドアを破ってでも入ります」

「……わかったわ。今開けます」

彼なら本当にドアを破りかねない。メイヴェはそう判断して、錠を上げた。

待ちかねたように長身のフィンガルが押し入ってきた。強引な一徹さを感じさせる切れ長の目が、探るような視線を走らせる。

「ずいぶんと酒臭い部屋だ」

フィンガルはそう吐き捨てる、鍛えた腕でいきなりすらりと剣を抜く。メイヴェはあわてた。

「何をやるの？」

「館内を検めさせていただきます」

「何ですって？ 夜中にやって来て、勝手に館内を検めるですって？ わたしはそんなことを許した覚えはないわ。帰りなさい！」

「護衛役のロートはどこです？」

「ロート？」

「そうです。近頃ロートの姿が見えないと、差し入れ係の下男から報告を受けましてね」

メイヴェは一瞬怯んだが、すぐに高らかに笑ってみせた。

「ロートならいるから、安心して引き取りなさい。そんなことを確かめるために、礼儀もわきまえず来たの？ トゥルベクの者はベラント人のように野蛮なのね」

「本当にロートがいるなら、この騒ぎで出てこないのはどういうわけですか？」

メイヴェは言葉に詰まった。

フィンガルは返事を待たずに続ける。

「わたしが今夜参りましたのには、理由があります。昨夜ダーモット様がさらわれたのです」

「まあ、ダーモット様が？ それで行方は？」

「まだ見つからないのです。で、いろいろ調べてみたところ、このエニスレーンで怪しい動きがあったのはこの館だけでしてね。ダーモット様の大事に、悠長なことはしてられませんので」

「どういう意味よ、それは？ あんたはわたしを疑っているの？」

「疑わしい場所はすべて調べるといっただけです。さて寝室を拝見させていただきませんか」

「やめてよ、無礼じゃないの！」

フィンガルはメイヴェを押しつけて寝室のドアを開けた。暗い部屋のベッドの上で、掛布団にくるまった人影が動く。フィンガルは鈍く光る長剣をかまえた。

「何者だ？ 名のれ！」

メイヴェは決まり悪そうに言った。

「返事をなさい、ロート」

布団の中からくぐもった声が聞こえた。

「はい」

「これは、これは――」

フィンガルは驚きを隠さず、メイヴェを見た。

「もういいかしら。わたしにこれ以上恥をかかせるつもりがないなら、下がりなさい」

メイヴェはフィンガルを寝室から押し出し、ドアを閉めて、その前に立った。フィンガルは汚物を見るような嫌悪の表情を浮かべて、メイヴェを見下ろした。

「酒を飲んで、ロートなどと床をともにするとは、よほど一人寝が寂しかったと見えますね。ダーモット様が落胆されますよ」

「うるさいわね！ わたしから城を奪って一人にしたのはあんたたちでしょ！」

「だからと言って、護衛兵などと閨をともにするとは何事ですか！ 姫君には恥ずべきふるまいです！」

フィンガルは大声を上げた。

「出てこい、ロート！ ダーモット様の婚約者に手を出したとあっては、ただではすまさないぞ！ 城に連れ帰って詮議する！」

「黙れ、フィンガル！」

メイヴェは高貴に生まれついた者のみが持つ迫力で一喝した。

「わたしはもはやダーモット様の婚約者ではありません。そしてロートは今わたしが保護している者です。彼は今夜の雨で衣服を濡らしてしまい、現在身に着ける物がないので、出られないの

です。今は引き取りなさい。ロートは明朝身なりを調べさせてから、城に出頭させます」

「見え透いた嘘を。信用できるものか！」

「わたしは落ちぶれてもエリルアド小王の娘です。偽りは申ませぬ。それともこれ以上ここに
いれば、そなたの狼藉をドムナル様に注進するが、よろしいか！」

フィンガルは顔を真っ赤にして、メイヴェエを睨みつけた。

「わかりました。今夜は引き取りましょう。ですが」

フィンガルは鋭い視線を寝室のドアに移した。

「メイヴェエ様の約束だけでは心許ない。中にいるのが本当にロートなら、わたしは保証をいただき
きたい」

「わたしが約束を違えるとでも？」

「そうは申しませんが、もう一度寝室のドアを開けていただきたい。わたしの目の前で、ロート
に明日の出頭の誓いを立てさせたら、退出することにしましょう」

「さっきから言ってるでしょ！ ロートは今身に着ける物が無いので、出られないの——」

「そこをどきなさい！」

フィンガルは長剣を握り直し、鋭い切っ先をメイヴェエに向けた。

「何するのよ！」

「今はダーモット様の一大事です！ 怪しい者がいないか確かめずに、城には戻れません！ ど
かなければ、メイヴェエ様といえども斬る！」

喉元に剣を当てられ、いよいよだめかと思ったときだった。外からのドアが開いて、ディアン
が駆けこんできた。

「メイヴェエ様！」

とっさにフィンガルがドアのほうを振り向いた。そのすきに、メイヴェエが腕に飛びついて、長
剣を奪おうと手を伸ばす。しかしフィンガルは腕力に任せてメイヴェエを振りはらい、メイヴェ
エはテーブルにぶつかって倒れた。

寝室に向かって走り出したフィンガルに、ディアンが背中から飛びかかる。フィンガルはその
ままうつ伏せに倒され、剣を落とした。ディアンはフィンガルの背後から喉を押さえようと右手
を伸ばす。しかしフィンガルは体重にものをいわせて横に転がり、ディアンを振り落とすと、剣
を拾って持ち上げた。

その瞬間だった。フィンガルから剣を奪おうとしたディアンが、切っ先の前に立ち、胸から腹
へすっぱりと斬られた。ディアンは目を見開き、そのまま前のめりに倒れる。

「メイ……ヴェエさ……ま」

メイヴェエが悲鳴を上げた。

「ディアン、ディアン！ 目を開けて！」

剣を手に呆然としているフィンガルを押しつけて、メイヴェエは横たわったディアンに駆け寄り
、ふるえる手でディアンの頬を撫でた。

「むごいことを……この子はまだ十の子供なのよ！」

メイヴェエはディアンの小さな体を抱きしめ、叫んだ。

「ディアン、しっかりしなさい、ディアン！　なんてひどい……許さないわよ、フィンガル！」
「メイヴェ様、わたしはこの子を殺すつもりはなかったのです。それは信じていただきたい……
だいたいなぜこんな子供がここに……」

「黙りなさい！」

メイヴェはディアンを抱き、泣きながらフィンガルに怒鳴った。

「この子は両親を亡くし、この町で行き倒れになっていた哀れな子よ！　縁あってわたしが助けてあげたのよ！　それ以来この子は恩を感じ、わたしのために尽くしてくれたわ！　それなのに、こんなことに……」

メイヴェはそのあとは言葉にならないといった様子で、ディアンの体にすがって大声で泣き始めた。

フィンガルは肩を落とし、力なく立ち上がる。剣を鞘に戻し、のろのろとドアの前に向かい、視線を落として呟いた。

「……明朝ロートを城へ送ってください」

「出て行って！　早く！」

メイヴェは号泣し、フィンガルは素直に館を出て行った。去っていく蹄の音がついに聞こえなくなったとき、メイヴェが言った。

「もういいわよ」

倒れていたディアンがぱちりと目を開け、むくりと起き上がった。

ダーモットが寝室のドアを叩きつけて、転がるように居室に入ってくる。

「ディアンは死んだのか！」

「生きてるよ」

ディアンは肩をすくめて返事をした。

「おまえ、生きてたのか！　傷はどうした？　フィンガルに斬られたそうじゃないか！」

「平気だよ」

ディアンは上着の前をかき合わせて、腹の傷を隠す。

「もう少しフィンガルの躰をなんとかしておいてちょうだい、ダーモット。扱いにくいったらないわ」

メイヴェは椅子に腰を下ろし、テーブルに頬杖をついてため息まじりに言った。それからディアンのほうを向く。

「上着を切られただけよ。深傷じゃないわね、ディアン？」

「うん」

ダーモットは怒鳴った。

「二人とも何を言ってるんだ！　胸にあいつの剣を受けて平気なわけないだろうが！　たとえかすり傷だったとしても、甘く見たら化膿するぞ！　手当てをするから見せてみる！」

「傷はほんとに大したことないんだ。手当てはあとでメイヴェにしてもらうからいいよ。それより大変なことがあるんだ、二人とも。俺、どじっちゃった」

「なんだって？」

「なんですか？」

二人が同時に問いただし、ディアンは口ごもった。

「……手紙を置いてくるとき、兵に見られちゃったんだよ。ごめん」

「ええ？」

「城門の両脇にある円塔の屋根に上がったところまではよかったんだけど……」

「ちょっと待て！ 円塔の屋根に上がったって？ いったいどうやってあんなところに上ったんだ？」

「跳ね橋が下りてたんだよ。その先の格子戸も下りていたから、城内に入ることはできそうもないと思って、跳ね橋の鎖を伝って上の横木に上った。そしたら円塔の屋根なんてすぐじゃない」

「おまえ……身軽だとは思っていたけど……」

ダーモットが驚き半分あきれ半分といった様子で言葉をとぎれさせる。

ディアンは続けた。

「円塔の屋根からどこかに飛び移れないかと思って、きょろきょろしてたんだ。そしたら向かいの円塔の兵が窓からこっちを見てるんだよ。信じられないって顔してさ」

「……そりゃそうだろう」

「突然のことで、俺たちはお互い睨み合ったまま身動きできなかった。しばらくすると、あいつは弓をつかんで射てきた。はずれたけどね。そのあと俺は手紙を城門の中に投げ入れて、急いで逃げてきた……でも顔は見られちゃった、真正面からばっちり。ごめん、俺のミスだ」

「手紙を石に巻いて投げるだけでよかったのに、どうして円塔の屋根なんかののったりしたのよ！」

「だってさ……ルーフィスが無事かどうか知りたかったんだもん」

「バカ！」

メイヴェは怒鳴ってテーブルを叩き、天井を仰いだ。

「その気持ちはわからんでもないが、城っていうのは防御目的で建てられているんだ。いくらおまえが身軽でも、牢獄に近寄れるわけないだろう。とりあえず生きてここへ戻ってこれただけでも、儲けものだな」

ダーモットはそう言って、椅子に腰を下ろした。

「これでフィンガルが城へ戻れば、見張り兵が目撃した子供と、自分が殺した子供の特徴が一致するってわけだな」

「そうすると、フィンガルは兵を率いてすぐここへ戻ってくるということね」

メイヴェはため息をついた。じつは先ほどから、もう一つ気がかりなことがあった――まもなく夜が明けるということだ。日の出前にディアンを安全な場所に隠さなければならないが、ダーモットにディアンの正体を知られるわけにはいかない。メイヴェは考えた末、言った。

「どうせられたのよ。だからダーモットはもういいわ。このまま城に帰って、ルーフィスを解放するようあなたの父親を説得してよ。そうすればフィンガルの件は不問にするとって」

「おまえたちはどうするんだ？」

「ひとまず安全な場所に身を隠すわ。ルーフィスを返してもらえるまでね」

「バカ言え！」

ダーモットは怒鳴った。

「取引のための人質もなく、無事でいられると思ってるのか！ だいたいこの町のどこに隠れるって言うんだ？ 永久に逃げ続けるわけにはいかないんだぞ！ いずれ捕まって吊るされる！」

「とにかくあなたはルーフィスを解放してちょうだい。それさえしてくれれば、こっちのことは心配ないのよ。ルーフィスが戻ったら、わたしはエニスレーンを出て行くつもりなんだもの」

ダーモットは一瞬言葉を失った。

「な……なんだって……？」

「わたしは二人と一緒にエニスレーンを出ようと決めていたの。たぶんもう二度とここに足を踏み入れることはないと思うわ」

「……いつそんなことを決めた？」

「出ていこうと決めたのは、ずっと前。エニスレーンにわたしの居場所がなくなったときよ。城に忍びこんだとき、やっぱりこの町と別れるのはつらいと思って、迷ったりもしたんだけど、結局城を取り返す方法は見つからなかったし」

メイヴェは向かいの椅子に座っているダーモットをまっすぐ見つめて、淡々と言った。

ダーモットは青ざめ、白くなるほど強く拳を握りしめた。

「居場所なら俺がつくってやると言っているだろう。妻になれば、俺がトゥルベク家の当主になったときに、エニスレーンを返してやれる。それでは不満か？」

「不満よ。わたしは自分の手で取り返したいの」

「そうじゃないだろう？ おまえは自分が許せないんだ。アインガス殿の死後、城を守れなかった自分が」

メイヴェの平手が飛び、ダーモットの頬がぴしゃりと鳴った。

「出て行って！ 顔も見たくないわ！」

ダーモットはメイヴェの手首をつかむ。

「何するの？」

「このまま城に連れて帰る！」

ダーモットはメイヴェの腰に手を回し、ドアに向かって彼女を引きずった。

「いやよ、わたしは城へは行かないわ！ 助けて、ディアン！」

ディアンが素早く駆けつけ、ダーモットの腕をつかんで思いきり下に引いた。ダーモットとメイヴェは揃って床に転倒する。ダーモットが反射的に体勢を立て直す前に、ディアンはダーモットを突き飛ばし、倒れたメイヴェをかばって立ち上がった。

ディアンの破れた上着はすっかりはだけて、腹の上に斜めの剣傷が見えた。相当な深傷のはずなのに、血が流れていないどころか、縫い合わせたようにふさがりかかっている。

ダーモットはディアンから視線を離さず、ドアを背にしてゆっくりと立ち上がった。

「おまえ……やっぱり魔物か」

「だったらどうする？」

「決まってるだろう。メイヴェを連れて帰る。魔物と一緒に置いてはおけない」

「どうやって？」

ディアンは鼻で嗤った。

「あなたの短剣は寝室の中だよ。丸腰で俺の相手ができると思ってんの？」

ダーモットは舌打ちをした。メイヴェは小さなディアンの背中にしがみつく。

「魔物から離れろ、メイヴェ！」

「いやよ！ わたしはディアンと行くの！ ここを出て行くのよ！」

「メイヴェ！」

「いや！」

悲鳴のようなメイヴェの拒絶に、ダーモットは立ちすくんだ。

「……それじゃこうしよう」

ダーモットの声は震えていた。深く息を吸ってから続ける。

「俺はこれから城に帰って、ベラント人を解放するよう父上に話してみる。命にかえても、説得してみせるから、心配しなくていい——ただし、メイヴェが城に戻る事が条件だ」

ディアンがダーモットを睨みつける。

「メイヴェと交換なんて条件、のむわけないだろ。それに人質のあんたはこの館から絶対出さないよ。どんなことをしてでもね」

ディアンが冷然と言って、ダーモットを見据えた。小さな体に殺意がみなぎっていくのが感じられる。

メイヴェはあわてたルーフィスのいない今、荒れているディアンが本気で暴れ始めたら、わたしでは止められそうもない。二人を一緒に置いておくのは、お互いにとって危険だ。

メイヴェは叱るような声で言った。

「だめよ、ディアン。ダーモットは返すわよ」

「どうして！ 人質を返すなんてどうかしてるよ、メイヴェ！」

「あんたさっきわたしと約束したでしょ！ 忘れたの？」

メイヴェはぴしりと言ってから、ダーモットを見た。

「帰って。そしてルーフィスを連れてきて」

「……明晩まで時間をやろう。処刑場で待っている」

ダーモットはそれだけ言うと、踵を返し、振り向きもせず、館を出て行った。重々しく閉じられたドアが再び開くことはなかった。

思いやりと別れ

ダーモットが出て行ったあとの館は、妙に広く感じられた。メイヴェは一気に気が抜け、心細くなった。立ちただかってくれていたディアンが、慄然とした様子でメイヴェのほうを振り向く。

気弱になったらだめだ、とメイヴェは思った。まもなく夜明けなのだから、考えごとをしている時間はない。ディアンを守ってルーフィスに返すためにも、しっかりしなくては。自分を励まし、しゃんとした声で言った。

「ダーモットは明日の晩と言ってたけど、それまでに兵が来ないという保証はどこにもないわ。急いでここを出しましょう」

ディアンはしっかりしたメイヴェの様子を見て、わずかに表情を緩めて頷いた。

メイヴェは城へ行くとき使った麻袋を再び手に取り、室内をさらうようにして食料やろうそく、防寒用の毛布など必要なものを袋につめる。聖セレスティス像も袋に入れようかと思ったが、ディアンのことを考えてやめた。

ディアンは暖炉の火を落とし、寝室からダーモットの短剣を取ってきて、メイヴェに渡した。

なんとかしてディアンを隠さなければならない――メイヴェは焦った。ここで兵に見つかった場合、自分はずぐには命をとられないだろうが、ディアンはその場で確実に首をはねられるだろう。さもなければ、ここで日光を浴びて焼け死んでしまうかだ。

メイヴェは麻袋を床の上に置いて、ディアンと真正面から向き合った。

「まもなく夜明けよ。先に一人であの鍾乳洞へ行きなさい」

「鍾乳洞？」

「そうよ、城へ行く途中通ったでしょ。わたしはあとから行くから、先に行って。あの中に入ってしまうと、たぶん安全よ。町中は搜索するかもしれないけど、あんな山の中は思いつかないだろうし、何より光は入らないし、横道がたくさんあるし、絶好の隠れ処よ。万一兵士たちが鍾乳洞に思い当たっても、どうせ明日の晩には人質交換なんだから、迷う危険を冒してまで、搜索しないと思うわ」

ディアンは即座に首を振った。

「だめだよ。メイヴェ一人で町を抜けるのは危険だ。フィンガルが兵を率いてこっちに向かってきているかもしれないだろ？　メイヴェが町中をふらふら歩いていけば、見つけてくださいと言っているようなもんだ」

実際、ディアンの言うとおりであった。しかしメイヴェ一人でも、メイヴェとディアンの二人でも、町を通り抜けようとすれば、危険に変わりはない。だが自分がいなければ、条件が変わってくる――身軽なディアン一人なら、こっそり町中を突破できるはずだ。

「わたしのことはいいから、早く行って！　これは命令よ！」

「俺はメイヴェの従者じゃないってば！　命令される覚えはないね！」

「そんなことを言っている場合じゃないでしょ。いいから、早く――」

言いかけてはとした。

「貯蔵穴があったわ」

「貯蔵穴？」

「そうよ、納屋であんたが寝泊りしてた穴よ。二人は無理でも、一人なら入れるわ。わたしがそこに隠れるから、あんたは上に蓋をしてちょうだい。それから鍾乳洞に逃げて。あんた一人で走るなら、夜明け前にたどり着くでしょ」

「あんな穴、見つかるかもしれないよ！」

「一か八かよ。二人で鍾乳洞に行くよりは危険が少ないわ。さあ、早く」

メイヴェは麻袋をつかむと、ディアンと一緒に納屋に走った。

納屋に飛びこむと、入り口近くの柱に繋いであった馬が首をふるわせいなないた。馬は貴重な足だし財産だが、反面人目を引く。乗れば目立つし、ここに置いておけば誰かが残っているのではないかと疑われてしまう。今は逃がすしかないと判断し、メイヴェは馬を軽くなだめながら綱をほどいて、思いきり尻を叩いた。ここ数日ろくに世話もされず、放牧状態だった馬は、闇の中に走り去ってしまった。

ディアンが奥の床板をはずして待っていた。長持は居館の寝室に置きっぱなしだったので、穴の中は剥き出しの石張りだ。メイヴェは穴の中を覗き込み、顔をしかめる。居心地のいい場所ではなさそうだと思いながら中に入り、ディアンを見上げて言った。

「たしかにここは寝心地悪そうね。納屋を嫌ったあんたの気持ちがわかったわ」

「……メイヴェ」

「鍾乳洞に入ったら、すぐ右へ曲がるの。二本目の枝道をまた右、そのまま進んで五叉路に出たら真ん中の道、その先にちょっとした岩屋があるわ。そこに隠れなさい」

「メイヴェってば」

「よく聞きなさい、ディアン」

ディアンは膝をついて、不安そうに穴の中を覗く。メイヴェは手を伸ばし、両手で妖精のようにきれいな顔を包んだ。

「もしも、もしもよ……わたしが終鐘までに鍾乳洞へ行かなかったら、捕まったと思ってちょうだい。つまりルーフィスは絶対にあんたのもとへ帰ってくるってことよ。わかるわね？」

「どういうこと、それ？ どんな罰でも受けるって言うの？ いやだ、捕まるなよ！」

「バカね、わたしは往生際が悪いんだから、そう簡単に捕まるつもりはないわ。逃げきって、処刑場での取引に持ちこめれば、三人揃って逃げるチャンスだってあるかもしれないし」

「どうやって？」

「それはこれから考えるわよ。穴の中での時間はたっぷりあるんだもの。さあ床板を閉めて行きなさい！」

メイヴェは背を丸め、冷たい石の上に横たわった。ディアンはメイヴェの足元に麻袋を押しこみ、胸のそばにダーモットの短剣を置くと、泣き出しそうな顔をしながら、床板をのせた。頭の部分に小さな空気穴ができるようわずかにずらし、その上が干し藁の束で覆われると、穴の中はすっかり暗くなる。

「俺、待ってるからね！」

それだけを言い残し、ディアンは足音も立てずに立ち去った。

メイヴェは我が身を危険にさらしてまで、吸血魔を助けようとしている自分にあきれながら、息をひそめた。

ダーモットの帰城

ダーモットがぬかるんだ道を歩き続け、泥を含んで重くなった長靴を引きずるようにして城に着いたときには、鉛色の曇り空がほのかに白んでいた。さわやかとはいえない夜明けを迎え、歩みは遅い――威勢のよい早足で歩く気にはなれなかったからだ。

ヒースの荒れ野を貫く一本道の先に、エニスレーン城が見える。四つの円塔の上ではいつもより多くの見張兵が立ち、堅牢な石の城壁内では、兵たちが出立の支度に駆け回っているはずだ――この城のために愚行をくり返しているメイヴェを捕らえるために。

ゆるやかな勾配を上っていくと、ディアンが言っていたとおり跳ね橋が下りているのが見えた。門兵の一人がダーモットに気づき、信じられないといった表情で走り寄ってくる。

「若様！ ご無事でしたか！」

門兵たちがざわめきながらこちらをうかがっている。その視線にはいたわりの他に、かすかな蔑みが含まれていた。次期当主がさらわれたのだ。エリルアド戦士の名折れと言われても、返す言葉もない。

「開門！ 若様がお戻りだ！」

兵のかけ声と共に大きな音を立てて、格子門が開かれた。

ダーモットは兵たちの注目を集めながら、古ぼけた跳ね橋を軋ませ、ゆっくりと歩いた。ここを通るときはたいてい騎乗しており、徒歩は久しぶりだったので、濠の水音がとても近く感じられる。

格子門を抜けた庭は、馬丁に引かれた馬や、帷子や兜を身につけ、腰に剣を差した兵が出発を待っていた。

帷子を鳴らしながらも、敏捷さを失わない男が、ダーモットのもとへ一直線に駆け寄ってくる。

「ダーモット様！ よくぞご無事で戻られました！」

「心配をかけてすまなかった、フィンガル」

「本当に、よくご無事で……」

フィンガルは深青色の目に涙をにじませた。よほど自分の安否を心配していたのだろう。ダーモットは胸の内で頭を下げた。

フィンガルの母はダーモットの乳母であり、二人は乳兄弟として育てられた。この国の多くの乳兄弟のように、二人は実の兄弟以上に信頼しあっている。言葉遣いこそ主君と臣下のものだが、会話はいつも気心の知れたものだったし、ダーモットは武術に優れたフィンガルを兄のように慕っていた――しかしメイヴェ絡みとなると、フィンガルの態度は硬化する。あの自己中心的過ぎる性格を、トゥルベク家にふさわしくないと考えているからだ。

「俺が戻ったのだから、ひとまず兵は待たせておけ。おまえに話がある」

「なんですか」

ダーモットは兵の視線が集まっているのを感じ、顔をぐいと上げ、居館に向かって歩き始めた。フィンガルは歩調を揃えて脇に従う。できれば居館に入ってから話したいが、その時間はない

だろうと判断し、ダーモットは重い口を開いた。

「……おまえ、どこまで父上に話した？」

「どこまでと言いますと？」

「つまり、昨夜のことだ」

「昨夜というと……やはりダーモット様はメイヴェエ様に捕らえられていたのですね！」

フィンガルは我が意を得たとばかりに、声を荒げた。

「声が大きいぞ！」

「そのようなことを言っている場合ではないでしょう。よろしいですか、ダーモット様、あの娘は危険だと、以前から申し上げていたはずです。誘拐という悪業が失敗に終わったものの、ダーモット様に恥をかかせようという意図は明白です。メイヴェエ様が城を追われ、トゥルベク家に恨みを抱いていることは、三つの幼子でも承知していることではありませんか」

こちらの訊きたいことは何も訊けず、フィンガルの小言を聞いているうちに、居館の前に着いてしまった。昨夜の出来事のあとでは、フィンガルに言い返す気力も残っていない。

「つまりおまえはすべて父上に話したということか？」

「もちろんです」

ため息をつく暇もなく、居館の前に立つ兵が厚いドアを開け、入室を促す。中に入ると父の従者が声をかけてきた。

「ご無事でのご帰還何よりでございます、若様。ドムナル様がお待ちです」

憂鬱からどん底に落ちこんだ。フィンガルの小言は、単なる前哨戦だった――これからは父との本戦が待っているというわけだ。

ダーモットは重い足取りで西塔に入り、螺旋階段を上りながら、メイヴェエを助ける方法を必死で模索していた。自分に恥をかかせた娘をかばおうとしていると臣下たちが知ったら、彼らは二度と自分に敬意を払わなくなるだろう。しかし手負いの獣のようなメイヴェエを見捨てることはできなかった――その傷を負わせたのは、他ならぬトゥルベク家なのだから。

一緒に階段を上ってきたフィンガルを西塔に控えさせ、ダーモットは一人で右側のドアを引き、二階の簡素な広間に入った。

通常広間は客人を迎える場所でもあるため、城内でもっとも広く、きらびやかな飾りつけが施されている。しかしエニスレーン城の場合、家臣揃っての戦勝祝いもできないほど狭く、トゥルベク家が入城したとき、装飾品はほとんど残されていなかった。現在父は広間としての体裁を整えようと考えてはいるが、なかなかそこまで手が回らないのが現状である。

父ドムナルはその広間の奥の一段高くしつらえた上席で待ちかまえていた。丸顔で小柄だが、内から発散される存在感はただ者ではないことを感じさせ、細い目からもれる光はとりわけ鋭く、対峙した者を圧倒する。

ドムナルは雄牛の頭部を彫った肘かけに腕をついて座り、口髭を撫でていた。いつものように泰然としてはいるものの、疲労の色が濃く見え、ダーモットは自分が父に大変な心配をかけたことを察した。前に進み、ひざまずいて低頭する。

「ただいま戻りました、父上」

「女のもとから朝帰りとは、大した色男だな、ダーモット」

やはり父上はすべてご承知ということか——ダーモットはどうやって切り抜けようかと思案しつつ、俯いたまま詫びた。

「今回のことでは父上にも甚大なご迷惑をおかけしました。いかなる処罰も受けますゆえ、何とぞお許してください」

「面を上げろ」

ダーモットが顔を上げると、ドムナルは顔を動かさず、視線だけでダーモットをねめつけた。

「この茶番の説明をしろ」

「茶番ではありません」

「なんだと？」

口髭を撫でていたドムナルの手が止まった。ダーモットは射るようなドムナルの視線と真っ向からわたり合う。

「茶番ではありません。今回の事件はこの町で恐ろしいことが起こっているせいなのです」

「どういうことだ？」

「このエニスレーンに魔物がおります」

「魔物だと？」

すべてを見通すようなドムナルの目が光った。

「はい。胸に剣を受けても死なない少年をこの目で見ました。剣を振るったのはフィンガル——我が軍でも一、二を争う戦士です。その剣を受けて、いったん死んだかのように見えた者がまもなくよみがえりました。これを人間と申せましょうか」

「それはこの手紙を持って来た黒髪の少年のことかね？」

ドムナルは懐から手紙を取り出し、床の上に投げた。見覚えのある羊皮紙である。

「そうです。今回の騒動はすべてその魔物のしくんだことで、わたし同様メイヴェも被害者です。その書状を書かせたのも魔物でした――メイヴェが少年に操られて、言われるがままに書きつけているのを見ました」

「まちがいなく魔物なのだろうな？ 証拠は？」

「しかとした証拠はありませんが、証言ならございます。フィンガルをここにお呼びください」

「フィンガルをここへ」

ドムナルが従者に言いつけると、すぐにフィンガルが入ってきて、ダーモットのうしろに控える。

「お呼びでございますか、ドムナル様？」

「ダーモットから話があるそうだ」

ダーモットはフィンガルに訊ねた。

「昨夜、おまえはメイヴェの館に行った。そのことにまちがいないな？」

「はい」

「そのとき寝室にいるロートに声をかけたが、短い返事を得ただけで、顔を見ることはできずに退出した。そうだろう？」

「はい。ですが、なぜダーモット様がそのことをご存知で……？」

「あの返事をしたのは俺だ。ロートのふりをしてベッドに横たわっていたんだ」

「あ……あれはダーモット様だったのですか！ ではロートはいったいどこへ？」

「とっくに町を出て行ったらしい。侍女を連れてな」

「なんたること……！」

フィンガルは怒りで顔を染めた。

「いいか、話を続けるぞ。そのあとおまえはメイヴェと問答の末、飛びこんできた黒髪の少年を斬り、館を出た。まちがいないな？」

「……まちがいありません」

「手応えはどうだった？」

フィンガルは決まり悪そうに口を開いた。

「……ありました。少年が体勢を崩し、こちらに倒れてきたせいで、深傷を負わせてしまったのだと思います。子供ですし、手当てをしても助かる見こみはありませんでした。メイヴェ様の従者に手をかけてしまったことは、このフィンガルの重大な不始末です。いかなる罰も受ける所存です」

「不始末どころか手柄だぞ、フィンガル。おまえが斬った少年はまもなく目を開けたのだからな」

「なんですって？ あの少年が生き返ったとおっしゃるのですか、ダーモット様？」

「そうだ」

フィンガルは主君の前であるにも関わらず、声を荒げた。

「そんな……そんなはずはありません、たしかに手応えがあったのですから！ あれはまちがいに死んだはずです！」

「ところが生き返ったんだよ——じつはあの少年は魔物だったのだ」

「魔物？ あれは魔物だったのですか！」

「そうだ。メイヴェと俺は呪いをかけられ、操られていたのだが、魔物はおまえの剣を受けて一瞬気を失い、そのとき俺にかけた呪いがとけてしまった。そのすきに俺は逃げる事ができたというわけだ」

フィンガルは昨夜の出来事を思い返しているかのように沈黙し、言った。

「……にわかには信じられませんが」

「今は信じられなくても、まもなくおまえはその目で少年の生存を確かめることになるだろう。いかがでしょう、父上。これは立派な証言だと思われます」

「それでおまえは魔物を退治せず、メイヴェをそこに置いたまま、一人のこのこと逃げ帰ってきたというわけか、ダーモット？」

ダーモットは頭を振り、父を見据える。

「いいえ、ここから先が大切な話になるのです。しかしその前に確かめておきたいことがあります。城内に忍びこんだベラント人はまだ生かしてありますか」

「ああ、今は牢獄に入れてあるが、今夜にでも吊るす予定だ。特に殺してまずい身元ではなさそうだし、おまえも帰ってきたからな」

とりあえずベラント人が生きていることは確認できた。しかし父がいったん処刑すると決めたものをやめさせるにはどうしたらいいか——ダーモットは慎重に話を進めた。

「それでは先をお話します——フィンガルに斬られた魔物は倒れ、そのときわたしにかけられた呪いはとけました。わたしは今のうちに逃げようと、メイヴェの手を引いて、ドアに向かいましたが、すぐに魔物は起き上がり、再びメイヴェに呪いをかけてしまったのです。彼女はその場に倒れてしまい、魔物に引き寄せられてしまいました。魔物は彼女を人質にするといい、取引を持ちかけてきました。今夜処刑場でベラント人とメイヴェを交換しろ、応じなければ彼女の命をもらおうと」

ドムナルは細い目をわずかに開いた。ダーモットは話を続けた。

「わたしが一人城に戻ったのは、下手に逆らってメイヴェを危険な目に遭わせたくなかったからです。魔物是人質の交換さえすめば、おとなしく町を出て行くと申しとおりました。それでわたしは館を出て、そのことを伝えに参った次第です」

ドムナルは再び口髭を撫で始めながら訊いた。

「それでおまえはどうしたいのだ？」

「それはもちろん……父上に人質の交換に応じていただきたいと」

「なぜだ」

「なぜ……とおっしゃいますと？」

ダーモットは悪い予感を覚えて、努めて冷静に訊ねた。

「魔物と取引するなど、言語道断だ。娘を助けることなどできない。ベラント人は処刑し、魔物は退治する。それが小王としての務めだ」

ダーモットは叫んだ。

「それではメイヴェを見捨てるのですか！ 彼女は父上がお決めになった、わたしの花嫁ですよ！」

「正式に結婚したのでなければ、婚約など解消するのは造作のないこと。そもそも婚姻は両家の繁栄のために結ばれるもの。持参金のない娘をめとる義務はないぞ」

ダーモットは怒りで顔を紅潮させ、鋭い口調で言った。

「持参金はすでに頂戴したではありませんか」

「どういう意味だ？」

「おわかりのはずです」

「さて、わからぬな」

「この町のことですよ」

「町？ 何が持参金なものか。借金で首が回らなくなったのはアニェック家の責任だ。わしが手を貸さなかったら、エニスレーンは潰れるところだったのだ。感謝されても文句を言われる筋合いはない」

「感謝？ これはのっとりではありませんか！」

「傾いた城など武力で落とせばすむものを、話し合いを持ちかけ、アインガスの死にぎわまで待ってやったのはわしの温情だ。あの娘は言いがかりをつけているが、アニェック家の先々代はわしの縁続きなのだから、こちらにも継承権はある。しかも身寄りのなくなった娘に館をくれてやって、生活の面倒までみているんだぞ。本来町を追われても文句は言えない身に、過大な待遇だと思うがな」

「過分などとは思えません。当然の義務です」

ドムナルは沈黙し、口髭を撫でていた手を膝の上に置いた。

「それならおまえに訊いておきたい――我がトゥルベク家もアニェック家のやり方を選んではいたら、領土を守れたかね？」

「それは――」

「東部沿岸はすっかりベラント人にやられてしまった。王都はベラント国王の統治下に置かれ、もはやあそこはエリルアドの地ではなくなってしまった」

ドムナルは強固な意志を持って諭すように、淡々と言葉を継いだ。

「わしは西部ではそれなりに有力な小王だったが、ベラント人の圧倒的な武力の前ではひとひねりで潰されてしまうことを知っておったよ。だからエリルアド小王であり続けるため、自由だの個人主義だのといったエリルアドの美德を捨てた。それに対して、ベラント流の封建領主となった裏切り者と陰口を叩く者がいることくらい知っておる。しかしな、わしの望みは平和だ。これまでのエリルアド小王らしからぬふるまいが、ベラント人の信頼を勝ち得ていたから、交渉に成功し、戦で領土を荒らさずにすんだのだ」

ダーモットは言葉もなく、唇を噛んだ。父の言うように、アニェック家の没落は彼らの問題で、トゥルベク家が仕向けたことではない。そして父は領民の血を流さずにすむよう尽力した。

ドムナルはダーモットに考える時間を与えるかのように沈黙し、しばらくすると口を開いた。

「おまえの取るべき道はベラント貴族の姫を迎え、エリルアドの地を守ることだ。少しは自覚を

持て」

つまりメイヴェを見捨てるということだ。父の言うとおりに、トゥルベク家のためにはそれが最良の選択だということくらいわかっている――しかしダーモットはそんなふうには割り切れそうもなかった。

唇を噛みしめたまま、どうしたら父を説得できるかと考えていると、従者が入ってきた。

「お話し中失礼します。ブレセルが参りました。急ぎお話ししたいとのことです。お通ししてもよろしいでしょうか」

「うむ」

領民代表のブレセルが帽子をとって胸の前に持ち、慌てた様子で大広間に入ってきた。ぶどうの自生しないエニスレーンに外国産のぶどう酒を供給している裕福な商人である。馬で駆けてきたせいで衣服を乱れさせ、喘ぎながら言った。

「ご報告申し上げます。今朝、湖の東岸で男の遺体が発見されたという知らせを受けました。近くの農夫が血相を変えて飛びこんできたんです――それで私は急ぎ使用人を連れて、確かめに行ったのでございます。遺体は魚に食べられる前に岸に打ち上げられたようで、損傷はさほどひどくはなかったのですが、恐ろしいことを発見しました――首筋に二つの痣があり、遺体の血が抜きとられていたのです。使用人たちは吸血魔が出たのではないかと騒ぎ出し、怯えております」

「なんだと？」

ドムナルの声は大きくなった。

ディアンダーダーモットは直感した。ディアンの正体が吸血魔であれば、すべて説明がつく。自分が椅子に縛りつけられ、メイヴェの館で目を覚ましたとき気だるかったのは、血を吸われたせいだ。

ドムナルは威厳のある声に戻って、帽子をもんでいるブレセルに訊ねた。

「その話、領民に広まっているのか」

「いいえ、広めてはいません。遺体は草むらに隠しましたし、使用人たちにも口止めをしてからこちらに参りました。家族にも何も申しておりません」

ドムナルは何か考えている様子だったが、すぐに冷静な声で言った。

「よろしい、褒美(ほうび)をとらせる。今から兵と共に現場へ行き、遺体を隠した場所へ案内するように」

「はい」

ブレセルが退出するのを待って、ドムナルは椅子に深々と座り直した。

「魔物があちこちに同時に出没するとは思えんな。おまえの言う魔物とは吸血魔なのかね？」

ダーモットは平静を装って言った。

「吸血魔かどうか調べる方法があります。わたしの首筋をあらためてください――少年が吸血魔なら、わたしの首筋にも痣があるはずです」

「痣だと？――血を吸われたのか？」

ドムナルは椅子から身をのり出した。ダーモットは落ち着いた声でくり返す。

「首筋をあらためてみてください」

「フィンガル、調べてみよ」

フィンガルがうしろから近づき、「失礼いたします」と言って、肩にかかるダーモットの焦げ茶色の髪をよけて、首筋を覗きこんだ。ごくりと唾を飲みこむ音が聞こえる。

「痣がございます……たしかに二つ……牙の痕のようです」

「牙の痕だと？」

ドムナルの顔色が変わる。

「おまえは吸血魔に血を吸われ、契約を交わしたのか！」

「いいえ、わたしはたしかに血を吸われましたが、吸血魔の血を受けてはいません。信じてください、父上。もし契約を交わしたのなら、おめおめと父上のもとへは参れません。潔白である証に、あらためてお願いします。人質交換に応じてください。取引に応じると見せかけて、魔物を呼び出してください。そうすれば、わたしがその場で成敗してみせます」

「おまえが魔物を倒すと申すか。剣を受けても死なぬ者をどうやって？」

「杭を打ちこむのは難しいでしょうが、首をはねれば、魔物でも生きてはいられないでしょう」

「どうせおまえはその褒美にメイヴェを所望するのだろう。見えすいたことだ」

ドムナルはしばらく沈黙したあと、おもむろに口を開いた。

「よろしい。結婚は承諾しないが、人質交換は許そう」

「ありがとうございます、父上！」

「その前にフィンガルに二つ命ずる」

「なんなりと」

フィンガルは平伏した。

「一つは、ダーモットが血を吸われた件。他言無用だ」

「心得ております」

「もう一つは、メイヴェが魔物と契約したとふれ回れ。そして町を上げて、早急にメイヴェと魔物を捕らえるのだ」

指示を聞き、ダーモットは青ざめた。

「父上！ 人質交換に応じてくださるのではなかったのですか！ それにメイヴェが魔物と契約したとはどういうことですか！」

ドムナルは厳しい顔で答えた。

「人質交換に応じてるのは、娘を助けるためではなく、二人をおびき出すためだ。あの娘は被害者かもしれないが、すでに魔物の血を受けていないとも限らん」

「そんな……魔物に変わった可能性があるというだけで、メイヴェを見捨てるのですか！」

「領民を危険にさらすような可能性は潰さねばならないということだ。そのためには、終鐘まで遊んでいることはない。その少年が吸血魔なら、日中捕まえるほうが安全で確実だ、そうではないか？」

ダーモットは焦った。人質交換まで待つ約束が果たされないどころか、中傷まで流されては、本当にこの町にメイヴェの居場所はなくなってしまう。

「父上、メイヴェは魔物の血など決して受けませんし、わたしにも戦士としての体面があります

！ 自分の血を吸った吸血魔を、正々堂々とこの手でしとめてやりたいのです！ そんな卑怯なやり方はやめてください！」

「卑怯？」

そう問い返したドムナルは、唇をぐにやりと歪めた。ダーモットはその笑い方にうすら寒いものを覚え、尊敬している父が見知らぬ人になったような錯覚を起こした。しかしそれは一瞬のことだった。次の瞬間ドムナルの笑い顔は消え、すぐにいつもの威厳ある顔つきに戻る。

「娘と吸血魔が隠れるような場所が思い当たるなら、この場で言うておけ、ダーモット。ないなら話は終わりだ。おまえは自室に下がって、待機している。フィンガルは残れ。話がある。では行け」

ダーモットは父への絶対的な信頼に小さな瑕がついてしまったことを感じたが、それを問うことはできなかった。腹心の友を肩越しに見て、無言で大広間を出た。

ドアが閉められると、ドムナルはおもむろに口を開いた。

「ダーモットにも困ったものだ。なぜあの娘にあれほど執着するのか、わしにはさっぱりわからん。領主としてという意味ではない。父親としてだ」

「お察しします」

フィンガルは感じ入ったように深く頷いた。

「そこでだ、フィンガル、おまえに頼みがある。おまえをわしの息子、ダーモットの兄のような存在と見こんでのことだ」

「なんなりとお申しつけくださいませ」

「メイヴェエを殺せ」

ドムナルが短く言うと、フィンガルは息をのみ、深青色の目をみはった。

ドムナルは表情を変えずに言葉を継ぐ。

「捜索時に発見できれば、その場で殺してもかまわん。むしろダーモットの目が届かないところで殺したほうがよいと思っているくらいだ。それができなければ、人質交換のときに必ず殺せ。あの娘は生かしておいては邪魔だ。よいな？」

「心得ました」

フィンガルは決意の表情を浮かべて退出した。

広間に一人残されたドムナルは、口髭を撫でて呟いた。

「そう——あの娘は邪魔なのだ。ベラント人をこの町に引き入れるためにはな。反乱者の旗印にかつぎ上げられないようにするためには、ここらで片付けておくのが上策だ」

乳兄弟の不信

ダーモットはうなだれて広間から西塔に出ると、うす暗い自室に戻った。

板窓を押し開けると、弱々しい朝日が射し込み、室内はいくらか明るくなったが、同時にしめった空気も流れこんでくる。窓の外にはエリルアド特有の灰色の雲が立ちこめ、遠くに見えるエニスレーンの町に暗い陰を落としていた。

ダーモットは窓の前に立ち、微風に吹かれながら、メイヴェたちが身を隠しそうな場所といえ、あの鍾乳洞だろう、と考えた。しかしもちろん、このことを父に教えるつもりはない。

父はなぜ嘘の噂を流してまでメイヴェを殺そうとするのかという疑惑が、胸の内でどんどんふくらんでいく。ひょっとすると、メイヴェが言っていた武器の話が真実で、そのことと何か関係があるのだろうか――しばらく考えてみたものの、自室で謹慎中では町へ出向いて確認することもできず、推測の域を出ることはない。ダーモットは歯がみした。

今の自分が最低限しなければならないのは、二人の発見を阻止することだ、とダーモットは思い直した。人質交換のときまで時間を稼げれば、メイヴェを助ける方法も見つかるかもしれない。

フィンガルを呼ぼうとドアのほうを向いたとき、ノックの音がした。返事をする、とのフィンガルの声がある。ダーモットは急いでドアを開けた。

「ちょうどよかった。おまえに話があったんだ」

「……そうですか。わたしもダーモット様にお話がありますので……お邪魔してもよろしいですね？」

フィンガルの表情は冴えない。ダーモットが入室を促すと、黙りこくったまま従った。窓ぎわの長椅子を指さして座るよう勧めると、またも無言で腰を下ろす。

ダーモットは椅子を引き寄せて、フィンガルの真向かいに腰かけた。腿に肘をつき、顎の下で手を組んで、フィンガルを見上げる。

「父上の話はなんだった？」

「べつに大したことではありませんでしたよ。魔物に気をつけるようにと言われただけです」

フィンガルは目を伏せ、冷やかに答えた。そんなことのためにあの父が残るよう言いつけるだろうかとダーモットは訝ったが、それを問いただしている時間はない――単刀直入に切り出した。

「俺の話というのは他でもない、メイヴェ搜索の件だ。行ったふりをして、捜さずに引き返してくれないか」

「わたしに偽りを申せとおっしゃるのですか」

フィンガルは目を見開き、眉をひそめた。

「そのお話はわたしの胸に収め、聞かなかったことにしましょう。失礼します」

フィンガルは押し殺していた怒りを露わにして、腰を浮かせる。ダーモットはフィンガルの腕をつかんでとめ、もう一度長椅子に座らせた。

「待ってくれ。聞いてもらわなければ困る。俺はどうしても人質交換に応じなければならない

んだ。頼む」

「名のある戦士の言葉とは思えませんね。恥ずかしくないのですか」

「承知の上だ」

フィンガルは嘆息して、ダーモットを真正面から見据えた。フィンガルの深青色の目に鋭い光がともる。

「それではわたしの話も聞いていただきましょう。おかしいことがあるのですよ、ダーモット様」

「……なんだ？」

「わたしが吸血魔を斬ったとき、ダーモット様に向けられた呪いが一瞬とけたのでしたね？」

「……ああ、そうだが」

「それならメイヴェ様はどうなのですか？ 同時にメイヴェ様の呪いもとけたはずではありませんか。しかしメイヴェ様は吸血魔をかばって、わたしを追い出した。つまり魔物の呪いはとけなかったということです——これはいったいどういうことでしょうか」

「それは……」

ダーモットも今度ばかりはうまい言い訳を思いつけなかった。フィンガルはダーモットの返答を待たずに、厳しい口調で言った。

「差し出がましいのは承知の上で言わせていただきます。あの娘はダーモット様にはまったくふさわしくありません。いいですか、今回の騒動でダーモット様を窮地に陥れたばかりか、魔物に襲わせることまでしたのですよ。さらにドムナル様のおっしゃるように、吸血魔と契約を交わした可能性さえある娘です。なぜそのようにかばい立てするのですか。わたしは今回の件は、ダーモット様が目を覚ますよい機会だと考えています。ダーモット様があの娘を諦めてくださいますよう、今すぐあの館へ向かうつもりです」

「捕らえてどうするつもりだ？ まさかその場で斬るつもりではないだろうな？」

「さあ、どうでしょう？」

フィンガルは軽く肩をすくめた。

「メイヴェ様が抵抗されれば、そのようなことも起こるかもしれません。あの娘しだいということですねえ」

とぼけているようなフィンガルの言葉に、ダーモットは不自然さを覚えた。いくら嫌っているとはいえ姫君であるメイヴェ殺害について、ここまで堂々と言っているのはどうも腑に落ちない。

「このとおりだ、フィンガル」

ダーモットはフィンガルに頭を下げた。状況は切迫している。メイヴェの命が助かるなら、頭など下げてもかまわなかった。

フィンガルは無言だった。ダーモットは俯いたまま膝の上の拳を見つめて、くり返した。

「頼む、フィンガル。俺が頭を下げて、聞き入れてはくれないか」

「やめなさい、ダーモット様。わたしなどに頭を下げるようでは、仕える価値はありませんよ」

ダーモットがはじかれたように顔を上げると、フィンガルはすっと目を背けて立ち上がる。あ

まりに冷ややかな態度に、ダーモットは彼を引きとめることができなかった。

フィンガルは退出の挨拶もせず、靴音を立てて足早にダーモットの寝室を出て行き、ドアは重々しく閉じられた。

ドアの外で、フィンガルが従者に声をかけているのが聞こえた。

「ダーモット様の部屋に見張りを立てろ。ドアと窓の下、両方だ」

ディアンは無事鍾乳洞に着いただろうかーメイヴェは穴の中での暇つぶしに考えごとを始め、直後にディアンなら大丈夫だろうという結論に達した。館を出たときはまだ真っ暗だったし、すばしこいし、悪知恵だけは働くから、トラブルに遭遇しても自力で切り抜けられるだろう。鍾乳洞にさえ入ってしまえば大丈夫だ。エニスレーンの地形に詳しくないトゥルベク家が鍾乳洞を見つけて搜索するとは考えられないーもちろんダーモットが黙っていてくれればの話だが。

ディアンのことを考えるのもういい、とメイヴェは思った。問題は自分だ。小王の娘というのは有名人だし、町中には人目もある。どうやったら真っ昼間から鍾乳洞へ行けるだろうかーメイヴェは狭い穴の中で体を縮めながら、唸った。

鍾乳洞までの道は二本ある。

一本目は城に忍びこんだとき、取ったルートだ。広場を抜け、荒れ野沿いに歩き、山道と川を渡る道。

二本目は人の通わない森を通して、町を迂回する道。人目につく心配はないが、死の妖精のすすり泣きが聞こえるという噂の森なので、できれば近づきたくない。

やっぱり町中を抜けられないだろうか、とメイヴェは考えた。今のところ、この館には誰も来ていないみたいだし、それなら町にも兵は出ていないかもしれない。

一瞬そんなことを考えたが、楽観で動くのは危険だとすぐに思い直す。自分の肩にはルーフィスとディアンの命もかかっているのだから、確実にたどり着ける方法を選ばなくてはだめだ。

それにしても静かなうえに、寒い。狭い穴の中に麻袋まで入れているため、寝返り一つ打てないのもつらい。城に行った日の午後からずっと、横になって眠っていないので、このまま穴の中にいると、確実にまぶたが落ちてくる。

外は静かだし、ここにいる必要はないかもしれない。フィンガルは町中に向かったのかもしれないし、眠ってしまわないうちに思いきって出ることに決めた。

空気穴としてディアンが開けていってくれた隙間に指を入れ、床板をずらす。光が射しこみ、納屋の天井が見え、特に変わったことはなさそうだとほっとしたとき、地面を駆ける蹄の音が聞こえた。

血の気が引くー来た。城の兵だ。

メイヴェはずらしたばかりの床板を元どおりに直して、再び冷たい穴の中にもぐりこんだ。

馬の蹄の音が止まり、館のドアが荒々しく開かれる音が響いた。メイヴェは穴の中で身をかくす。

兵たちは家捜しを始めたようで、物をひっくり返す音や武具のぶつかる金属音などと同時に、声が聞こえた。

「ベッドの下はどうだ？」

「おりません！」

「逃げたようです！」

最初の声はまちがいなくフィンガルのものだった。ダーモットの声は聞こえない。メイヴェは

彼が来なかったことに安堵した。かばってくれているのかもしれないというささやかな希望が胸の隅に灯る。

再びフィンガルの険しい声が聞こえた。

「小屋と納屋を調べろ！」

メイヴェは青ざめた。すぐに兵たちが納屋の中に入ってくる気配がした。複数の足音が散乱した干藁を踏んで、近づいてくる。

メイヴェは穴の中で目を閉じ、ダーモットの短剣をぎゅっと抱きしめながら、息を殺した――神様、お助けください、神様――。

兵たちは小声で話し始めた。

「いないみたいだな」

「ああ」

「追われるとわかっていて、いつまでもここにいるわけがないよな」

そうよ、そうよ、早く行きなさい――メイヴェは心の中で何度も頷いた。

兵たちの気おけない言葉遣いから、フィンガルは納屋には来ていないことはわかった。ドアが開いていたことで、初めからいないと決めてかかっているのか、フィンガルの目が届かないため手を抜こうとしているのかわからないが、兵たちはしらみ潰しに捜そうという気はなさそうだった。願いを聞き届けてくれたときには、信仰心を思い出すよう心がけているメイヴェは、心の中で神に感謝を捧げた。

突然頭上の床板が大きく震動する。メイヴェは悲鳴を上げそうになり、やっとの思いで声を呑みこんだ。

兵の一人が訊いた。

「何やってるんだ？」

「干し藁の中に隠れているかもしれないから、剣を刺してみたんだよ」

「いくらなんでもそんなところにはいないだろう。もう行くぞ。これから町中捜し歩かなければならないんだから」

「ああ」

兵たちは納屋を出て行った。メイヴェの心臓は外に響くのではないかと思うほど大きく鳴っている。上下する胸を押さえ、鼻と口でせわしなく息を吸い、呼吸を整えた。落ち着くよう自分に言い聞かせ、神への感謝をとり下げ、どうにか気持ちを鎮める。

また会話が聞こえてきた。ちょうど納屋の前あたりで喋っているようだ。

「納屋には誰もいませんでした、フィンガル様」

「そうか」

「小屋にも誰もいませんでした。しかし小屋の裏に幌馬車がありました」

「馬車はあのベラント人が乗ってきたものだろう。門番も奴らが幌馬車で町へ来たと言っていたからな。おそらく娘は吸血魔と一緒に馬で逃げた。あの魔女のやりそうなことだ」

わたしがいつ魔女になったのよ！――メイヴェは穴から飛び出してフィンガルに問いただしてやりたいのを必死に堪えた。

「とりあえず不審な馬を捜せ。馬つきなら目立つから、案外早く見つかるかもしれない」

馬？ 馬を目印に捜索するのは見当はずれだ――メイヴェは魔女扱いにはとりあえず目をつむり、希望に目を向けた。彼らが引き揚げたら、しばらく待って鍾乳洞へ行けばいい。楽勝だ。

再びフィンガルの声が聞こえた。

「――では右の二名」

「はっ」

「おまえたちはわたしとともに来い。町中の捜索隊に加わる。残りの二名はここに残れ。もしかすると、魔女と吸血魔が戻ってくるかもしれないから、油断するなよ」

「はっ」

静まりかけていた心臓がまた大きく鳴り出した――二人残る？ 兵がいたら鍾乳洞へ向かうどころか、この穴から出ることすらできないじゃないの！

すぐに馬は走り去り、残った兵たちが館に移動する足音が聞こえた。メイヴェは穴の中で深くため息をついた。

あたりは静かになった。小鳥の声や枝の揺れる音が優しく響く。慣れ親しんだ平和な風景を空想しながら、メイヴェは息苦しさで冷えて死にそうになった。吸血魔ではない自分は、いずれにしるここに長くは住めない。

メイヴェは先ほどと同じように床板をそっとずらし、まずは頭だけ出して誰もいないのを確かめたあと、穴を出た。麻袋とダーモットの短剣を取り出し、床板をきちんと閉め、上に干し藁の束を置き直す。

とりあえずフィンガルの捜索はかわした。次に館から脱出しなくてはならない。

食料配達の下男

メイヴェは壁ぎわの干し藁の陰に麻袋と短剣を隠して身軽になると、納屋のドアの陰から外の様子を窺った。

灰色の雲が垂れこめる空の下、左手の館の前の木に二頭の馬が繋がれ、緑草を食んでいる。館からは兵たちの話し声が洩れているが、詳しくは聞き取れない。

忍び足で館に近づいていく。半分の距離まで来たところで、ふいに二頭の馬が草から顔を上げ、黒く澄んだ目でメイヴェをじっと見つめた。四つの目に射すくめられたメイヴェは、館の石壁沿いにあとずさる。馬は勘が鋭い動物だから、なめてかからないほうがいい。メイヴェはそろそろと下がり、居室側から寝室側に回った。

しめた、寝室の窓が開いている。搜索のときに開けたあと、そのままにしておいたのだろう——メイヴェは身を屈めて窓の下に張りつき、聞き耳を立てた。居室のほうから話し声がする。

「人里離れたってというのは、こういう場所のことを言うんだな。のどかなもんだ」

「のどかじゃ困るんだよ。ついてねえな、俺たち。姫様を見つけりゃ、褒美をもらえるってのに留守番なんてよ。ここじゃ手柄の立てようがねえ」

「食べ物がないか探してみるか？」

「ねえよ、さっき姫様を捜すとき一緒に探した。パンのかけら一つ残ってなかった。姫様が逃げるとき持っていきやがったんだ、くそ。俺たちは誰か来るまで、食べ物もなく待ちぼうけだ。まったくついてねえぜ、くそっ！ フィンガル様づきでエニスレーンに来られると決まったときにゃ、期待もしてたんだがなあ」

「うるさい奴だな、おまえは。寝ててもいいから、黙っててくれ」

「やなこった。おまえ、窓なんか開けて、ちらちら外の様子を見てるんだからな。姫様が来たら、手柄を独り占めする気だろう」

「おまえ、姫様はこの館には来ないって言ってたじゃないか」

「言ったっけかな？——とにかく出し抜かれるのはごめんだ」

堅物者と野心家な二人みたいだ。堅物者の声には聞き覚えがあった——納屋で干藁の中に剣を刺した男だ。

兵たちの目を盗んで逃げられないかと思っていたが、窓が見張られているとなると、こっそり逃げだすのは不可能だ。居室の窓からは館とブナの森を結ぶ一本道は丸見えで、逃げ出せば必ず見つかってしまう。

メイヴェは窓の下に屈んで、腕組みをした。あの二人はフィンガルづきで、エニスレーンへ来たと言っていたことが引っかかった。土地の者でないなら、自分の顔を直接知らない可能性が高い。他に情報はないかと思い、再び耳をすませてみる。

堅物者の声がした。

「だけどな、もしかすると手柄を立てるチャンスはあるかもしれないぞ」

「どういうことだ？」

「いや、故郷の母ちゃんから手紙が来たんだよ。俺の田舎はコリグ川沿いの港町なんだけどさー

「ここんどこベラント人がやたらと来るらしい。しかも兵士ばかりだそうだ」

野心家の声が上ずった。

「戦の準備をしているってことか？」

「まだわからないよ。だってドムナル様の望みは西部の平和だろう。兵を集めてどうするつもりなのか」

「ドムナル様はベラント人と組んで、西部に打って出るつもりなのかもしれねえな」

「まさか。そんなことをしたら、西部の小王たちが黙っちゃいない。いくら国力が弱っていても、西部中が結託すれば、いくらドムナル様でも勝ち目はないよ」

「そうだよなあ。なんでもいいから、戦になってくれねえかなあ。手柄を立てりゃ、故郷へ錦を飾れるってもんなんだが」

ルーフィスを見習ったわけではないが、メイヴェは野心家に説教してやりたい気持ちになった。アインガスは小王として防戦には応じて、領民を苦しめる戦をしかけたりはしなかった。その考えはメイヴェにも受け継がれている。

メイヴェは二人の会話を懸命に吟味した。ディアンが見に行った倉庫の武器らしきもの、トゥルベク領のベラント兵士――たしかに戦の気配を感じるが、堅物者の言ったとおりに、ドムナルとベラント人が攻めこんでくれば、西部の小王たちは団結して立ち上がるだろう。現在西部にベラント領はないので、戦をしかけるには不利だ。ダーモットにはドムナルが戦を起こすのではないかと伝えたが、それは取り越し苦労だったかもしれない。

他に情報はないかともう一度耳をすませてみたが、二人がサイコロを振り始めたので、メイヴェはさっさと見切りをつけた。

忍び足で納屋に戻り、干し藁の陰から麻袋と短剣をとると、小屋の裏手に回る。

荷馬車の幌の中に乗りこんだ。ルーフィスとディアンの身の回りの品が入っている木箱の蓋を上げ、中から古い衣類を取り出す。きずだらけの革の帽子、着古した厚手の上着とズボン――これを着て男のふりをすれば、ここから出て行けるかもしれない。

メイヴェは胸の紐をほどいて、長衣を脱ぎ、下着姿になって古い衣類を眺め、顔をしかめた――汚すぎる。洗濯されておらず、袖口や襟元は真っ黒、すえた臭いも漂っている。年頃の娘である自分がこれを身につけるのかと思うと、気を失ってしまいそうになった。

悪臭死というのは聞いたことがないから、最悪でも死ぬことはないだろうと自分に言い聞かせ、まずは息をとめてズボンをつまみ、脚を通す。これはルーフィスのものなのだろう、丈がかなり長かったので、裾を折った。腰回りも大きかったので、麻紐を通して落ちないように締める。

上着はディアンのものようだったが、もともと大きめのものを着る習慣が幸いし、腕を動かすと少々窮屈でも着られないわけではなかった。

着替えが終わってから呼吸を再開してしばらくすると、臭いも気にならなくなった。慣れとは恐ろしい。

次は頭だ。赤い髪を編んでまとめ、その上から革の帽子をかぶった。鏡がないので、帽子の上からさわってみると、編んだ髪が当たり、帽子の表面はでこぼこしている。メイヴェは嘆息した。頭の形がいびつで、帽子の鍔の下から髪がまったく見えないのは、かなり不自然だろう。

これでは女が髪を隠しているのだと絶対にばれてしまう。取るべき方法は一つしかなかったが、メイヴェは決心がつかず、もう一度帽子の上から頭を撫でた。

帽子の中に編んだ髪を収めている男なんているわけないのだから、仕方がない。女の髪のままでは、いくら男の格好をしたとしても、必ずばれる。そしてばれたら、命はなくなる――自分の命ばかりではなく、ディアンとルーフィス、三人とも。

メイヴェは帽子を脱いだ。編んでいた髪をほどくと、腰まで届く赤い巻き毛が流れ落ち、波うった。

ダーモットの短剣を持って、幌の外に出た。風が名残を惜しむように、メイヴェの長い髪を揺らす。

柄を右手でしっかりと握り、鞘から抜いた。鈍く輝く刃は、よく鍛えられた戦士のように誇り高く見える。

これで本当にダーモットとはお別れだ、とメイヴェは思った。刃に吸い寄せられるようにキスをして、静かに目を閉じた――わたしは本当にダーモットが好きだった。

左手で髪をつかみ、髪に刃を立てた。

髪と刃がこすれる音とともに、長い髪が一房また一房とメイヴェから離れていく。何も考えず手を動かし続け、切り落とされた髪で足元が真っ赤に染まった頃、メイヴェの髪は肩の上の長さになった。軽くなった頭を左右に振って、帽子をのせる。

――さあ、これで男に見えるはずだ。

地面に散った髪の上に枯れ枝をのせて覆い隠した。袋の中身を全部出して、パンとチーズを食べた――長い一日になりそうだから、腹ごしらえは必要だ。残りを干し肉と一緒に戻し、火打石と火打金、火口、ろうそくは巾着袋に移して腰に着け、かさばる毛布は置いていくことにした。ダーモットの短剣はズボンの腰紐の背中側に差して、上着で見えないようにする。

メイヴェは幌から出ると、麻袋を提げて館へ向かった。二頭の馬がメイヴェを見て地面を軽く蹴ったが、メイヴェは無視する。居室からはサイコロの音がもれていた。

自分が隠れていたことを気づいてはいないようだと思安堵して、メイヴェはドアの前で立ち止まった。ドアを叩こうとして、手がふるえているのに気づく。

――大丈夫、ディアンだって、ダーモット相手にやってたじゃない。あの子ができたのに、わたしにできないはずがないわ。

深呼吸を三度して高鳴る胸を抑え、ドアを叩く。

「おはようございます。城から参りました」

椅子の動く音がして、ドアが開けられた。黒光りするあご鬚の大男がのそりと立っている。

「なんだ小僧？ 帰城命令か？」

声から察するにこちらが野心家の兵らしい。イメージどおりに、けっこう怖い顔をしている。目をそらさないようにして、できるだけ低い声で言った。

「違いますよ、メイヴェ様に食料を届けに来ました」

「食料？」

兵の顔はぱっと明るくなった。奥のテーブルに着いたままの馬面の男――こちらが堅物者か――

一がメイヴェのほうに顔を向けた。どちらも見かけない顔だったことにほっとする。

「ああ、ドムナル様が姫様の生活の面倒を見ているからじゃないか。あいにくメイヴェ様はいねえんだよ、かわいい坊や。恩知らずなことにここを逃げ出しちゃったってわけさ」

「そうですか」

野心兵が腕組みをしてしげしげとメイヴェを見下ろした。

「ほんとにおめえ、かわいいツラしてんなあ」

「そ……そうですか」

「でも臭うな。ちゃんと風呂に入れよ」

「……………」

臭いのおかげか、兵たちは目の前の男が女であることを見抜いていないようだった。坊やと呼ばれ、風呂に入れと諭され、メイヴェは内心複雑ながら胸をなで下ろす。

大男が嬉しそうに言った。

「メイヴェ様はいないが、食料は俺が預かってやるよ。よこしな」

メイヴェが素直に袋を差し出すと、馬面の兵が訊いた。

「食料を持ってくるなんて、おまえ、メイヴェ様が逃げたことを知らなかったのか」

兵を出して大騒ぎになっているほどだ。確かに知らないわけがない。メイヴェはあわてて言った。

「そりゃあ、知ってましたよ。でも料理番の親方が持って行けって命じたんで。親方は料理をするのが仕事、そして俺は届けるのが仕事。届けなくていいというご命令がない限り、届けるしかないってわけなんで」

「命令がうまく伝わってないのか。城内もずいぶん混乱しているみたいだな」

「ダーモット様が戻ってこられて、またひと騒動あったからな。まあいいじゃねえか、食料は俺たちでもらっておこう」

ダーモットの名前が出たことにどきりとして、興味を抑えられなくなった。

「あの、ダーモット様は今どうなさってるんですか」

「うん？……ああ、フィンガル様に閉じこめられたって話だよ」

またフィンガルかっ！ 　いつかディアンをけしかけてやると思いながら、メイヴェは怒りの業火を必死で消火させ、顔を引きつらせて言った。

「お気の毒に……それじゃ俺はこれで」

踵を返すと、馬面の兵がふと思いついたというように訊ねた。

「おまえ、どの道を歩いてきたんだ？」

「ど……どの道って？」

メイヴェは振り向いた。

「俺たちは窓を開けて道を見ていたのに、おまえが来たのに気づかなかったぞ」

メイヴェは青ざめた。走って逃げたいのを我慢して、肩をすくめる。

「そ……そりゃあ、おかしいですねえ。でもたしかにこの道ですよ。だって道は一本しかないんですから。そうでしょ？」

「そうだよなあ」

「俺が窓に背を向けて座っていただろう？ 頭で道が隠れていたんじゃないか。サイコロにも夢中になっていたし」

大男が親指で窓を指しながら言った。

「そうかもな。それじゃもうちょっとしっかり見張らないといけないな」

「それじゃ俺は城に戻りますんで。帰るところをしっかりと見ていてくださいよ、旦那方」

「ああ、ご苦労さん」

ドアを閉めると、全身の力が一気に抜ける。成功した一ーメイヴェは額の汗を拭いて堂々と館の庭を過ぎ、一本道に出た。

振り返ると、大男がパンを片手に手を振り、馬面の兵はテーブルに肘をついて、窓からこちらを見ている。

メイヴェは顔を強張らせながら、微笑んで背を向けると、ブナの森に向かった。二人は追ってこなかった。

森を過ぎるとシラカバ並木の道に出た。左に進めば、町を通過して洞窟へ抜ける近道。まっすぐ進めば、死の妖精の森を通る迂回路。

メイヴェはふと思った一ーフィンガルにも死の妖精にも会わずにすむ道がある。このまま右に進めば、門だ。男の格好なら、門番にも怪しまれず、エニスレーンを出て行ける一ーそう、今ならなんとかなる。以前の自分なら、まちががなくこの道を選んでいただろうと思う。それなのに今はまったく足が向かないのだから、おかしいものだ。

結局町中を抜ける近道か、死の妖精の森を選ぶしかない。さあどっちにするの一ーメイヴェは迷ったが、ふと大嫌いなフィンガルの顔が脳裏に浮かび、簡単に決断を下すことができた。

一ー決めた、森にしよう。フィンガルの顔を見るくらいなら、死の妖精のほうがましってものだわ。

森ネズミが下生えをかすめたり、高い木の枝から木の実が落ちてきて葉音を立てるたび、心臓が飛び出しそうになったが、しばらくするとびくびくするのに飽きた。それにセレスティス様のご加護で、エリルアドにはヘビとかいう恐ろしい生き物はいないのだから、気味の悪い森でも最悪の状況はありえない。元気を出すことにした。

そして元気よく歩いていけば、森は人々が言うほど恐れる場所ではないと気づいた。静謐な森に古代エリルアド人は貴神を見た。貴神が棲まうのは、人間があまり足を踏み入れない緑の芳香漂うこんな森に違いない――エリルアドの姫君の散歩にふさわしく、メイヴェは古代の人々に思いを馳せ、自分が貴神に守られていることを感じながら、森を歩いた。

貴神のご加護のおかげで死の妖精には会わずにすみ、ロマンティシズムの最大の敵は引っかけ傷をつくる木の枝や皮膚をかぶれさせる草だけとなった。

日が西に傾いてくると、空気はしだいに冷えていき、肌寒くなってくる。火の気が恋しくなり始めた頃、メイヴェはふらつく脚で鍾乳洞にたどり着いた。その頃にはすでに体力の消耗を気力で支えきれなくなっており、貴神が棲もうと棲むまいと、二度とあの森を通り抜けるのはやめようと心に誓いながら、足を引きずった。

鍾乳洞の付近には、人の気配も踏み荒らした足跡もなかった。ダーモットは自分たちがここに隠れることくらい見当がついたはずなのに、捜しに来させなかったのだ。再び胸の奥が明るくなり、ダーモットと喧嘩をしなければよかったと後悔した。

火打石で火を熾してろうそくを灯し、鍾乳洞へと入る。暗く湿った岩のトンネルを慎重に歩き、約束の岩屋に着いた。

ディアンの名を呼んだが、声は岩屋にわんわんと反響するばかりで、返事はない。メイヴェは胸に湧き上がった真っ黒な不安をのみこみ、ディアンが見つめてくれるのを待つことにした。大丈夫よ、と自分に言い聞かせる――あの子は抜け目ないから、ちゃんとここへ来ているはずだ。まだ日が暮れたばかりだから、起きていないだけだろう。

濡れた岩に腰を下ろし、冷たい壁に寄りかかっていると、疲労と逃げのびた実感がどっと湧いてきた。足は棒のようで、つぶれたまめがじんと痛む。防寒用の毛織布もないところで眠るわけにはいかないという気持ちに反して、まぶたは落ちた。ほんの少しだけ、と自分を甘やかしたら、あっという間に寝入ってしまった。

「――起きろよ、メイヴェ。こんなところで寝てたら死ぬぞ」

体がすっかり冷えきった頃、メイヴェは揺り起こされた。闇の中でディアンの薄紫色の目がろうそくの炎よりも明るく光っている。メイヴェはほっとして笑った。

「よ、よかった。あ、あ、あんたも無事だったのね」

寒さで歯の根が合わなくなっている。ディアンはバカにするかわりにあわてて言った。

「外に出よう、早く」

筋肉痛と寒さで、メイヴェは岩壁につかまりながら転ぶように歩いた。

背の低いディアンは肩を貸すこともできない自分をもどかしく思っているようで、メイヴェが

歩きやすいようにろうそくで足元を照らしてくれた。

鍾乳洞を出て川岸に着くとすぐ、ディアンは薪を拾ってくると言って、駆け出していった。

日中垂れこめていた灰色の雲が嘘のように消え、ほぼ丸い銀色の月と星々が山を照らしている。九月にもなると、夜はぐっと冷えこみ、秋気で沈んでくる。

川音を聞いていると、いっそう寒さが感じられた。メイヴェが膝を立てて川原に座りこみ、自分の肩をさすっていると、ディアンが戻ってきた。一抱えの枯れ枝をメイヴェの前に置き、手ぎわよく焚き火をおこす。

息を吹きかけ炎が安定すると、二人は焚火を挟まず、肩を寄せるようにして座った。メイヴェは赤々と燃える炎に手をかざし、鍾乳洞と川の水で濡れた服を乾かす。炎がこれほどありがたいと思えたことはなく、しだいに心まで温まっていく。

「焚き火ありがとう、ディアン」

感謝の気持ちがメイヴェの口から出た。しかしディアンの声は沈んでいる。

「……礼なんていいよ」

「相変わらずひねくれてるわね、あんた。そうだわ、服借りたわよ」

「うん……それもかまわないけど……その、メイヴェの髪……ごめん」

メイヴェは革の帽子の鍔を下に引っ張った。

「だって仕方がなかったんだもの。男の格好をしていても、長い髪だったら女だってばれちゃうでしょ。わたしは往生際が悪いから、逃げるためならなんでもするの」

「うん」

「短い髪が似合うなんて言ったらひっぱたくわよ。これは仮の姿なんだから」

「うん、ごめん」

「なんで謝るの、あんたのせいじゃないのに。そんなことを謝るくらいなら、服をきちんと洗濯しておいてよ。臭って気持ち悪いし、恥をかかされたわ」

「うん」

何を言ってもディアンはうなだれ、頷くばかりだった。詫びのつもりか炎の中に次々と薪を入れ、焚火はごうごうと燃え始める。

メイヴェも陽気にふるまったものの、失った髪を忘れられず、黙っていると落ちこんできた。二人のあいだにしょんぼりした空気が流れる。

こんなときに静かだとますます落ちこんでしまう。メイヴェはディアンの華奢な肩を抱いて、明るく命じた。

「何か話をしなさい」

「……話したいことなんか、何もないよ」

「あんた、少し人の命令に素直に従うことを覚えたほうがいいわ。エリルアド人はね、お話が大好きなの。なんでもいいから、話をしなさい。あんたの一族に伝わる伝説がいいわ」

ディアンは頭を振った。

「俺の一族の話はだめ」

「どうして？ あるんでしょう？」

ディアンは答えなかった。ふだんのメイヴェは隠されると燃えるたちだが、今はむりやり聞きだす気力はない。

「じゃあルーフィスと話をするでしょ。それと同じことを話して」

ディアンは少し考えたあと、口を開いた。

「俺たちはあまり話をしないんだ。昼間俺が寝ているときにルーフィスが起きていて、夜はその逆だろ。顔を合わせる機会なんてほとんどない。だからお互い平和に過ごせてるんだ」

「何か話したくなったりしないの？」

「女と違って、男はおしゃべりじゃないんだよ、たぶん」

「あんたが男ねえ……まあ、いいわ。じゃあ、あんたたちはどこから来たの？」

「クロネアっていう町。昔鉱山があったところで、エニスレーンよりちょっと大きいよ」

「どんなところを旅して来たの？」

「さあ、よく覚えていないな。当てもなかったし。ただ走らせてきただけだよ」

「ここを出たらどこへ行くの？」

「さあね」

「わたしは生まれてから一度もエニスレーンを出たことがないの。旅するってどんなふう？」

メイヴェはディアンの端整な横顔を見つめた。長い睫(まつげ)の影が落ちて、薄紫色の瞳に映る虹彩をやわらげている。

「ルーフィスと一緒に海を見に行ったら」

「海？　ほんと？　わたしは話だけしか聞いたことがないの。エニスレーンには川と湖しかないんだもの。海って本当にあるの？」

「うん」

「ねえ、海の果てに貴神の棲むエーレがあるのよね。わたし、行ってみたいとずっと思ってるの。あんた、行ったことある？」

ディアンの瞳がわずかに開かれたように見えた。

「ないよ」

「行き方知らない？」

「知るわけないだろ」

「本当に？　だってあそこは不老不死の国でしょ。あんただったら場所を知ってるかと思ったのに」

「だから俺も二年前は人間だったんだってば」

ディアンはうんざりしたように言ってから、「それじゃ海の話をするよ」と続けた。エリルアド人が話と言ったら物語を指すのだが、今は旅の話でもいいから、誰かの声を聞いていたい気分だったので、メイヴェは頷いた。

「海はとにかく大きくて、果てがなく、いろんな表情を見せてくれるんだ。切り立った崖に、岩場、砂浜、さざなみだったり、荒れていたり。俺は波の音がゆったりしているときがいちばん好きで、聞いていると気持ちが落ち着いてくる。それから匂いがすごいね。潮を含んだ風が吹くと、陸のどこもかしこも海の匂いになる」

「ふうん」

「旅に出てすぐ、ルーフィスが海を見たいって言い出したんだ。俺たちの住んでいたクロネアはやっぱり内陸で、海はなかったんだけど、ルーフィスはベラント国からこの国へ渡ってくるとき見たって言うし、俺は昔海の近くに住んでいたことがあったから、懐かしくてね。いよいよ海が見えたときには、二人とも砂浜に駆け出した。靴なんて放り出して、裸足でやわらかい砂を踏むと、すごくわくわくした。白い月光が暗い海面に映ってゆらゆらと揺れていて、きれいだった。俺は服も全部脱いじゃって、水の中に飛びこんだ。うしろを振り向いたら、ルーフィスは服を着たまま、海に入ってきた。泳げないのにだよ。あいつはふだんはそういう冒険をしないのに、どんどん進んで、腰まで浸かっているのに、まだ先に行くんだ。ルーフィスは流されるように俺から離れていったから、俺は戻ってこいって怒鳴った。でもルーフィスは海水で顔なんか洗い始めちゃって、大丈夫だよ、なんて言いながら手を振り返してきた。僕はここでなら泳げそうな気がする、どこまでも行けそうな気がするってさ。海っていうのはとても深いし、波があるから、泳げない奴には危険な場所だ。だからこっちは心配してるのに、広い海を見て、気持ちまで大きくなっちゃったみたいで、いつものルーフィスらしくなかった」

メイヴェにもその光景が見えるような気がして、笑った。

「溺れたんでしょ？」

「うん」

ディアンも笑った。

「ルーフィスは突然深いところに足を踏み入れたらしく、すぐに溺れた。俺は、そこで待ってろって怒鳴って、急いで泳いで助けにいった。肩にルーフィスをつかまらせて、岸まで泳ぐ羽目になったよ。いっつもこうなんだ。あいつはもがいたり暴れたりしなかったから、泳ぐのは楽だったけど、俺が吸血魔じゃなかったら、二人とも死んでたよ。それなのにルーフィスは当然のような顔をして助けられてる。これもいつものことだけどさ。しかも浜に上がるなり、『海の水は塩辛くてまずいから、君は飲まないほうがいい』」

二人は同時に吹き出した。ディアンは自分の話に機嫌をよくしているようだった。ここが川岸ではなく砂浜で、目の前を流れているのはコリグ川ではなく広い海で、波音を聞きながら話をしているみたいだ。

「ルーフィスと俺の好みはたいてい合わないんだよ、俺が人間だったときからさ。すっきりと晴れた青空を見て、俺がこういうの好きだって言うだろ。するとあいつは、『いや、雲があったほうが風情があっていい』って答えるんだ。風情だのなんだの、何ごとにも意味をつけ足したがる。俺は思ったよ。風情ってなんだよ、ベラント人はやっぱり気どってる、雲なんて体に悪いだけじゃないかってね。でも海は二人とも好きで、そんなことは初めてだった。ルーフィスは昼もずっと砂浜に座って、海を見ていたらしい。昼の海は水の色がまるで違って、深い青で空みたいに広いけど、きらきらと輝くんだ。いつまで見ていても飽きないって――俺が夜起きると、そんな話をした」

空と同じくらい大きな青。それなら視界は青一色。いったいどんなところだろう。ちょっと想像がつかない――メイヴェは海を見たくなくなった。砂浜を駆けて、潮の匂いを嗅いでみたい。この

町を出れば、それも叶う。

「早くルーフィスを取り戻して、わたしも海を見に行きたいわ」

ディアンは微笑んだ。静寂を追い払おうと話を命じたのだが、話しているところの世界には二人しかいないような気になってきた。しかし、それは寂しいことではなく、目の前に誰かを与えてくださった神に感謝したい気持ちにさせられる――わたしは独りじゃない――広間で大勢の家臣にかしずかれていたときより、独りではないのだと強く感じられた。

「あんたって素直なところもあるのね」

メイヴェエが感心して優しく言うと、ディアンは眉をつり上げた。

「俺のこと、わかったような言い方するなよ。そういうのって気分悪い。メイヴェエなんか何も知らないくせに」

「あら、あんたよりはわかってるわよ。本当はルーフィスがお金のためになんでもするような人間になってほしくないくせに。そうでしょ？ だから護衛役だけだなんて言ったんでしょ？」

「うるさい」

「これは当たってるはずよ。だってあんたと話してたら、わたしまでルーフィスには今のままでいてほしいって思い始めちゃったんだもの。あいつは聖人なんだかただのバカなんだかわからないくらいがいいのかもね。わたし、ベラント人が大嫌いだったんだけど、ルーフィスに会ってちょっと変わったわ。ほんのちょっとだけどね」

ディアンは逆らわず耳を傾けていた。

「たぶんあんたは聖人のルーフィスを必要としてるのよ。吸血魔になって生命のバランスが崩れたから……セレス教は違うけどね、エリルアドではそう考えるのよ。あんたの中には恐ろしいものが詰まっているから、聖人が恋しくなるのね」

川から澄んだ風が吹いてきて、二人を清めるように撫でる。メイヴェエの声は覚えず優しくなった。

「ルーフィスは罪を犯さなかったわ。盗まなかったの。ドアを開けただけよ」

ディアンは何も言わなかった。メイヴェエは訊ねた。

「ルーフィスが好きなんでしょ？」

返事はなかったが、わざわざ確かめる必要もない。今では少しディアンを理解できるのだ――この子が吸血魔であることに負い目を感じ、素直にふるまえないことを。本当はルーフィスが大好きなのだということを。

メイヴェエは言った。

「ルーフィスがあんたに血をあげるのは、見張るための取引じゃなくて、あんたのことが好きだからよ、たぶん」

メイヴェエは素直になれないディアンが機嫌を損ねるのを覚悟して言ってみたのだが、ディアンは怒り出すかわりに、考え深げに首を傾げた。

「そうかなあ」

「そうよ」

ディアンのあまりに真剣な様子がおかしくて、メイヴェエはくすくすと笑った。

「とりあえずルーフィスはいいい奴よ。それにあいつがあんたを大切にしていることに嘘はないわよ。それはわたしが保証してあげる」

ルーフィスを誉めていたら自分の機嫌がよくなってきたので、メイヴェは続けた。

「血を飲ませてあげてもいいわよ」

「見張りはいいってば」

「見張りじゃなくて、あんたが好きだからよ」

ディアンは少し沈黙してから怪訝そうに訊いた。

「メイヴェはおかしいよ。吸血魔に襲われて平気な人間なんていなかった。俺のこと怖くないの？」

「怖くないわよ」

メイヴェは笑った。

「吸血魔のあんたはなんでもできるわ。力のあるものは役に立つから好きよ」

「メイヴェらしいや」

ディアンは親しげな苦笑を浮かべた。

メイヴェが帽子を取ると、短い髪が現れたが、ディアンはもう何も言わなかった。メイヴェが首を横に曲げると、優しい顔のディアンが迫ってくる。メイヴェは肩を抱かれ、そっと目を閉じた。喉に牙を突き立てられ、鋭い痛みが走る。自分の血がディアンの喉を流れ落ちる音だけが耳をくすぐった。

ディアンはすぐに離れた。メイヴェが喉を押さえると、手に少しだけ血がついた。めまいもなく気絶もせず、喉がつまった感じがするだけで終わった。加減してくれたのだろう。

「……ルーフィスはどうしているかしらね」

メイヴェは独り言のようにつぶやいた。新月のたび、ディアンはこんなふうによく、ルーフィスから血をもらっていたのだろう。だからルーフィスは死なずに、ディアンと一緒に旅していたのだ。

しかしそのルーフィスは今、牢獄にいる。今頃はきっと、自分の命よりも、このまま死んだら誰がディアンに血を与えるのだろうと心配しているはずだ。彼はそういう人間だ。信仰に基づいた友情でも、決して他人を裏切らない。

ルーフィスはまちがいなく神に愛された人だ。なんの罪も犯していない。吊るされるべき罪人ではない——城へ忍びこむときも、わたしを守るように進んでくれた。彼はすべてを知っていた——わたしが彼を囚にして、逃げてしまうことを。それでも自らドアを開け、振り向かなかった。

メイヴェは自分が犯した罪に初めて向き合った。

神様——わたしはルーフィスを裏切って、城に置き去りにしました。そのせいで彼は捕まり、牢獄に入れられています。ひょっとすると殺されてしまうかもしれません。すべてわたしがしたことです——。

「……ごめんね、ディアン」

言葉にすると、涙がこぼれ落ちる。メイヴェがディアンの手を握りしめると、ディアンは慌

てた。

「な、なんで泣くんだよ！ 痛かったの？」

「違うの。ごめんね」

「泣くなよ。なんで泣いてるのかわからないけど……苦手なんだよ、女の子に泣かれるのはさ」

「本当はわたしも泣くのは嫌いなものよ。でも止まらないの……ごめんなさい。わたしがいけなかったの。ごめんなさい」

言いながら、よけいに涙があふれた。メイヴェは立てた自分の膝に顔をうずめて泣いた。ディアンの小さな手がメイヴェの帽子の上を恐る恐る撫でる。

「俺も昔はあまり泣きたくないって思ってたよ。でも今は吸血魔だからさ……そんなことも思わなくなった。だって涙が出なくなったからね」

メイヴェはしゃくり上げながら、顔を上げた。

「きゅ、吸血魔は涙が出ないの？」

「うん」

「べ、便利ね」

「まあね。吸血魔は万能さ」

ディアンの冗談のおかげで、メイヴェは泣き笑いになった。

「吸血魔が万能なら、必ずルーフィスを助け出せるわね」

「うん。絶対助け出すよ。そして三人で旅をしよう」

「ええ」

どうやって、とはお互い訊ねなかった。ダーモットは言っていた――こちらは多勢に無勢、物資も隠れる場所もない、人質を失えば捕まると。勝つには相手より先に布陣することだとも言っていたが、月はすでに高く昇っており、もう手遅れだった。三人が助かる望みはほとんどない。それでもメイヴェはディアンの細い腕に抱きしめられると、不安が消えていくのを感じた。

しばらくしてディアンがふいに口を開く。

「ねえ、アレシアって何？」

「アレシア？ 国の名前よ。エニスレーンの隣国。なによ、いきなり」

「隣国？」

ディアンは顔を曇らせた。

「アレシアってどういう国なの？」

「どういうって言われてもね……コリグ川西岸下流の国よ」

「ふうん……ねえ、地図に描いてよ」

メイヴェはディアンから離れ、枯れ枝をとって、川原の上に縦に置いた。

「これがコリグ川でしょ」

さらに、枝の左右に二つずつ石を置く。

「西岸上流がエニスレーン、下流がアレシアよ。ちなみに、東岸上流はトゥルベク、下流はブロウ。コリグ川は西部への玄関口に当たるの。ここより東側はほとんどベラント人に征服されているし、現在ブロウはトゥルベク領になっちゃったから、コリグ川東岸から向こうはベラント寄

りの土地ってわけ」

「で、この夏トゥルベクがコリグ川を乗り越えて、エニスレーンを侵略したってわけか」

「そうよ。ドムナルは平和を約束しているけど、あの腹黒おやじの考えていることよ、どうだかわかったもんじゃないわ。で、アレシアがどうかしたの？」

「ここに来る途中、また倉庫に荷物を運びこんでいる男たちを見かけたんだ。そいつらがアレシアって言ってたのが聞こえたからさ。ひょっとすると、腹黒おやじはエニスレーン側からアレシアに攻めこむつもりなんじゃないの？」

「アレシアに？」

メイヴェは驚いて言った。

「可能性はあるかもしれないけど……アレシアは強国よ。エリルアド小王の土地とはいえ、大きな貿易港を持っているから、けっこう栄えてるわ。そう簡単に落とされないわよ」

ディアンはメイヴェの作った枯れ枝と小石の地図をじっと見つめて言った。

「……でもさ、エニスレーンとブロウから一気に攻めこんだらどう？ 挟み撃ちだよな？」

「……そうね。まあ、それなら落ちるかもしれないけど……」

メイヴェは胸騒ぎを覚えたが、すぐに先ほどの館での見張り兵の話を思い出してつけ加える。

「じつはわたしも、ベラント兵がトゥルベク領に集まってきてるって話を聞いたのよ。だからそのときは戦を起こすのだろうかと思ったんだけど……やっぱり無理だと思う。もしドムナルがアレシアを攻めたら、他の小王たちだって次はうちの領土かもしれないって考えるだろうから、西部中が団結して叩きに来る。そうなったらいくらドムナルでも勝ち目はないわ」

ディアンはメイヴェの言葉を聞き、再び地図に目を落とした。しばらく考えこんでいたが、やがて地面の上の枯れ枝をつついて、ぽつりと呟く。

「そうかなあ」

「え？」

「腹黒おやじの狙いはコリグ川なんじゃない？ アレシアを押しさえれば、コリグ川流域は自由に使える。海からベラント海軍を引き入れて、一気に内陸に入れる」

メイヴェは驚きで声も出なかった。それならありうることだ。父は言っていなかったか——ドムナルは目的のためなら手段を選ばない野心家だ、と。腹黒おやじの目的は西部の平和ではなく、ベラント海軍の力を借りた西部征服だと考えれば、すべての辻褄が合う。もしそれが真実なら——これからエニスレーンは戦場になる。そして領民を苦しめる戦が始まる。

戦は避けなければならない——しかし今のわたしに何ができるだろう、とメイヴェは思った。地位も財産もなく、みすばらしい館で暮らしている自分では、戦を食い止められそうもない。小王の座から追われたことを、今ほど歯がゆいと思ったことはなかった。

それにしても——と思いながら、メイヴェはまじまじとディアンを見つめた。

「……あんたって悪どいことを思いつくのね」

ディアンの眉間に皺が寄る。

「どうしてそうなるんだよ？ 思いついたのは俺じゃなくて、腹黒おやじだって話だろ！ それに悪どいだなんて、メイヴェにだけは言われたくないね！」

ディアンが憤然として言い返し、だけと強調されたメイヴェもむっとした。しばらく二人は無言でお互いを睨み合っていたが、やがてメイヴェのほうから折れた。

「今はルーフィスを助けに行きましょう」

「うん」

ディアンはめずらしく素直に頷き、立ち上がる。

とにかくこの子にはルーフィスの話を持ち出しておけばいいのだ、わたしもディアンの扱いに慣れてきたものね、とメイヴェはひそかに自分自身の成長を讃えた。

処刑場での戦い

まもなくメイヴェはディアンと別れ、一人山を下りて処刑場へ急いだ。男の格好で闇に紛れたため、途中誰かに呼び止められることもなく、無事町も抜ける。

最後の角を曲がると、場違いなほど明るく照らされている処刑場が遠くに浮かび上がって見えた。昼間のように明るいのに、話し声はまったく聞こえない。掌に汗がじっとりとしじんでくる。

橋を渡り、処刑場に足を踏み入れると、舞台はすでに調っていた。

明るさの源は惜しみなく用意された炎だった。七つの篝火と兵たちが掲げている松明は、魔物を寄せつけないよう、そこにだけ昇らせた太陽のようだった。火の粉をはぜさせ赤々と燃え上がる炎に、メイヴェはダーモットの決意を感じた。

左手中央の絞首台には新しい輪縄が下がっており、梯子が立てかけられている。メイヴェは訝った――人質交換に輪縄は必要ないはずだ。ダーモットはわたしたちをどうするつもりだろう。

絞首台の前面を七人の歩兵が半円に囲み、長剣をかまえている。さらにその手前には、矢をつがえた五人の弓兵がこちらを狙う。

絞首台の真下には三人の男――ルーフィスと彼を見張るフィンガル、そしてダーモットが立っていた。

ダーモットを含めた兵士たちは全員、首に銀の十字架をかけている。

メイヴェはルーフィスの姿に目をみはった。ルーフィスは両手をうしろで縛られ、さらに胴と腕にも縄を巻かれている。拷問にかけられたようで、左の頬と両目が青黒く腫れ、背中を丸めて上体を揺らしながら、どうにか立っているという状態だった。

生きていてくれたという安堵、ルーフィスの傷への心配、そして彼をひどい目に遭わせた自分への罪悪感が一気にメイヴェに押し寄せる。必ず助けると心の中で誓った。

遠くで終鐘が鳴った。鳴り終わると、ダーモットが兵たちのうしろから進み出て、メイヴェの目の前に立ち、気色ばんだ声で言った。

「その格好はどうしたんだ、メイヴェ」

「汚れていても勘弁してちょうだい。他に着替えがなかったんだから」

「汚れのことを言ってるんじゃない！ 男の格好をして、髪まで切って……俺から逃げるために、そこまでするのか？ そんなに俺が嫌いなのか！」

ダーモットが怒り出したので、メイヴェは冷静さをとりつくろった。

「約束の時間よ。わたしと引き換えにルーフィスを返してくれるわね」

「その前に訊きたいことがある――ディアンはどこだ？」

「どこだっていいじゃない。人質はわたしだけのはずよ。それとも髪の短い娘じゃ引き換える気はないとでも言うつもり？」

「髪の話は言うなよ、二度とな」

ダーモットは怒りで声を震わせた。

「おまえにはもちろん城へ戻ってもらうが、ベラント人はディアンに直接渡したい。ついでに門

まで送って、町を出て行くところを見届けたいからな。ディアンはどこにいる？」

メイヴェエの胸が騒いだ——何かが引っかかる。ダーモットはディアンにこだわりすぎている気がする。

「知らないわ」

「本当に知らないのか？」

「そうよ。約束はわたしとルーフィスの交換で、ディアンは関係ないでしょ。まずはルーフィスを橋まで歩かせて、自由にさせてあげて。そうしたらわたしは城へ行くわ」

「だめだ。ベラント人はディアンに渡すから、あの子を呼ぶんだ。どうせそこらに隠れているんだらう？」

メイヴェエは口をつぐんだ。

先にルーフィスを解放してもらい、メイヴェエはディアンを呼ぶ。それを合図に、隠れていたディアンが奇襲攻撃をかける。そのすきに、メイヴェエがルーフィスを連れて先に逃げる。ディアンはダーモットたちの足止めをしてから、あとを追う——そういう手はずになっているのだ。

二人で話し合ったが、他にいい手は思いつかなかった。ダーモット相手では一か八かの強行突破しかないというのが、知恵を絞った結果である。

メイヴェエはいやな予感を覚えて、ダーモットに訊いた。いことがあるるやるなるから、から、えだ。

「どうしてそんなにディアンにこだわるの？ あの子をどうするつもり？」

「殺す」

ダーモットはきっぱりと言った。

「ディアンは領民を一人殺している。湖で血を抜かれた死体が見つかった。父上はそのことを非常に憂慮している……それに、ディアンを捕らえないと、おまえの身が危険な状況になったんだ」

「……危険な状況ってどういうこと？」

「……父上はおまえが魔物と契約したのではないかと疑っている」

「なんですって？」

驚いているメイヴェエに向かって、ダーモットは切迫した表情で一步踏み出した。

「おまえの口からディアンの居場所を白状してほしいんだ。そうすれば、おまえが魔女ではないという証明になるから、俺から父上にとりなしてやれる。おまえを助けるにはそれしか方法がない」

ダーモットは諭すように続けた。

「吸血魔を野放しにはしておけないんだ、わかってくれ。かわいい顔をしているが、しょせんあいつは魔物だ。さあ、言ってくれ。ディアンはどこだ？」

「……言わないわ」

「言うんだ！ おまえの命がかかっているんだぞ！」

「……だめよ」

「いいかげんにしろ、メイヴェエ！」

「だって……だって、わたしはこれ以上あの子を裏切れないんだもの」

メイヴェは頭を振って、あとずさった。ダーモットはメイヴェに鋭い視線を投げてから、意を決したように叫んだ。

「メイヴェを捕らえろ！」

ダーモットが手を上げると、メイヴェに近い、川岸寄りの歩兵が二人うしろに回りこむ。

メイヴェは声を張り上げた。

「約束が違うわ、ダーモット！ わたしはルーフィスと交換のはずでしょ！」

「おまえが強情を張っているからだ！ おまえを助けるにはディアンを殺すしかないと言っただろう！」

メイヴェは二人の兵に右とうしろから剣を突きつけられた。

「ディアン、出てこい！ どこかで見ているんだろう！」

ダーモットは長剣を手に大声を上げたが、あたりはしんとしたままだった。メイヴェはディアンを呼ばなかった——自分が呼ぶまでディアンは決して出てこないし、今呼ぶわけにはいかない。ルーフィスが捕らえられたままなのに、自分が助かるためにディアンを呼んでしまったら、ルーフィスをまた見殺しにすることになる。

「わたしを捕まえたってディアンは出てこないわよ」

メイヴェが冷ややかに言うと、ダーモットはさらに冷たい口調で短く命じた。

「では、ベラント人を吊るせ」

歩兵の一人がルーフィスへ、もう一人が絞首台の梯子に駆け寄った。

メイヴェが叫ぶ。

「何するの！」

走ろうとしたが、両脇の歩兵に腕をつかまれ、押さえられた。

ルーフィスの胴縄には一本の長い縄が繋がれている。梯子を上った歩兵に縄の端が投げられ、歩兵は絞首台の上辺に縄を引っかけた。歩兵が縄の端を持ち、強く引きながら梯子を下り始めると、かわりにルーフィスの体が宙に引き上げられていく。

メイヴェは悲鳴を上げた。

「やめて！」

「メイヴェを馬に乗せろ」

ダーモットの命令で、メイヴェは両腕を歩兵につかまれ、馬のほうへ引きずられた。宙に浮いたルーフィスは次第に輪縄に近づき、足を揺らす。

「やめさせて、ダーモット！ お願いよ！」

しかしダーモットは周囲に警戒の視線を走らせ、中止の命令を下さなかった。

メイヴェは泣きながら叫ぶ。

「だめ、やめて！ 下ろして！ ルーフィスは悪くないの！ 殺さないで！」

「早くディアンを呼べ！ あのときみたいに、俺ではなくディアンに助けを求めてみろ！」

「何を言ってるのよ！ ディアンに嫉妬してるの？ わたしが好きなのはあなたよ、わかってるでしょ！ 早くルーフィスを下ろして！」

「残念だが、俺はもうおまえの言葉を信じられないんだよ」

メイヴェは頭から冷水を浴びたように目が覚めた。自分が想像していたよりずっとひどく、ダーモットの心を傷つけていたことによく気づいた。

梯子の上の歩兵が、引いた胴縄の端を絞首台の柱に結び、ルーフィスは宙に固定された。頭部はすでに引き結びにした輪縄に届いている。

ルーフィスの顔がこちらを向くのが見えた――メイヴェを恨んでいる顔ではなかった。顔を腫らしていても、澄んだ水面のような瞳をしている。

首に輪縄が迫り、ルーフィスは首を左右に振って抵抗したが、声は上げなかった。自分が呼べば、ディアンが助けに来てしまうことに気づいている――だからディアンを守るために口をしっかりと閉じているのだ。

ディアンが言っていたとおり、ルーフィスは正真正銘の大馬鹿者だ。口を割るところか、ディアンを売って、命乞いをする知恵もない。

メイヴェは身をよじって、ルーフィスのかわりに叫んだ。

「ディアン！ ルーフィスを助けて、ディアン！」

川面が跳ね上がった。上流から入って泳ぎ、そのまま水中に身をひそめていたディアンが、水しぶきを上げて川岸に下り立つ。小さな影が水を滴らせながら絞首台の後方に走り、地面を蹴る。影が跳び、絞首台の上辺にふわりとのった。

「俺はここだよ、ダーモット」

ディアンは梯子ごと歩兵を突き倒した。歩兵は梯子の下敷きになって草地に倒れる。

「ディアン！」

メイヴェはもがきながら叫んだが、両腕をつかまれ、逃げることはできない。

「火矢を放て！」

ダーモットがさっと手を上げた。

歩兵たちは下がり、弓兵たちがつがえた矢に松明の炎をともした。弓兵はいっせいに燃える矢を絞首台めがけて射る。矢は燃える流星雨のように次々と飛ぶ。ディアンの背中に三本、左腕に一本の矢が突き刺さったが、濡れた衣服のおかげで、炎はたちまち消えた。宙吊りのルーフィスの太腿にも矢が刺さり、ルーフィスは呻く。

ディアンが短剣で縄を切ると、ルーフィスは地面に落下した。ディアンも続いて絞首台から飛び下りる。

矢の雨からルーフィスをかばうようにしながら、ディアンは濡れた自分の上着を脱いだ。ルーフィスの矢を抜き、燃える太腿に上着をかぶせて火を消す。ルーフィスは気を失ってしまったようで、動かない。

ダーモットは再び手を上げて、叫んだ。

「やめ！ 剣を持て！」

弓兵が下がり、五人の歩兵が間合いをつめていく。射られた矢で針山のようになったディアンがゆらりと立ち上がった。真っ赤な唇が嗤って、ルーフィスを守るようにかまえながら、自分の体に突き立つ矢を無造作に抜き捨てた。

一人が剣を振り上げ、襲いかかってくる。ディアンは身を縮めてかわすと、そのまま歩兵の腹に頭ごと突っこんだ。十字架がディアンの頭にふれ、黒髪から異臭と煙が立ちのぼる。歩兵が鋭い悲鳴を上げ、腹を押さえて尻から倒れた。腹に当てた手の隙間から血が流れている。ディアンは口元を赤く染めていた。

歩兵四人が長剣を鈍く光らせ、ディアンにじりじりと迫る。背後からは、ダーモットとフィンガルがにじり寄って、ディアンとルーフィスは完全に囲まれてしまった。

ダーモットが大声で命じた。

「左胸を狙うか、首をとれ！ 相手は吸血魔だぞ！ 逃がすな！」

二人の歩兵が同時に動いた。左と右。

ディアンは地面を蹴って、左の男の頭部に跳びかかる。十字架が再びディアンの腕の皮膚を焦がしたが、ひるまず首をひねる。骨の折れる鈍い音が処刑場に響く。倒れる男の長剣を奪い、右の男の剣をかわし、男の胸を斜めに斬る。殺意のこもった鮮やかな動きだった。男が篝火にぶつかって倒れ、火の粉が舞い上がる。

ディアンは返り血を浴び、唇の血をなめた。

「くたばれ！ 皆殺しにしてやる！」

今のディアンは魔物でしかない。メイヴェは息をのんだ。ルーフィスとの約束を公然と破ってしまったときから、血の匂いに支配され、自分の身を傷つける十字架すら気にもとめず、どんどん正気を失っていくように思われた。

五人の弓兵が武器を剣に持ち替え、ディアンに近づく。これで残りの兵は九人。じりじりと輪を縮めてくる。

今度はディアンが先に動いた。真ん中に残っていた兵に向かって走る。速い。一振りで髭に覆われた首が飛ぶ。

背後の兵がディアンの背中に剣を刺したが、急所を外した。ディアンは剣を刺されたまま振り向いて、先ほど倒れた篝火の上に兵を突き倒す。燃え上がった兵は悲鳴を上げて川へ飛びこんだ。

二人の兵がすきを見て、ルーフィスを奪い返そうと狙い、走り出した。ディアンは十分二人を引きつけてさっと飛び退き、兵たちは相打ちとなって、鮮血を噴き上がらせる。

圧倒的な強さのうえ、剣や矢を刺されたまま動き回る不死身の姿に、兵の一人が呟いた。

「魔物だ……本物の魔物だ……死者に呼ばれたんだ」

ディアンはけたたましく嗤った。

「そうだよ、俺は魔物だ！ 恨みを胸に死んだ者たちに呼ばれたんだ！ 俺にふれた者には呪いをかけてやる！」

残った二人の兵の腰が退け始める。ダーモットが大声を上げた。

「あれは嘘だ！ 呪いなんかかからないぞ！ こっちだ、ディアン！ 俺が相手になってやる！」

ディアンが血まみれの顔を向けると、ダーモットは草の上に唾を吐いた。

「化け物が！」

ディアンは瞳に憎悪の炎を燃やし、背中に刺さっていた長剣を抜いて、ダーモットめがけて投げた。ダーモットは横に跳んでかわし、ディアンに向かって剣を振り下ろす。ディアンは宙に高く跳び、再び絞首台の上辺にのった。

ダーモットがディアンを見上げて怒鳴った。

「俺の命はやらないぞ！ 来いよ、しとめてやる！」

「しとめる？」

ディアンは赤い唇を歪めた。

「そうだね、十年後じゃなく、今殺してやるよ。吸血魔は血を吸うほど魔力が増すんだ。十年後だったら、指を鳴らしただけで、あんたはおしまいだ。それじゃつまらないからね」

「下りてこい！ 絞首台ごと切り倒すぞ！」

メイヴェエは二人を見て恐ろしくなった――どちらにも死んでほしくない。泣きながら叫んだ。

「二人ともやめて！」

しかしメイヴェエの制止は無視された。

ディアンが飛び下り、ダーモットは首の十字架を引きちぎってディアンに投げつける。フィンガルが斬った腹の傷に当たり、ディアンが悲鳴を上げた。体を二つに折り、腹を押さえてよろめく。ダーモットが剣を振り上げ、ディアンに躍りかかろうとする。

そのときフィンガルが突然メイヴェエのほうを振り向いた。殺意のこもった目でひたとメイヴェエを捉え、剣を光らせながら、こちらに走ってくる。

メイヴェエは悲鳴を上げた。

ダーモットは声のほうを向く。

「メイヴェエ！……よせ、フィンガル！」

ディアンは注意のそれたダーモットから、長剣を奪った。そのままフィンガルに向かって投げると、剣は矢のように水平に飛び、フィンガルの肩を背後から貫く。

「フィンガル！」

ダーモットが叫ぶのと同時に、フィンガルは前方へ倒れた。ディアンはフィンガルのほうへ駆け出そうとしたダーモットの足を払い、やすやすと倒すと、足を首元にのせる。

「それじゃ、あんたの血をもらおうか。このあいだみたいに手加減はしないよ。死ぬまで吸い尽くすからね」

「……好きなようにしろ」

喉を押さえられたダーモットは、苦しげに喘いだ。

「やめて！」

両腕をつかんでいた二人の兵を振りほどき、メイヴェエがディアンとダーモットのほうに走り出す。残った兵士たちはもはや止めようとはしなかった。

今のディアンは尋常じゃない――でも、絶対にダーモットを殺させたりはしない――メイヴェエはディアンを興奮させないように、二人から距離をとったところで足を緩めた。

「今度こそ本当に取引をしましょう、ダーモット」

メイヴェエは穏やかに言って、ゆっくりと二人に近づいていく。

「わたしたちを自由にして。そうしてくれれば、あなたは助かるわ」

「……メイヴェ……だめだ」

ダーモットはメイヴェをまっすぐ見て、弱々しく言った。ディアンはダーモットの首を押さえている足に力をこめ、ダーモットは呻く。メイヴェは息をのみ、瞳の虹彩をぎらぎらさせているディアンに優しく頼んだ。

「ダーモットをはなして、ディアン。お願いよ」

「やだよ。こいつは俺の獲物だ。ルーフィスにひどいことをしたんだから」

「お願い、ディアン。ダーモットを殺さないで」

メイヴェがくり返し頼むと、ディアンは叱られた子供のようにしおれた視線をメイヴェエに向けた。メイヴェはもう一度頼んだ。

「お願い、ディアン」

ディアンはダーモットの首からそっと足を上げ、その場に根を下ろしたように突っ立った。

ダーモットは喉を押さえ、上体を起こしてむせている。メイヴェはダーモットの咳がおさまるよう、背中をさすってやった。ダーモットは目をしばたたかせながら、メイヴェを見た。メイヴェは微笑む。

「餞別に馬を一頭ちょうだい。それから門を通れるよう、門番に命じておいて。わたしたちは明日の朝までにエニスレーンを出て行くわ」

ダーモットは黙ったまま、頭を横に振る。

メイヴェは静かに言った。

「さよなら、ダーモット」

ダーモットは顔を歪めて力なく呟いた。

「……俺はおまえを幸せにしてやりたかったんだよ、メイヴェ」

メイヴェもまた頭を振り、血でぬめるディアンの手をとって、ダーモットに背を向けた。

これ以上ダーモットの沈んだ顔を見ていられなかった。自信家で勇猛果敢といわれるダーモットの姿とは思えない。愛する人を悲しませるのは、その人から怒られることより何倍も心が痛むのだと、メイヴェはようやく知った。泣き出しそうになるのを堪えて、振り向く。

「……最後に一つだけ訊きたいことがあるの……あなたは戦は起こさないと言ったわよね？ あれは嘘？ またわたしを裏切ったわけじゃないわよね？」

「なんの話だ、メイヴェ？」

「あなたの父親は戦をたくらんでる……このエニスレーンを戦場にするつもりよ。そうでしょ？」

ダーモットは一瞬眉をひそめたが、メイヴェをまっすぐに見据えて言った。

「そんな話は知らない」

それから宣誓するように続ける。

「だが、もし父上が戦を起こすなら、俺は命がけで止めてみせる。だからおまえにも……」

ダーモットの言葉を遮るように、メイヴェは強く頭を振り、背を向けた。それからようやく寂しい安堵の息を洩らす。大丈夫——ダーモットは信じられる。彼ならエニスレーンを守ってく

れる。すべてを任せよう――今のわたしにできることはないのだから。

ダーモットは消え入りそうな声で帰城命令を出した。一刻も早く手当ての必要なフィンガルと、臆病風に吹かれた生き残りの兵たちを率いて立ち去った。

振り払われた決意

処刑場には赤黒い血だまりが点在し、生首や折れた矢が転がっている。篝火の燃える臭いと血の臭いの混じり合う中、メイヴェ、ディアン、ルーフィスの三人、そして町を出るための馬が一頭残されていた。

ダーモットたちが引き上げると、ディアンは張りつめた糸が切れたように、地面に膝をついた。全身をがくがくと震わせている。

メイヴェは絞首台の下で失神しているルーフィスに近づき、縄を切った。ルーフィスはようやく体を解放され、まぶたがわずかに動いたが、目は覚まさない。

メイヴェはディアンのそばに行き、かがんで、ふるえている肩に手を置いた。

「ルーフィスは無事よ。まだ気を失ってるけど」

ディアンは焦点の定まらない目を向けた。

「助かったの？」

「ええ」

「.....そう。それじゃ、俺がたくさん人殺しをしたのがばれちゃうね.....メイヴェも怒ってる？」

メイヴェは答えられなかった。ディアンの人殺しを誉めてやることはできないが、同じくらい責めることもできなかった。ディアンが助けてくれなかったら、わたしは今頃城に連れて行かれ、ディアンとルーフィスは処刑されていたはずだ。

「ルーフィスには言わないわ.....絶対に言わないわ」

メイヴェはそれだけ言って、ディアンを抱きしめた。それが今の自分にできる精いっぱいのことだった。

情けない——結局わたしは周囲の人を傷つけるだけの人間だ。ルーフィスを牢獄に入れ、ディアンを孤独に陥れ、ダーモットにまで悲しい思いをさせた。エニスレーンを守りたいと言っておきながら、復讐のことしか考えていなかった最低の小王だ。

ディアンはメイヴェの腕の中で冷たい体をふるわせながら、呟いた。

「拷問にあって吊るされて、それでも生き延びるなんてね.....ルーフィスは日頃の行いがいいからだね。やっぱり神様が助けてくれたのかなあ」

「どうして神様なのよ？ 助けたのは吸血魔のあんたじゃない」

「.....そうか」

ディアンはようやく思い当たったかのように言った。

「全然.....思いつかなかったよ。そうだよ。俺が助けたんだよね」

「しっかりして。もう心配ないから、怖がらなくてもいいのよ」

十字架で焦げた黒髪を撫でてやると、ディアンは胸に頭を預けてきた。ふるえはようやく穏やかになり、残っている篝火が暖かく感じられる。

今のわたしはディアンと同じだ。ダーモットもエニスレーンも失った。残されたものは何もない——わたしにはこの子しかない。

メイヴェエはゆっくりと囁いた。

「あんたにお願いがあるの。わたしを吸血魔にして」

メイヴェエの腕の中のディアンが顔を上げた。

「わたしを吸血魔にすれば、いいことがあるわよ。あんたはこれからずっと、一人で目覚めずにすむわ。夜中も一緒にいてあげる」

「同情？ それならたくさんだよ。ルーフィスに喉元までつめこまれてるからさ……近頃腹の中から腐ってきてる気がするくらいだよ」

「違うわ、そうじゃないの。同情じゃないのよ。わたしはあんたの気持ちがわかる。一緒にいたい。あんたを守ってあげたいのよ」

ディアンは迷いもせず答えた。

「だめだよ」

「どうして？ ねえ、わたしってひどいのよ。いちおう人間だけど、吸血魔に向いてると思う。だってあんたが男を襲ったとき、わたし見てたのよ。自分の領民だった男なのに、助けようともしなかった。あんたが殺したことも誰にも言わなかった」

「男って誰のこと？」

「酒場から連れ出した男よ。血を吸って湖に投げこんだでしょ」

「あいつか」

関心のない様子だった。

「殺した相手のことなんか、いちいち覚えてないよ」

「じゃあこれはどう？」

メイヴェエは唇をしめらせた。

「わたしは城でルーフィスを置き去りにしたの。囮にして、一人で逃げたのよ。最初からそのつもりだった。あんたたちと協力する気なんか、まったくなかったのよ」

「そんなこと、とっくに気づいてたよ。でもメイヴェエを殺さなかったらろう？ 機会はいくらでもあったのに、殺せなかったんだ」

ディアンはそう言って沈黙した。しばらくすると静かに口を開く。

「モイル族って知ってる？」

「どうしたのよ、突然？ モイル族？……どこかで聞いたことあるわ。それがどうかしたの？」

ディアンはメイヴェエを見据え、メイヴェエはディアンの目の中に、何か訴えるものを見つけた。

「たしかモイル族というのは……あんたまさか……」

「そう。俺はモイル族なんだ」

モイル族。遠い昔——それはフィルグ族に続いて五番目に、このエリルアドへ流れ着いた民族だと言われている。彼らの渡来後にデル・グレネ貴神族、さらにそのあと現在のエリルアド人と続き、この島を支配していく。

ディアンは俯き、メイヴェエに寄りかかりながら続けた。

「モイル族はこの島に流れ着いたけど、一度も覇者にはなれなかった。フィルグ族との戦いで疲れていたところに、デル・グレネ貴神族がやってきて、負けちゃったからね。不思議な力を持つ

貴神族は水や火や天候を操ってこの島を守り、楽園を築いた。モイル族は貴神族の支配下に置かれたけど、そう悪い暮らしじゃなかったらしい。やがて俺たちの一族の中にも貴神族と婚姻を結ぶ者が出てきた――貴神族の血を濃く引いた者は彼らと同じ力を持ち、一族の中でも大切にされ、尊ばれるようになった。それからエリルアド人が来た――メイヴェの祖先だね」

メイヴェはごくりと喉を鳴らした。

「最初のトゥラの戦いで貴神族はエリルアド人に負けた。そこで島を捨て、エーレをつくって、自分たちだけ移住しちゃったんだ。モイル族の中にはエーレへ連れて行ってもらえた人たちもいたんだけど、俺の先祖はこの島に残った。エリルアド人の支配するこの島で、仕方なく周辺の島々で隠れるように暮らし始めた。貧しい生活の中でエリルアド人を憎み、俺たちを見捨てた貴神族の血を守ることを一族の掟とし、島の外に出ることを拒んで何百年も命を繋いできた。バカバカしいと思わない？ いくら血を守っても俺たちはしょせん貴神族じゃないから、子供が増えるたびに不思議な力は失われていくんだ。今では貴神の力を使える者なんて誰もいないのに、貴神族の血が流れていると言って、誇りに思ってる。おかしいよ。貴神族の名残りなんて、外見くらいなものだよ。俺たちはよく妖精に似てるって言われるけど、これは妖精じゃなくて貴神族の血のせいらしいんだ」

「貴神族の血を守ろうとしてたのに、どうして島から出てきたの？」

「――モイル族の数家族が島の外に出ようと決意したのは、俺が十歳のときだった。理由は単純で、エリルアド人がベラント人に負けたからだよ。貴神族を蹴散らしたエリルアド人が今度は虐げられている、それじゃ見物に行つてやろうというわけさ。でも本当はそんなの建前だった。大人たちはどんどん豊かになっていくエリルアド国のおこぼれを頂戴しようと考えたんだと思う――その頃島では、エリルアド国には黄金の城が建ち、一日五食を腹いっぱい食べる暮らしをしている、たくさんの移民が来ているから、紛れこむのは簡単だっていう噂で持ちきりだったからね。反対する者もあったけど、結局八家族が夜逃げするように小船に乗りこんで、エリルアドの地を踏んだ。上陸してからの一族はエリルアド人を笑うどころじゃなかった。モイル族だってばれたら、殺されるんじゃないかって内心冷や冷やしてたんだよ。まあ、俺たちなんてとうに忘れ去られた民族で、名のつても殺されることはないってすぐに気づいたけどね」

ディアンはいったん言葉を切ったが、感情をこめずに話を続けた。

「それから俺たちは居場所を求めて転々とし、次第に離散していった。一年もたつと部族単位ではなく、家族単位で暮らすようになった。だって、掟を守るどころか、どこに宿をとるかなんてささいなことでも意見はしょっちゅう分かれていたし、大量の食料より少量のほうが調達しやすかったからさ。新しい暮らしの失敗はそれだけじゃ終わらなかった。王都じゃベラント人が俺たちを奴隷にするのが流行っているらしくて、奴隷商人に追われる身の上だ……笑っちゃうよね。ほんと、笑うしかないよ」

ディアンはくすくすと声を立てて笑い始めた。

メイヴェは口もきけなかった――ディアンとわたしは本当によく似ていたのだ、侵略者に蹂躪された過去まで。

しかもディアンはわたしよりずっとひどい目に遭っている。ルーフィスは言っていなかった

かーディアン一族は人口が少なく、貧しく、ディアンは口減らしのため、奴隷を求めてきた貴婦人に売られたのだとーそして彼女に吸血魔にされたのだと。ディアンの苦しみは一族の歴史に翻弄されたものだ。その原因はー。

「……すべてエリルアド人が……わたしの祖先が原因をつくったのね」

メイヴェはしわがれた声で呟いた。ディアンは赤黒い血をこびりつかせた顔で、にっこりと笑った。

「でもメイヴェのせいじゃないよ」

「だって……」

ディアンはメイヴェの腕をぎゅっとつかんで、頭を振った。

「俺はメイヴェを嫌ってないよ、そうだろ？ そりゃ、エリルアド人を積極的に好いたりはしないけど、メイヴェはべつだよ。ねえ……だからさ、俺はあいつが……ダーモットが嫌いなんだけどさ……」

ディアンはためらうように言葉を切ってから、きっぱりと言った。

「もうダーモットを許してやったほうがいいよ。それと……自分自身のことさ。そうじゃないと、メイヴェは泥棒の真似事をしたり、髪を切ったり、吸血魔になりたいなんて言い出したりしてさ……ほんと、むちゃくちゃだよ。俺、そんなメイヴェを見てられないから」

静かなディアンの言葉が耳鳴りのように頭に残った。ディアンを抱きしめていた腕さえも力を失い、すんと落ちる。メイヴェは言葉を失ったまま立ちつくしていた。

それぞれの旅立ち

夜明けまでには時間があつたが、急いでも急ぎすぎることはない。二人はルーフィスを馬に乗せて館に戻り、無言で旅支度を始めた。

ディアンはルーフィスの傷口に油薬を塗って細長い麻布を巻き、痣には湿布を当てた。ルーフィスは目を覚まさず、時おり腫れた瞼が痙攣するだけだった。メイヴェは馬車に馬をつなぎ、館の前に移動させ、荷台の空いた場所に布を重ねて敷く。そこにディアンがルーフィスを横たえた。

誰も何も言わないうちに準備はととのい、メイヴェは出発を待つばかりになった幌馬車をぼんやりと眺めた。

ディアンがよじ登るように御者台に乗った。さすがの吸血魔も疲れているようだ。泥と血にまみれ、あちこちが破れた灰色の服は、黒い上着を着なくても、闇にとけこんでいる。

「行こう、メイヴェ」

メイヴェはディアンの言葉を、どこか遠くの出来事のように聞いた。

「何してるの？ 早く乗ってよ」

足が動かない。声が出ない。血の気が引く。全身が拒絶する。

ダーモットの悲しそうな顔が目に浮かぶ――勇者の輝きを失い、傷ついた顔――ダーモットとこんな別れ方をするなんて、思ってもみなかった。

ディアンが下りてきた。

「どうしたんだよ？ 忘れ物でもあるの？ 急いで」

ディアンがメイヴェの手をとった。血の通っていない冷たい手――わたしもこの手を得れば、何かできるようになると――万能の力を持つ小王になれると思っていたのかもしれない。

メイヴェは言った。

「……そう、忘れものがあるのよ。わたし、行かない。エニスレーンに残る」

ディアンの驚く顔が見える。

「どうして？ どうして行かないの？ メイヴェを吸血魔にしなかったから、怒ったの？」

「そうじゃないわ」

「だったらどうして！ 出て行かないと今度こそ殺されるよ！」

「でも、だめなの」

「なんでいまさらそんなことを言うんだよ？ 出て行きたいって言ってたじゃないか！ 俺たちに会う前から、そのつもりだったんだろ？ そのためにルーフィスを引っかけて、あげく盗みに引っ張りこんでさ！ 全部出て行くためじゃなかったのか？」

メイヴェの体はこわばったままで、動けなかった。ディアンは恐れるように、小さく口を開いた。

「……ダーモットが好きだからなの？」

ディアンの問いにメイヴェはもう迷わなかった。落ち着いた声ではっきりと答える。

「そうよ、ダーモットを愛してるの。わたしのせいですっかり気持ちはずれ違ってしまったけ

れど、彼とやり直したいの。でもそれだけじゃないのよ。わたしもエニスレーンを守りたいの」
メイヴェはディアンの目をまっすぐに見た。

「ここはお父さまが愛したアニェック家の土地よ。戦に巻きこまれるかもしれないってときに、ここを出ることはできない。わたしがこの町を救うなんてできるはずがないと思っていただけ、まずはあんたの考えてくれたドムナルの計画を、ダーモットに伝えてみる。人間のわたしでも、何かできることはあるはずよ」

「でも、俺と契約したって思われてるんだよ……ダーモットのところへ行ったら、殺されるよ、きっと」

「契約してないでしょ、断られちゃったんだから」

メイヴェは笑った。

「大丈夫よ、覚悟してるわ。わたしの血はエニスレーンに流れてる。エーレだって、もうどうでもいい。ここより他に行きたいところなんてない。それに」

メイヴェはディアンの瞳に揺らめく美しい虹彩を見つめて言った。

「戦が起きたら、またあんたみたいな子が増える。この土地でそんなことは許さないわ。前にも言ったでしょ、わたしは往生際が悪いの。たとえ殺されるとしても、そのときまでとことんねばってやるし、死んだら、化けて出てやるから」

「ルーフィスと俺にはメイヴェが必要なんだよ。だから一緒に来てって言ってもだめ？」

メイヴェは頭を振った。

「誘ってもらってるのに、断って残ろうなんて……今頃自分の気持ちに気づくなんて……わたしってほんとバカね」

メイヴェの鼻の奥がつんと痛んだ。

「……それじゃ、俺たちとはお別れってこと？」

ディアンは寂しそうに顔を歪めた。メイヴェは頷いた。

「ごめんなさい」

謝ると、涙がこみ上げてくる。

「ごめんなさい。一緒に旅をしようって約束したのに」

ディアンはうろたえて、手を振った。

「泣くなよ。泣かれるのは苦手だって言っただろ？ もういいよ、吸血魔は万能なんだから、平気だよ。それに俺、ここへ来てから、ルーフィスの聖人ぶりに少しつきあってやってもいいかって思えるようになったんだよ。だからしばらくは、このままやっていけそうなんだ。それはメイヴェのおかげなんだよ」

「わたしの？ どうして？」

ディアンは答えなかった。かわりにきれいな顔に大人の意思を忍ばせて微笑み、メイヴェの荷物を下ろすと、再び御者台に乗りこむ。

メイヴェは馬車に寄って手を伸ばし、ディアンの手をつかんだ。

「わたしの血を飲んで」

「いいよ、鍾乳洞でももらったし。俺があんまり飲むと、メイヴェが死んじゃうよ」

「あげたいの。飲んで」

メイヴェはディアンをはなすまいと力をこめた。ディアンは苦笑する。それからメイヴェの頭に軽く手を置いて、身を屈めた。

冷たい唇が首筋に触れる――血は吸われなかった。優しいキスだった。

「ありがとう」

ディアンはそれだけ言って馬に鞭を当てた。

荷馬車の車輪がきしみながら、回り始めた。ハリエニシダの茂みと二人が泊まっていた小屋の間を過ぎ、館の敷地を出る。ブナの森に向かってまっすぐのびる道の上のにのり、止まることなく揺れながら小さくなって、やがて闇の中の森に消えた。

彼らが外の世界に行ってしまうのを、メイヴェは館の庭から一人で見送った。

館に入ると、男物の服を脱ぎ、体を拭いて清めた。それから荷をほどいて、女物の長衣に袖を通す。短い髪に櫛を入れ、頭巾をかぶり、もう一度荷をまとめ、右手にしっかりと持った。

静まり返った館を出て、ドアをぴたりと閉じた。もうこの館に戻るつもりはない。森の向こうに隠れようとしている月を見上げて、城を目ざし歩き始めた。

嘘つきな姫君

<http://p.booklog.jp/book/33659>

著者：東原恵実

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lexikon0620/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33659>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33659>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.